



PART.15

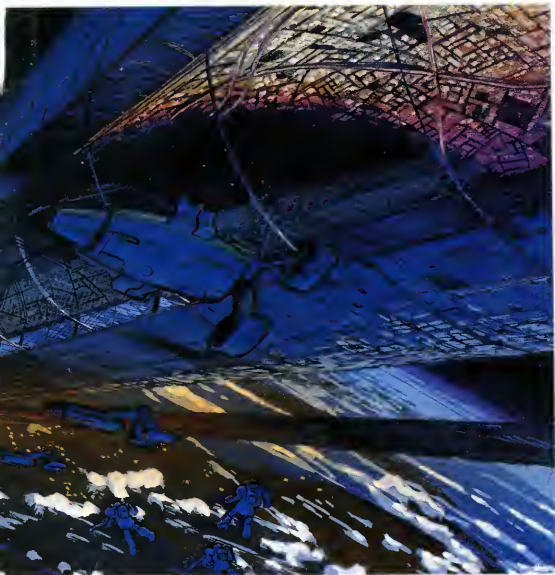
機動戦士ガンダム

戦略戦術大図鑑

1年戦争全記録

THE YEAR OF WAR

(U.C.0079.1.03)



1年戦争概略

—発端—

それは、あまりに唐突に始まった。

New Yearの歓喜の声の冷めやらぬ1月3日、ジオン公国は地球連邦政府に対し、独立戦争を挑んで来た。

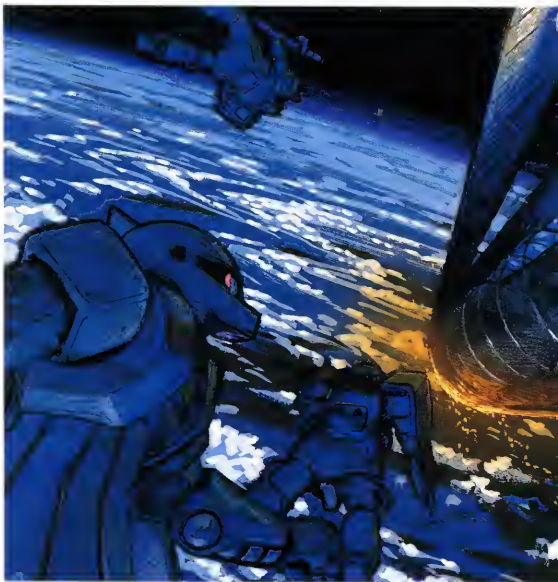
まず真っ先に犠牲となったのは、コロニーに住む非武装の住民達だった。

大量の核兵器、化学兵器の無差別投入により、わずか2日に満たない時間で、30億近い人口が死滅したのだ。

人類史上において、かくも短期間で、かくも多くの人命が失われた例は、かつてない。

この蛮行に対し、各コロニーに駐留する連邦軍は、成す術もなく撃破されていった。

スペース・コロニーは、直径6km、全長30km以上に及び、地球最大の構造物である。もしもコロニーを柱のように地面に立てれば、成層圏にまで達してしまうほどなのだ……。



奇襲攻撃に防衛体制が満足に整えられなかった事もあるが、何よりジオン軍の新兵器モビルスーツ（以下MS）に翻弄されたためである。

人の形をした、全高18mほどのこの機動兵器は、あたかも巨大な歩兵であるかのように自在に立ち振舞い、コロニーの住民抹殺を黙々と、だが確実に遂行した。

自らガスボンベを設置し、敵が来れば、手にした火器で反撃する。この柔軟な運用が可能な新兵器により、戦場はその様相を一変したのである。

補足・現在では、ジオン側の開戦予定日を、かなり以前から連邦が掴んでいたとも言われ、議会で大いに問題となっている。

THE YEAR OF WAR

(U.C.0079.01.10)



1年戦争概略

―被害―

それは、空が落ちて来るようだったと目撃者は話した。ジオン軍（サイド3）の反乱など、所詮宇宙でのめめ事にすぎないとタカをくくっていた連邦政府首脳は、その考えが甘い物だったと知らさせる事になる。

コロニー爆弾。

超巨大な構造物、スペース・コロニーを、連邦軍本部ジャブローに投下するというブリティッシュ作戦が決行されたからだ。

だが、急遽集結した連邦艦隊の奮闘もあり、ジャブロー直撃は失敗に終る。

しかし四散したコロニーの残骸は、世界各地を直撃。特

コロニー落下後の混乱に乗じ、ジオン軍は大量の地上部隊を地球に降ろした。そして大戦中期以後は、水陸両用MS隊を用い、沿岸部の連邦軍基地への攻撃を繰り返した。



にコロニー前部の落下したオーストラリア大陸は、その総面積の16%が水没。さらに落下に伴う1次災害、2次災害による被害は、全地球規模の物となった。

失敗に終わったものの、このブリティッシュ作戦によって、連邦政府は喉元に刃物をつきつけられる格好となった。

その気になれば、地球上の全人類抹殺は容易である。

そのようなジオン軍の無言の脅迫を、いやが上にも感じずにはいられなくなったのである。

補足↓ジオン軍は、仕損じたジャブロー破壊のため、再度ブリティッシュ作戦を再開。連邦宇宙艦隊は全力をもってこれを阻止、大規模な艦隊戦ルウム戦役に発展する。

THE YEAR OF WAR

(U.C.0079.3 -)



1年戦争概略 ―局地戦―

両軍が、持てる兵力のほとんどを投入したルウム戦役以後、ジオン軍は地球上に部隊を侵攻させ、地下資源の確保をもくろんだ。

もはや連邦軍にそれを阻止するだけの戦力はなく、ジオン軍にしても、地下資源採掘基地の確保以上の事は、できなかった。

こうして両軍は疲弊し、宇宙で、地上で、戦いは泥沼化していく。

宇宙では、小規模な艦隊戦と、暗礁空域（崩壊したサイド1、2、4、5の残骸の浮かぶ空間）に蠢く偵察艦の掃討などが行われ、地上では、ゲリラ部隊と正規軍の小競り

オデッサの戦いの中、連邦の従軍カメラマンが撮影した一枚。かつてない大規模な陸戦であり、もしも連邦軍がこの戦いで敗北していれば、本大戦の勝利はなかったと言われる。



合いが続いた。

すでに総人口の半数が失われていたため、両軍は慢性的な人手不足に悩まされ、年端もいかぬ少年兵が前線に送られることとなる。

戦争は、完全な膠着状態に陥ったのだ。

結局、戦局が大きく変化するのには、開戦後10ヶ月以上経過した「オデッサの戦い」を待たねばならなかったのである。

この戦いの後、地上のミリタリーバランスは、大きく変化する事となった。

補足：オデッサの戦いは、ジオンの中央アジア・ヨーロッパに広がる鉱山基地を制圧する事が主な目的だった。この戦いは連邦の圧勝に終わり、ジオン地上部隊は瓦解する。

THE YEAR OF WAR

(U.C.0080.01.01)



1年戦争概略

――終結――

地上でのオデッサの戦いに勝利し、連邦軍はジオン地上部隊に戦力を割く必要がなくなった。

かくして連邦軍は、制宙権をジオンに握られたままの宇宙で、ついに本格的な反攻作戦を開始した。

ジオン宇宙軍の戦略拠点、宇宙要塞ソロモンを奪取し、それを橋頭堡としてジオン本国に攻め入る。

最終作戦、星1号作戦の発動である。

機動力が頼りの電撃戦であり、失敗すれば、後がない事は素人目にも明かである。だが、そうしなければならぬ理由があった。

ソロモン攻防戦での一枚。この戦いから、連邦軍も本格的にMSを実戦投入しはじめた。だがほとんどのパイロットが初陣であり、数で劣るジオン側MSに苦戦させられた。



これ以上戦いが長引けば、戦争を、いや、経済活動を行うこと自体が不可能なまでに、連邦は疲弊していたのである。そしてそれは、ジオンにしても同じ事だった。

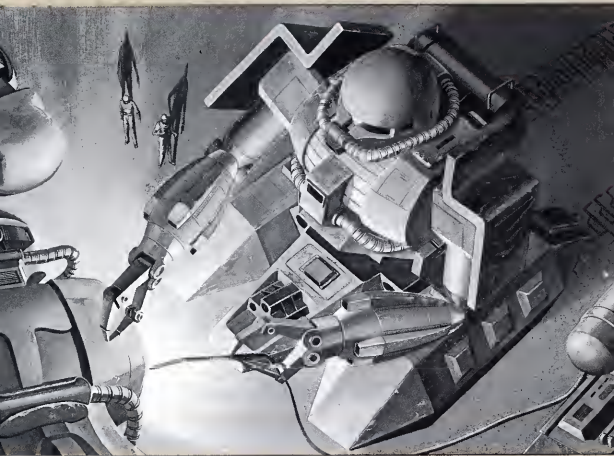
両軍ともに、この戦いが最終決戦だという暗黙の了解があったのだ。

そのためソロモン攻略戦と、続くア・バオア・クー戦は、2ヶ月前までのゲリラ戦状態が嘘のような総力戦となった。そして連邦軍は、辛くも二つの戦いに勝利を収め、本大戦の勝者となったのである。

補足↓連邦は勝利を収めたものの、すでに限界近いまでに疲弊し、ジオン内では、徹底抗戦を叫ぶ多くの部隊が地下に潜伏。戦後の乱戦期の幕を開けることとなる。

YEAR OF WAR MOBILE SUIT GRAFITY

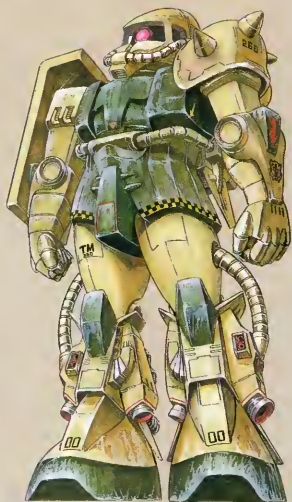
1年戦争。それは巨大な機動歩兵MSのデビューの場であるとともに、MSの数、性能の優劣によって勝敗が決するという、かつてなかった側面を持った戦いだった。1年戦争の主役MS。この巨大な鉄の兵士たちの横顔の数々を、紙数の許す限り紹介していく事に……。



MS-06V ザクタンク

大戦中の全期間を通じ、使用され続けたジオンの象徴、MS-06の派生型であるV型。損傷した06の上半身を、戦車マゼラ・アタックの車体に接続したという、前線での間に

合わせた機体。V型という形式番号も、正式な物ではない。このような使い方ができる所がMSという兵器の汎用性の証明であり、信頼性の高さを示すものでもある。

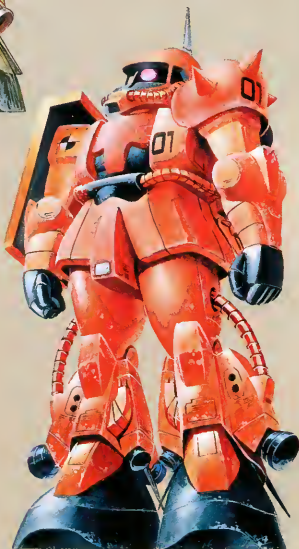


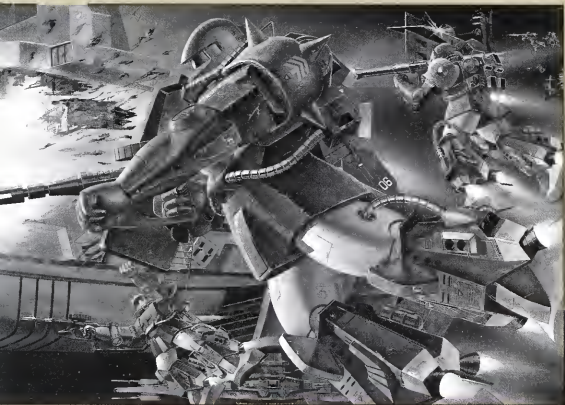
←MS-06R-1ザクII (ブレニフ・オグス中佐機)

大戦中、両軍を通じてのトップ・エース、ブレニフ・オグス中佐の愛機。ルウム戦役後の数ヵ月間、この機体で戦った。まだ隊長でなく頭部に角飾りは付いていない。なお彼は他のエースと異なり、特異なカラーリングを好まなかった。

→MS-06R-1ザクII (エリック・マンスフィールド中佐機)

本国防空本隊所属の、エリック・マンスフィールド中佐機。右肩のグリフオンのマーキングは、本国防空隊のマークであり、パーソナル・エンブレムではない。なお角飾りが左頭部に設置されているが、これは中佐の趣味であるとされる。





これは、かの黒い三連星使用の06R型。ルウム戦役でレビル將軍を捕獲した時は05だったので、これはオデッサ戦で地上に降りる直前の写真であると思われる。



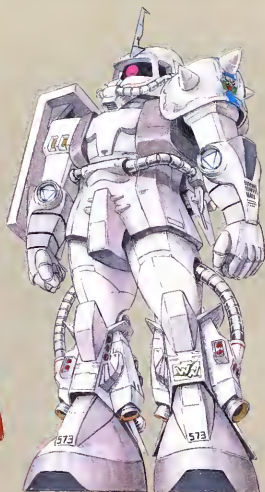
軌道機雷を散布する06F型。パイロット、撮影日時は不明。この機雷散布用バックパックを装着したMSは、機種にかかわらず、マインレイヤーの名で呼ばれた。



MS-06R-2 ザクII

(ジョニー・ライデン少佐機)

これもまた、あまりに有名なエース、"赤い稲妻" ジョニー・ライデン少佐の愛機。



MS-06R-1 ザクII

(シン・マツナガ大尉機)

"白狼"の異名を持つエースパイロット、シン・マツナガ大尉の愛機。





砂漠の砂の海から姿を現す06D型。撮影場所は、ベンガジ南方のリビア砂漠。部隊はマーキングから察するに、アフリカ第2師団108機動連隊と思われる。06のD型は防塵仕様機で、砂漠戦で威力を発揮した。

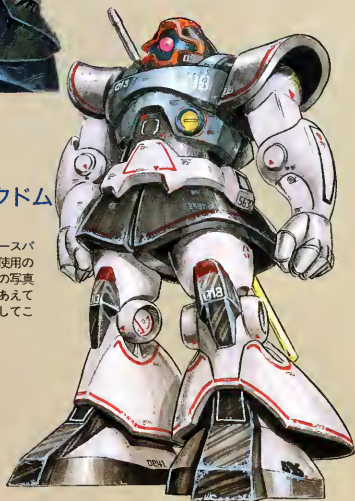


YMS-09、プロトタイプ・ドムの稼働試験中の一枚。09専用大型バズーカの、射撃照準試験らしい。場所はオデッサ基地だろうか。右側で06が、射撃の際のサポートを行っているのに注目。



←MS-07-C3 グフ重装型
(カリフォルニア基地所属)

カリフォルニア基地では、数多くの新型MS評価試験が行われていた。この07重装型も、そのうちの1機。試作された数機が11月のジャブロー攻略戦に投入されているが、その運用結果は思わしくなく、量産計画は破棄された。



→MS-09R リックドム
(アナベル・ガトー少尉機)

“ソロモンの悪夢”と称されたエースパイロット、アナベル・ガトー少佐使用の09R型。一説には、別人の機体の写真ではないとも言われているが、あえて電子ステルの磁気コメントを信用してここに掲載する。

GREAT BATTLES OF "YEAR OF WAR"

この本をお読みの皆様へ……

1年戦争……。あの忌まわしき戦いによって、多くの人々が、多くの物を失いました。それは自分の住む家であり、愛すべき肉親、友人、恋人であり、そしてまた、自分自身の生命でもありました。

私はあの時、士官学校を出たての新米士官だったわけですが、ただ自分の大事な物を奪った敵兵を倒すため、戦い続けました。

しかし戦争が終って冷静に振り返ってみれば、その感情こそが、戦火を拡大していく最も大きな要因だと気付いたのです。

戦い続ける自分もまた、相対する側から見れば、また愛すべき物を奪った憎き敵兵です。

これに気付いた時、私は戦争という物の、いえ、人という物の、大いなる矛盾を感じずにはいられませんでした。

人はなぜ、自ら憎しみ合おうとするのか、と。

もちろん、他の多くの先人達も、その事には気付いているはずですが。なのになぜ、戦争は繰り返し起こるのか、

それを知るための手がかりの一つとして、過去の戦いを知る……という試みがあります。

本書が、そんな試みの一助となれば、主筆の一人として、これに勝る喜びはありません。



ビク・ハボクック(予備役中將)

元地球連邦宇宙軍大將。現在は連邦軍資料保存センター所長。1年戦争中期、艦隊指揮オペレーターとして第2宇宙軍所属マゼラン型戦艦「ウィスコンシン」に乗務。後、特設ミサイル雷撃艦の艦長として終戦を迎える。戦後は月面第1艦隊に属し、ネオ・ジオン抗争の際には、サラミス型艦の艦長に就任。最終的には、第6宇宙艦隊司令として現役を去る。



第 1 章

戦争の発端と 両軍の戦力

一つの戦争を知るためには、それに至るまでの経緯と、動向。さらには参加国の内情を熟知しておく必要がある。

人類の歴史上、最大の戦争となった1年戦争。

50数億人もの人々を死ににおいやった、この破滅的戦争の全容を把握するため、現存しうるありとあらゆる資料を動員。戦後20数年の歳月を経て、明かされる新事実を加えて、この巨大な戦争の外郭を、可能な限り明確にした。

同じ愚行を繰り返さぬためにも、これら一連の事実を念頭に置き、後出の、戦闘の記録を読み進めて行つてほしい。それが、この大戦で死んでいった数多くの人々への、最良の供養なのだから……。

BEFORE U.C.~U.C.0079

歴史的背景

今や我々は宇宙空間に浮かぶ大地を、ごく自然な物ととらえている。しかし歴史の教科書を見るまでもなくそこに至るまでには、多くの犠牲を払ってきたのだ

開戦への序曲

一般に1年戦争と呼ばれている戦争は、そもそもサイド3に端を発した小規模な政治運動に由来する。

この戦争の発端を探るには、まずその政治運動を見ていかねばならない。

時代は、0050年代にまで遡る。

宇宙世紀も半世紀をすぎるとなると、当初の宇宙開発熱もさめ、少しづつではあるが、宇宙移民者(スペース・ノイド)たちと地球に残る人々の間に、意識のギャップが生まれはじめた。

すなわち、地球に住む者はエリートであり、宇宙移民者はそれより格が低い……という感覚が、地球在住者の中で生まれつつあったのだ。

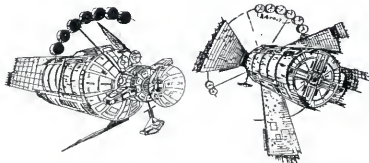
確かにこんな感覚が生まれれば、危険を払って宇宙に移民した者にとっては面白くない。何より宇宙移民者たちが不満に思ったのは、コロニー内生産物の搾取、および経済活動の一方通行化であった。

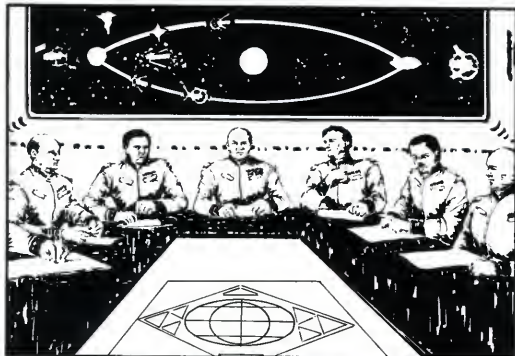
「これでは年貢をおさめる農民と同じではないか!」

とは、ある政治家の言葉ではあるが、これはまさしく当時の宇宙移民者たちの本音であろう。

彼らは自分たちの立場がいかに低く扱われていたかを、直感的に見抜きはじめたのだ。

事実各サイドに自治権は与えられてはいたが、連邦政府の属国としての感は強く、また内政干渉もはなはだしかった。この連邦政府のやり口が、開戦の大きな触媒となったのは疑いようのない事実である。





サイド3独立の動きに対し、連邦軍は宇宙艦隊の増強を決定。最悪の場合には、ジオンを軍事力で鎮圧しようと考えていたのだ。しかし十数年後、人類の半数が死に追いやられた

時、連邦軍首脳達は、その考えが甘いものだった事を悟った……。 (なおこの写真は、開戦後の物。後ろの地図に見える、ソロモンとアバオア・クーに注目)

コントリズムの誕生

このような状況の中、地球こそは生命の源であり、人類はそこから去るべきだという思想——エレズム——と、各サイドをそれぞれ、独立国家化すべきだという思想——コントリズム——が一つになり、サイドズムとでもいうべき思想が生まれつつあった。

それをもっとも明確な形で提示した最初の人物が、思想家のジオン・ズム・ダイクンだった。彼はもともと地球から離れた場所（月の裏側、すなわちラグランジュ2）に移民し、そこで政治運動を始めた。これが、宇宙世紀0052の頃である。

かねてから連邦政府に不満を抱いていた宇宙移民者達は、そのジオンの思想に共鳴した。

そしていつしかジオンの思想は、ジオニズムとも呼ばれるようになっていったのだ。

サイド独立政権

そして自分の思想に共鳴する同士を集めたジオンは、サイド3内での自給自足化のメドが立った0058、連邦政府からの独立を宣言。ここにジオン共和国を宣言した。

これは連邦政府にとって寝耳に水の事態だった。今まで従順だった飼犬に、突然手をかまれたと思ったのだ。

しかしジオンには、武力抗争を行うつもりなどさらさらなかった。あくまで話し合いにより、自治権を確立しようと考えていたのだ。

だが、そこにジオンの思想家としての限界と弱点があった。

連邦政府の報復

連邦政府はサイド3の独立

宣言に伴い、経済圧力を加え

た。そしてそればかりでなく、

示威行動として、軍備の増強

サイド3にほど近い月面での

大規模な演習なども行った。

一方ジオン側も、国防隊を

国軍に昇格させ、連邦からの

武力制圧に対し防備を固めた。

だが、0068、不測の事

態が発生する。ジオン・ズム・

ダイクンの死である。

これにより、以後ジオン共

和国はジオンの側近であり、

開国当初からの協力者でもあ

ったデギン・ソド・ザビが引

き継ぐ事になった。

ここで一つの、重要な転換

点が訪れる。デギンは、それ

までのジオンのやり方を手ぬ

るいとし、ジオン派の人間を

年・月・日

事

柄

AD・1957・10・04

1961・04・17

1969・07・20

1969

1990

1999・07・29

2005

2009

2026

2045

UC・0001

0027

0040

0045

0050

0058

0059

0060

0062

0068

人類初の人工衛星、打ち上げに成功(ソヴィエト)。

有人人工衛星、打ち上げに成功(ソヴィエト)。

アポロ11号、月面に着陸(アメリカ)。

スペース・コロニー構想の発表。

石油資源等をめぐる局地戦多発。

地球連邦政府樹立。人類移民計画発表。

太陽発電衛星第1号、軌道上に定置。

国連軍、地球連邦軍へと移行。

木星エネルギー船団、月軌道上より発進。

第1号コロニー、Lーの空域に建設開始。

宇宙移民開始を以て、西暦から宇宙世紀へと移行。

地球圏総人口、90億人を突破。

月面恒久都市、フォン・ブラウン市誕生。

総人口の40%(約50億人)が、宇宙への移民完了。

小惑星ユノー(ルナツー)、月軌道に定置。

サイド3に、ミノフスキー物理学会創設。

総人口110億に。そのうち90億人は宇宙市民。

ジオン・ズム・ダイクン、サイド3独立宣言。

ジオン共和国樹立。国防隊発足。

連邦政府、サイド3に経済圧力かける(バルド政策)。

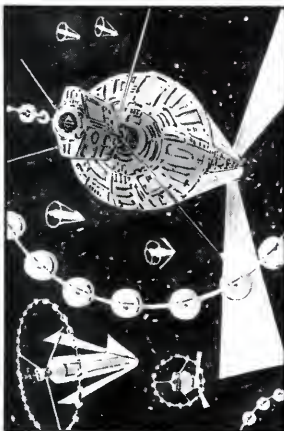
地球連邦宇宙軍、正式に発足。

連邦軍、60年代軍備増強計画発動(宇宙艦隊編成)。

ジオン国防隊、国軍に昇格。

ジオン・ズム・ダイクン死亡(後に暗殺と判明)。

戦争の発端と両軍の戦力



は、他のサイドの移民者たちの共感を呼び、多くの人材がジオン公国へと集まった。その中には、軍事技術で才覚を見せる、数多くの技術者、科学者もいた。

さらに独自に木星にエネルギー輸送船団を派遣し、資源採掘用の小惑星もいくつか押さえることに成功。また人的

資源を確保するために、コロニーを大改装し、倍の敷地面積を持つ密閉型コロニーにも仕立てた。(採光用窓までを陸地にし、コロニー内の人工太陽で明りを取る方式)

こうしてジオン公国は、着実にその軍備を拡大していきつつ、開戦への道を歩んで行ったのだ……。

0069・08・15	0070・03	0071	0072	0073	0074・02	0075・05	0076	0078・01	10 05
ジオン公国宣言。デギン・ソド・ザビ、公王にミノフスキー粒子、その存在が実証される。	ジオン公国軍、ミノフスキー粒子による特殊効果の確認実験に成功。	ジオン公国軍、メガ粒子砲の開発に成功。	連邦宇宙軍、サラミス級、マゼラン級を就役させる。	サイド7建設のため、ルナツーを月の反対側に移動。	ジオン公国軍、ミノフスキー粒子散布下における新型機動兵器の開発に着手。	ミノフスキー物理学応用による小型核融合炉の、実用型一号機が完成。	ジオン公国軍、小惑星帯に、木星エネルギー船団の継基地としてアクシズ建設。	ジオン公国軍、人型機動兵器一号機完成。モビルスーツという呼称と、MS-001という形式番号を与える。	ジオン公国軍、ミノフスキー型核融合炉搭載のMS、MS-05ザクの試作機をロールアウト。
ジオン公国軍、MS-05ザクの実戦仕様量産型機をロールアウト。	ジオン公国軍で、MS運用を前提としたムサイ級巡洋艦一番艦が就役。	ジオン公国軍、地球上での戦闘を目的とした、局地戦用MSの開発に着手。	ジオン公国軍、MS-05の強化型、MS-06ザクIIの量産開始。	サイド7の第一号コロニー、未完成ながら移民開始。	ジオン国内で、国家総動員令発令。				

U.C.0079~U.C.0080

地球連邦軍の戦力

ジオンの侵攻に、いやおうなく戦いに突入した連邦軍。
はたして開戦直前の軍備は、どの程度の物だったか!?
公式資料をもとに、確認していきましょう……

宇宙軍の創設まで

宇宙移民の開始に先駆け、地球全体の恒久的平和を維持するために、地球連邦軍は設立された。そしてその歴史は、宇宙世紀以前にまで遡る。

設軍当初は旧世紀の国連軍とほぼ同じような役割を担わされており、事実その装備も人員も、多くは国連軍からそのまま引き継いだ物だった。当然役割も、地域紛争での兵力の派遣と、災害時での緊急出動などがメインだった。

さらに宇宙世紀に入ってから、地球上からの紛争の消滅宣言（0022、当時の連邦政府が宣言した）もあり、最小限度の武装しか保有していなかった。

逆に軍備にかける予算を宇宙開発に振れたという事で、

あれほどの速さで宇宙移民が進んだとも言える。

一応は宇宙戦艦の研究や試作なども行われていたが、それこそ宇宙人が襲来してくるわけではなく、本格的な宇宙軍備の整備は行われないままだった。

しかし0050頃になると、月軌道上の6つのサイド（まだサイド7はない）の治安維持を行うために、宇宙軍の設立が叫ばれた。

これはこの頃から、宇宙移民者たちの間で反連邦運動が高まりつつあった事への、牽制行為であることに疑いの余地はない。そして同時に、0058のサイド3独立宣言もあり、連邦政府は急ピッチで宇宙戦力の強化に乗り出していくのである。

正式に連邦宇宙軍が設立さ

れたのは、0059年の事であった。

なにぶん宇宙軍などという組織は、かつて人類の歴史上になかったものであり、軍上層部は、その組織構成や人材選抜などに、大いに頭を悩ませた。

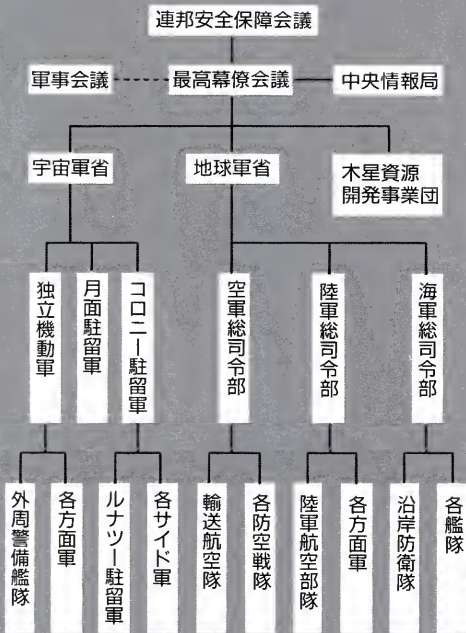
そして結局は、宇宙を一つの間と仮定し、海軍組織を模倣。人員も、連邦海軍の中から選抜することとなった。

宇宙軍の用語などが、地球の船舶関係に由来しているのは、そのような理由によるものである。

例えば、1年戦争時にその名を上げたティターンズ将軍なども、かつては海軍士官だった人物である。

もちろん、陸軍、空軍からも人材が集められたの言うまでもない。

地球連邦軍軍機構

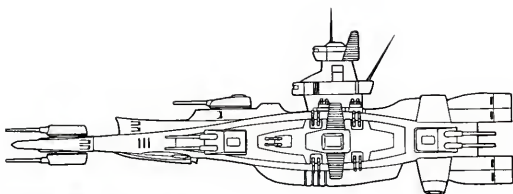


これは開戦時における機構図であり、1週間戦争、ルウム戦役などの大規模な戦いを経てからは、必ずしもこの通りに指揮系統は機能していない。指揮系統自体が一時崩壊したためだが、大戦末期には開戦時の状態にまで修復はされた。

しかし連邦軍本部ジャブローだけでは、巨大に膨れ上がった連邦軍全てを管理することはかなわず、宇宙においてはルナ

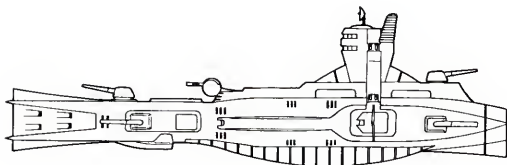
ツー、地球上ではベルファスト基地などが、補助的な本部として機能している。

ちなみに連邦軍きっての名将と詠われたレビル將軍などは、宇宙軍、地球上の各軍に対しての指揮権を連邦軍本部より与えられており、あまたの戦場で陣頭指揮をとっている。これは連邦軍の柔軟な姿勢をしめすものでなく、あくまで、人手が不足していたためである。



↑宇宙戦艦 マゼラン型

0070年代軍備増強計画の際に就役した、連邦宇宙軍の主力艦艇。技術的にはそれまでの旧世代型艦（化学ロケットエンジンを主動力とし、誘導ミサイル等で武装）の発展上にあり、大戦初期には、ジオン艦艇と互角以下の戦いしか行えなかった。だが大戦中期～後期にかけ改良が進み、特にMS搭載能力を持つようになって以後は、ジオン艦艇と同等の戦闘能力を有するようになった。



↑宇宙巡洋艦 サラミス型

マゼランと同時期に就役した艦であり、大戦後期の改造型完成までは、ジオンの同規模の艦艇の、4割がたほどの戦闘能力しか持ち合わせていなかった。なおMS搭載能力を有する後期型（航空巡洋艦型）をはじめ各型（防空型、偵察型など）が存在するが、外観の差異はほとんどない。これは当初よりオールパーパス艦として設計されており、大規模な改装が必要なかったためである。

■地球連邦軍 宇宙艦艇

連邦軍の宇宙艦艇は概して設計概念が古く、レーダー管制下での戦闘を想定して建造されている。それでも新時代のビーム兵器と称されるメガ粒子砲を搭載しており、総合性能は、ジオン軍艦艇にそれほど劣るものではない。

しかし最も致命的だったのは、MSの搭載

能力の有無だ。ジオンのほとんどの艦艇がMS搭載能力を持ち、機動空母としての機能を有していたのに対し、連邦の艦は、あくまで“戦艦”でしかなかった。ただし大戦後期にはMS運用能力を付加。ようやくジオン艦艇と同規模の戦闘能力を持つようになった。

戦争の発端と両軍の戦力

宇宙艦艇の建造

当初宇宙艦艇は、旧世紀からの技術を引きずった、化学燃料ロケットを主体にした物が作られた。兵装はミサイル等が主流であり、電子管制装置と連動した機銃などが装備されている程度だった。

当然この時代の艦に大気圏突入・離脱能力などない。

それでも、ろくな戦力などないジオン公国を威圧するのには、十分だったのだ。

本格的な宇宙艦艇が登場するのは、ジオン公国で完成されたミノフスキー物理学が流布して、それを取り入れるようになってからである。

これにより小型で出力の高い反応炉が完成し、その電力とミノフスキー粒子を応用したビーム兵器、メガ粒子砲。

が搭載可能になったのだ。

こうして生まれたのが、0

070年代軍備増強計画の際に就役した、サラミス級巡洋艦とマゼラン級戦艦だ。

そしてそれ以前に、月の反対側に定置させ、軍事基地化させていたルナツー（本来は資源採掘用に月軌道上に運ばれた小惑星）とともに、確固たる宇宙戦略基盤を築いたのである。

しかし宇宙をその祖国とするジオンに比べ、連邦軍側はまだまだ宇宙戦闘に関しては素人だった。

それに対してジオン軍は、新型機動兵器MSや、その運用を目的とした宇宙艦艇（詳細は後述）を用い、連日連夜、厳しい訓練に明け暮れていた。劣る戦力を、優れた戦術でカバーしようとしていたのだ。

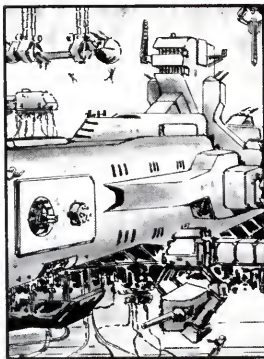
連邦軍の誤算

なお開戦時の宇宙軍の兵力は、以下のようになっている。

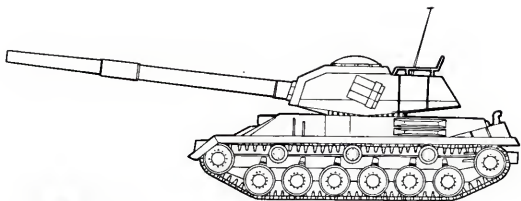
- 戦艦、巡洋戦艦×92
- 巡洋艦×473
- その他戦闘用艦艇×620
- 補助艦艇×1340

宇宙軍だけで、ゆうにジオンの5倍近い兵力である。これに地球上の海上艦艇や地上部隊を含めれば、ジオンの総兵力の10倍近くにもなるのである（総兵員数は86000万）。

ただし連邦軍はMSを保有しておらず、また地球上の部隊も本土決戦などを考えていなかったため、古色蒼然とした物ばかりだった。

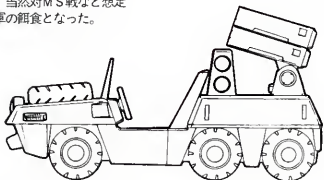


連邦軍の艦艇の多くは、ジャブローをはじめとした地球上のドックで建造された。そして完成後は、ブースターを装備し、軌道上へ送られるのである。地球至上主義の、連邦軍らしいやり方と言える。



↑主力戦車 61式

連邦陸軍の主力戦車……というにはあまりに非力すぎる性能の車両であり、そのテクノロジーも、旧時代（宇宙世紀以前）から進歩していない。当然対MS戦など想定しうるべくもなく、ジオン侵攻軍の餌食となった。

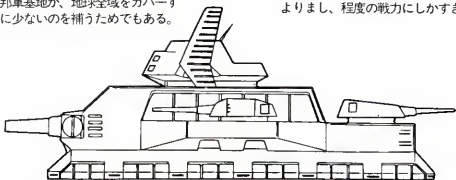


↑軍用エレカ

↓陸上戦艦 ビッグ・トレイ型

機甲部隊などの、移動司令基地としての役割を果たすべく建造された。これは連邦軍基地が、地球全域をカバーするのに少ないのを補うためでもある。

各コロニーの駐留軍が保有している軽戦闘車両。もちろん防衛のための兵器であるが、対MS戦においては、ないよりまし、程度の戦力にしかすぎない。



■地球連邦軍 地上兵力

連邦軍は、ジオン恐るるにたらず、という意識を持ち続けていた。そのため宇宙艦艇に比して、地球軍の軍備は、満足のいくものではなかった。空軍は大気圏上層での水陸作戦を担うため、それなりの軍備を有していたが、陸軍は旧式兵器の博物館ともいいうよう

な有様だった。一方海軍は、多少時代遅れの感はあるものの、三軍の中では、最も兵器の質も安定しており、兵の練度も高かった。

だが、緒戦のコロニー落しによって引き起こされた気象異変により、海上のほとんどの艦隊が海の藻屑と化してしまったのだ。



連邦軍兵士達の日常の表情を捉えたひとコマ。一時は安定した収入が入るという理由で志願者の多かった連邦軍だが、開戦前の数年は、戦争を忌避して退役する者が増え、志願者の数も激減した。

それでも緊張感のない地球上では、開戦ま

で、平穏とした空気が漂っていた。

この写真も、開戦前のスナップである。

撮影者などは不明だが、後方のメディア型輸送機のシリアルなどから、北米方面と推察される。北米のジオン侵攻の際、この写真の兵達は、いかに戦ったのだろうか……。

兵士たちの意識

ここで目を転じて、ソフトウェア、すなわち兵員たちの状況を見てみよう。

開戦前の連邦軍は、それこそ戦争を知らない軍隊であり、兵たちの間には、士気などという言葉は皆無に等しかった。ジオンが台頭してきた時期においてもなお、たかがサイド一つの反乱など、1ヶ月もあれば鎮圧できるだろうと考えていたのだ。

軍上層部では、兵器納入に際するブラックマネーのやりとりが轟かれ、また士官たちは、身の保身と出世しか考えていなかった。一般兵士への志願者は少なく、脱走事件や不祥事などが、後を立たなかった。

しかし中には、昔ながらの

軍人氣質を持った者も、わずかではあるが、いた。

開戦時に、第2宇宙艦隊司令の立場にあったレビル中将（後に大將）とティアンム少将（後に中將）。連邦海軍のパツフェ中将が、その代表格であろうか。

彼らは常に前線に立ち、兵たちの士気を鼓舞して回った。だがしよせんは少数派であり、連邦軍全体の意気は、低く消沈していたのである。

だが大戦も末期になると、戦い慣れた兵が少しずつ増えてはくるのだが、それはあくまで前線の兵たちだけの話。軍上層部では、やはり後方でぬくぬくしているだけの、烏合の衆にすぎなかったのだ。

U.C.0079~U.C.0080

ジオン公国軍の戦力

小数精鋭主義に徹し、数十倍の連邦軍を相手に戦ったジオン公国。その軍構成と兵器、兵員の質などを、おおまかに解説。いかにしてジオンは戦ったのか!?

ミノフスキー粒子

0069、まるでジオン公国誕生を祝うかのように、公国内の物理学者Y・T・ミノフスキー博士は、ミノフスキー粒子による特殊効果の確認に成功した。

ミノフスキー粒子とは、極めて強力な帯電性質を持った粒子で、この粒子を散布することにより、電波の拡散、吸収が行われる。

かねてからジオン国内で軍事利用が考えられ、研究されていたこの粒子だが、ついにその特殊効果が実験で確認され、ジオン軍首脳部は色めきだった。

つまりは、この粒子を有効利用することによって、数と経済力で優位に立つ連邦軍を圧倒しようと考えたのだ。

まずミノフスキー粒子の性質を利用し、小型核融合炉と高出力ビーム兵器「メガ粒子砲」を開発した。そしてそれらを搭載した宇宙艦艇の建造に取りかかったのだ。

だが名称はともかく、連邦軍もミノフスキー粒子の研究は行っていたし、諜報部の活躍により、その秘密の一部もすでに、連邦の手に渡っていた。

しかしジオン軍が最も注目していたのは、ミノフスキー粒子が生み出すハードウェアの変化でなく、ソフトウェアすなわち戦術の変化の方だった。

ミノフスキー粒子をある一定量散布すれば、その空間内では、ごく至近距離の電波通信しか行えなくなる。するとどうなるか。電波探知を主と

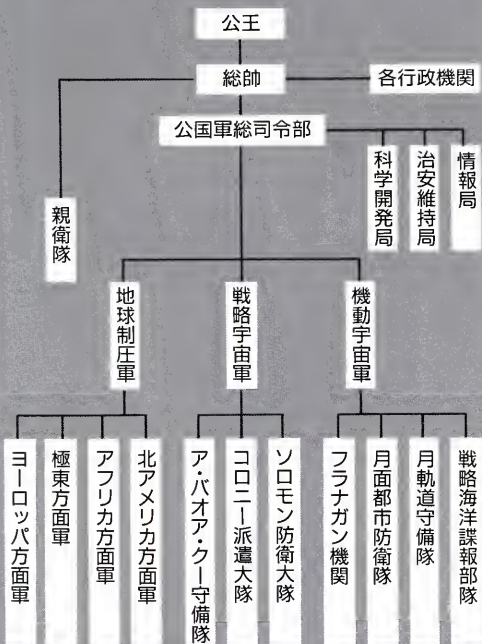
した誘導兵器が使用できなくなる上、高度な索敵機器も使用不能になる。要は、戦争自体が、旧時代然とした白兵戦主体になると考えたのだ。

同じミノフスキー粒子の技術を持つていながら、ここまではシミュレートしたのはジオンだけだった。

かくしてジオン軍は、高性能な艦艇の建造を急ぐ一方、ミノフスキー粒子散布状態で威力を発揮する、新時代の白兵戦用兵器の開発に取りかかった。

もちろんその一方で、ミノフスキー粒子散布下の様々な状況もシミュレートされ、それに対応する戦術も練られた。しかし同時期の連邦軍は、あくまでレーダー等の使用を前提とした演習しか行っていないかったのである。

ジオン軍軍機構



ジオン公国（公国は軍・政一体の星を成しているため、軍機構は行政組織と密接に関わっている）は御存知のように独裁専制国家だったために、軍機構はあくまで書類上の物、という部分が少なからずある。特にザビ家一党とその周辺の者は、しばしば指揮権の範囲をはずれた方面にも干渉している。

各機構ごとの采配についても、ギレン、

キシリア、トズル、いずれかの承諾、許可なくしては、決定を出せないような有様だったのである。

またザビ家兄弟間の確執は、大戦後期特にはなほだしく、ジオン共通の危機の際にも、自分らの損益でしか物事を進めなかったとされている。

これも、名前だけの公王、デギンの優柔不断に問題があったと考えられる。

■ジオン軍 宇宙艦艇

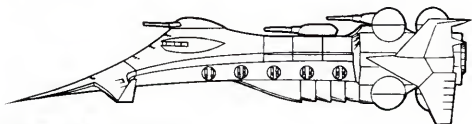
ジオン軍宇宙艦艇は、建造当初からMSの運用を前提に建造されている。これが、緒戦時におけるジオン軍の大勝利の秘密である。

また、数の上で圧倒的に連邦軍に劣るため、各艦に、それぞれMS搭載能力、砲戦能力、雷撃戦能力などが与えられた上、航続距離も長

く、高性能のオールパーパス艦として完成させている。特に、大戦後期に完成したザンジンバル型機動巡洋艦にその傾向が強く見られ、大気圏突入～離脱能力のほか、当然のごとくMS搭載能力を持ち、無補給で地球～火星間を往復できるだけの能力を秘めている。

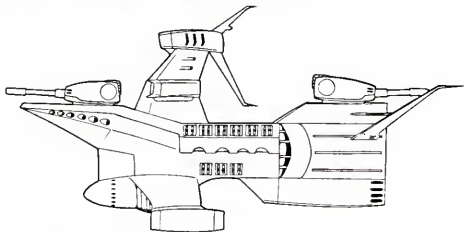
↓宇宙戦艦 グワジン型

連邦のマゼラン型5隻にも匹敵するという能力を持った、ジオン軍最強の艦艇。MS 8個小隊（24機）を搭載し、火器も充実している。



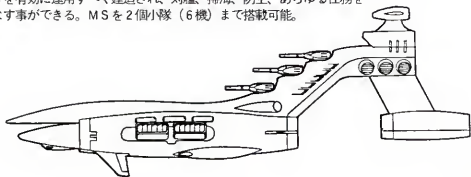
↓宇宙重巡洋艦 チベ型

やや旧式に属する艦だが、戦争突入前に改装され、MS 3個小隊（12機、18機搭載可能な型も存在）を搭載する。攻撃力はムサイ型を上回る。



↓宇宙巡洋艦 ムサイ型

MSを有効に運用すべく建造され、対艦、掃海、防空、あらゆる任務をこなす事ができる。MSを2個小隊（6機）まで搭載可能。



戦争の発端と両軍の戦力

モビルスーツ

高機動性を秘めた白兵戦用兵器は、空間作業ポッドをもとに、0071より開発が進んだ。そしてその形状が、徐々に人型に近づいていったことから、いつしかその兵器はモビルスーツと呼ばれるようになっていった。

その名前は、操縦者が着込む機動服という意味合いと、MOBILE・SUIT(Space Utility Instruments Tactical)の意味を兼ねている。

ミノフスキー粒子応用の超小型反応炉を搭載したMS-04を経て、最初の量産型機MS-05が完成したのは、0074の事だった。

この新兵器、MS-05には「ザク」という名称が与えられ、稼働試験が続けられた。

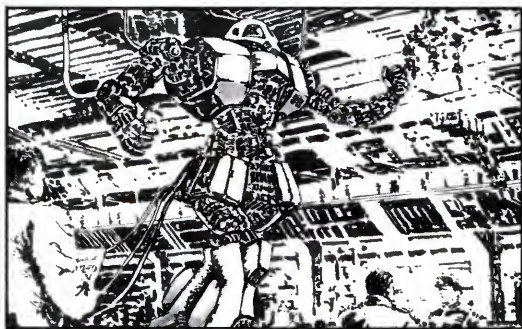
このザクの性能は素晴らしく、ギレン・ザビはそのテストを見て、「これこそ今のジオンに必要な兵器だ!」と叫んだという。

さて、この新型兵器モビルスーツ(以下MS)であるが、形こそ人型ではあるが、その全高は18m近くもあった。

しかし、それでもなお推進剤や反応炉の作動限界により、行動時間と航続距離は大幅に制限されていた。

そのためジオンは、このMSを有効に運用すべく、建造中だった艦艇全てに、MS搭載能力と補給能力を持たせた。MSを中核とした、機動艦隊の誕生である。

かくしてジオン公国軍は、連邦軍が予期すらしていなかった超兵器の開発に成功したのである。



MS開発は秘中の秘とされ、MS-05の実戦量産型機が完成されるまでは、開発スタッフ、軍関係者に、徹底した箱口令が敷かれた。この機密保持は徹底されており、ドズル・ザビ級の人物ですら、工場内への出入りの際には、厳重な身体検査が行われたという。(ド

ズルはこれに対し腹を立てたりはせず、逆に身体検査をした兵を誉め讃えたとされる)

だが、それでも連邦の情報収集能力は絶大で、MS-05についても、開発4ヶ月目にして、その設計図面が連邦技術部の手に渡っている。

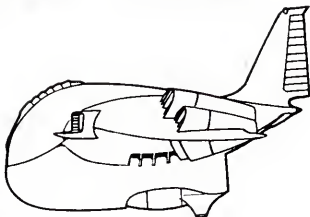
■ジオン軍 地上制圧部隊

スペース・コロニーが母国であるジオン軍は、航空機を作る基本的なノウハウを持ち合わせていなかった。いかにコンピュータのディスプレイ上でシミュレーションを行っても、実際の飛行試験のデータなくしては、満足な物はできない。しかし優秀なジオン技術陣は、

宇宙機の制御技術を応用し、機動性の高い航空機を多数生み出した。それがドップ型小型戦闘機（なんと、反動推進機で姿勢制御を行う！）であり、ガウ攻撃空母であった。だがその形状は、通常の航空機を見なれた我々にとって、あまりに奇異である。

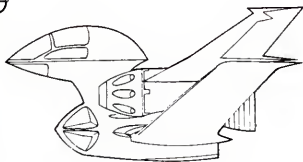
→攻撃空母 ガウ

限られた拠点しか持たない地球上のジオン軍が、その行動範囲を広げるべく建造した空中要塞。ドップ型小型戦闘機を左右フライトデッキに4機づつ、計8機搭載。さらに前部格納庫には、MS1個小隊（3機）が搭載できる。本機自体の武装も、メガ粒子砲4門、対空機銃、各種爆弾など充実している。



→小型局地戦闘機 ドップ

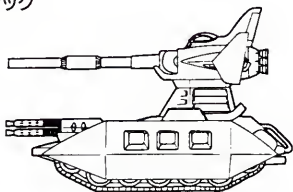
航空兵器の開発では一歩も二歩も遅れていたジオン軍が、宇宙機の技術を応用して作り上げた戦闘機。その姿勢制御には在来の航空力学だけでなく、バーニアによる反動推進が併用されており、機動性は著しく高い反面、航続距離は異常に短い。従って運用においては、ガウのサポートが不可欠である。



→機動戦車 マゼラ・アタック

高価なMSだけでは地上の全戦線を支えきれないと予測していたジオン軍が、補助兵器として開発した大型戦車。車体上部は本体より分離し、独立した対地ホバー・ヘリとして機能する。

（分離後、上部をマゼラ・トップ、下部をマゼラ・ベースと呼称）これは敵の戦車の上面装甲を撃ち抜くための能力である。



戦争の発端と両軍の戦力

総合戦力

ジオンは、連邦と較べたときの国力の非力さを、骨身にしみて理解していた。そのため彼らが勝つためには、神速の速攻を利した、短期決戦しがありえなかったのだ。

ギレン・ザビは開戦に際して関係者たちに、この戦いを1ヶ月で終わらせてみせると語った。

また宇宙艦隊を指揮する将官たちにしても、

「我がジオン機動部隊は、3ヶ月間なら、思う存分に暴れましましょう。しかし、あくまで3ヶ月間です。それを越えるまでに、条約なり何なりで戦いを終結させていただきます」

と、明言していたという。さて、実際問題、ジオンの

総合戦力はいかほどの物だったのか。

ここに信頼できる資料がある。戦後入手された、政務官がギレン宛に送った軍事白書であるが、これによると、主力となる宇宙艦艇は、

●戦闘用艦艇×179

(戦艦×8、重巡×42、軽巡×108、他×21)

●特務艦艇×85

(工作母艦、揚陸艦、突撃艇、探查艦、練習特務艦、他)

●雑役船×240

(補給艦、曳航艇、自航ドック、曳航艦、他)

●特設艦艇×110

(特設雷撃艇、特設巡洋艦、特設ビーム砲艦、他)

となっている。特に戦闘用艦艇の数だけでみれば、連邦軍の4分の1以下という有様である。(ちなみに総兵員数は1300万人弱で、連邦軍の6分の1近くである)

いかに建造中の艦船が多数あったとはいえ、あまりに少ない数である。唯一の勝算は、先にも書いたMSの存在と、各戦闘用艦艇に、MS搭載能力を持たせていた事だろう。

例えば開戦時配備されていたMSの数は、初期量産型のMS-05が820機、新型のMS-06(各型含む)が3200機にも達する。ジオンにしてみれば、少ない艦船で敵を叩くには、MSを有効運用せざるを得なかったのだ。ジオンはMSパイロットの実戦訓練のため、各地で起こった小規模な動乱の際に、M

Sを秘かに派遣。運用試験を兼ねたミッションを行った。

連邦も、かねてから情報だけは入手していたMSの存在を目の当たりにしたのである。

この際にMS-05、06の実戦部隊は、少数で多大な戦果を上げてはいるが、連邦はそれを過小評価した。せいぜい巨大な人型の兵器に、前線の兵達が恐怖にかられたのだろう、としか思わなかった。

これが後に、連邦の命取りになった。すでに連邦も、一部の推進者の働きでMS開発を行ってはいしたが、いまだ実験段階を出す、ジオンのMSに対しては、艦艇の対空火器と、トリアーエズ型宇宙戦闘機で間に合うと判断したので。そして0079、1月3日、ついにジオン独立戦争の火蓋が切って落とされた……。

兵隊よもやま話——①

両軍兵士たちの生活スタイル

「連邦兵、命の値段がガム4枚。煙草だったら5本分」
連邦軍兵士の間では、このような言葉が、自嘲気味によく使われた。

これは支結される嗜好品が、前線の兵で1日ガム4枚、煙草5本だった（後方の兵は、ガム3枚と煙草4本）ことからきている。

彼らはこのような言葉を皮肉まじりにもらし、日頃のうさを晴らしていた。

特に、ジオンとのゲリラ戦が続く地球上での兵の生活の荒れようは想像以上で、民間人の家に入り込んでの略奪、暴行が相次いだ。

これは士官学校を出ていない限り、どんな勲功を立

ても大尉どまりだった連邦軍の体質も影響している。さて、一方のジオン軍はどうだったのだろうか。

彼らは建国のための戦争という使命感もあり、また勲功さえ立てれば將軍の位も夢でなく、そのため、自ら進んで危険な任務に参加する者も多かった。

位さえ上がれば、カスタムメイドの機体も与えられ待遇も大幅に向上するといふ特典もあったからだ。

また地上にいる兵にとつては、一刻も早く、清潔なジオン本国に戻りたいという欲求もあった。

出世すれば宇宙軍に配属され、自らの艦も与えられ

るのだ。

事実、ジオン軍の将官の多くは、現場での叩き上げの兵も多かった。

そのような目標があるために、結果的にジオン兵の

規律は良く行き届き、占領下の都市などでも、連邦兵のように、非人道的行為に走る事は、まずなかった。彼らは常に戦場での、良き紳士たりえたのだ。





第 2 章

各戦線の局面と 戦局の推移

0079、1月3日。

人類が存続する限り、この日が忘れられることは、ないだろう。

完全独立を果たすべく、ジオン公国は、地球連邦政府に全面戦争を仕掛けてきた。

しかし一見崇高な目的を掲げていながらも、実際は、ジオンの侵略戦争そのものであった。

特に開戦からの1週間で、総人口の3分の1近い30億人が死滅した。これを蛮行と言わずして、なんと言おう。

ではこれより、その、血塗られた凄惨な戦いの推移を見ていくことにしよう。

我々の肉親が、隣人が、何の意味もなく死んでいった、あの呪わしき戦争の詳細を。

1年戦争戦場地図「地球上」

(UC0079・1・3、0080・1・1)

地球上では、おもにゲリラ戦が繰り返られた。戦線の大きな変化が現れるのは、オデッサ戦以後である。

ジオン軍カリフォルニア基地

本来、連邦海軍太平洋方面総司令基地だったが、ジオン侵攻部隊にほぼ無傷のまま接収された。以後はジオン潜水艦隊の母基地となり、また地球侵攻部隊の、最高司令本部ともなった。



ミッドウェイ会戦 (ハワイ諸島上陸戦)

8月11日～14日。連邦軍の残存艦隊が、ハワイ本島の軍港を奪回すべく決行。ジオン軍は水陸両用MSを初めて本格的に投入。それを撃滅する。

連邦軍本部ジャブロー (ジャブロー攻略戦)

地球連邦軍の総司令本部であり、最大級の軍事生産施設。コロニー落しの失敗以後、何度か攻撃が行われているが、すべて不成功に終わっている。

オデッサ（鉱山基地）

（オデッサの戦い）

11月7日～9日。連邦軍のヨーロッパ反攻作戦。この戦いの勝利により、地球上のミリタリーバランスは一変。これは他の方面軍も、疲弊の極にあったためである。

ジオン侵攻作戦

（中央アジア戦線）

2月7日～。ジオン軍侵攻部隊は、主に中央アメリカ、中央アジア～ヨーロッパの2つの地域に大量投下された。特に中央アジアでは、2月いっぱいの間、一進一退の攻防が繰り返された。



アフリカ掃討作戦

（アフリカ戦線）

12月5日～15日。アフリカに立てこもるジオン軍を一掃するため、連邦軍は大規模な掃討作戦を行った。しかし大量の兵力を投入しても、地下に潜伏する地上軍をせん滅できなかった。

コロニー落下地点

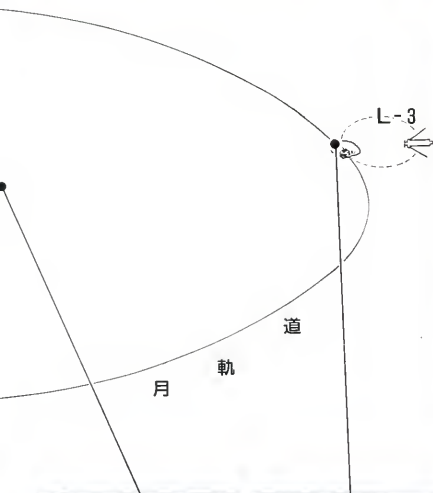
（ブリティッシュ作戦）

1月10日。ジオン軍は強固な岩盤に守られたジャブローを破壊するため、コロニー落としを決行。しかしコロニーは大気圏上層で四散。その前部は、オーストラリアに壊滅的被害を与えた。

1 週間戦争 (サイド1・2・4)

1月3日～10日まで。サイド1、2、4という三つのサイドに、ジオン軍は奇襲攻撃を敢行。熱核兵器と化学兵器の無差別投入により、30億近い人口が失われ、また各サイド

のコロニーは崩壊状態となった。さらに8日から10日にかけて、ブリティッシュ作戦と呼ばれる“コロニー落とし”が決行された。これにより地球上でも、2億人の死者が出た。



地球侵攻作戦

2月7日より。ジオン軍は当初予定していた戦争の短期終結が不可能と判ると、速やかに地球侵攻作戦を決行。長期化に備えての、地下資源などの確保を行った。

連邦軍基地ルナツー

連邦宇宙軍の唯一の拠点。ジオン本国から最も離れた空域に位置するため、大規模な攻撃は受けていない。大戦後期の連邦軍の反攻作戦は、ここをなくしては成立しなかった。

1年戦争戦場地図 [宇宙]

(UC0079・1・3～0080・1・1)

地球圏。地球と、その衛星である月の軌道内のほぼ全域を舞台として戦われた1年戦争の、戦場を再確認しよう。

ア・バオア・クー攻略戦

12月31日。連邦軍はソーラ・レイ照射により、主力艦隊の3分の1近くを失いつつ、本土侵攻作戦を遂行。結果、ア・バオア・クーは陥落し、ザビ家一党も戦死。臨時に組織されたジオン共和国政府は、終戦協定を受け入れた。

ソロモン攻略戦

12月24、25日。ジオン宇宙軍の戦略拠点ソロモン。連邦軍はここを奪取し、ジオン軍の行動範囲を縮小させると同時に、ジオン本国侵攻への足がかりにしようとした。連邦軍は本格的機動艦隊を投入。ソロモン奪取に成功する。



ジオン公国本国

本大戦で、最も戦争の被害を受けていないコロニーである。月の裏側という位置関係のためか、反地球連邦運動の温床となった。この本国が戦火に巻き込まれる直前に、今次大戦は終結したのだ。

ルウム戦役 (サイド5会戦)

1月14日～17日。再度コロニー落しを行おうとするジオン艦隊と、それを阻止すべく集結した連邦艦隊が接触。かつてない、大規模な艦隊戦を行った。これが後に言うルウム戦役で、数で遥かに優勢の連邦軍が大敗を喫した。

U.C.0079.01.03~01.10

開戦〜1週間戦争

宣戦布告後、最初の一撃は、鬼神の速さで行われた！
後に言われる、3秒間の布告である。この戦いで、人類は、その総人口の半数を死に至らしめた……

3秒間の布告

0079、1月3日、7時20分。

ジオン公国は1年以上前から予定されていたこの日に、地球連邦政府に対して、独立戦争の宣戦布告を行った。

その宣戦の布告から実際のジオン艦艇の攻撃開始までの間が、わずか3秒間しかなかった事から、これを後に「3秒間の布告」と呼ぶ。

その時のために周到に配備されていたジオン軍宇宙艦艇は、地球周囲軌道をめぐる連邦パトロール艦隊に、奇襲攻撃を仕掛けたのだ。

「ジオンの栄光への歴史は、この一戦から始まる！」指揮官達は、そう部下を鼓舞した。一方、虎の子のMSを中心とした機動艦隊は、サイド1、

2、4に牙を剝いた。ジオンの真の目標は、このコロニーの方にあつたのだ。

非武装の罪もないコロニーを攻撃した理由の一つ。連邦軍への力の誇示である。また、連邦軍の拠点撃破の

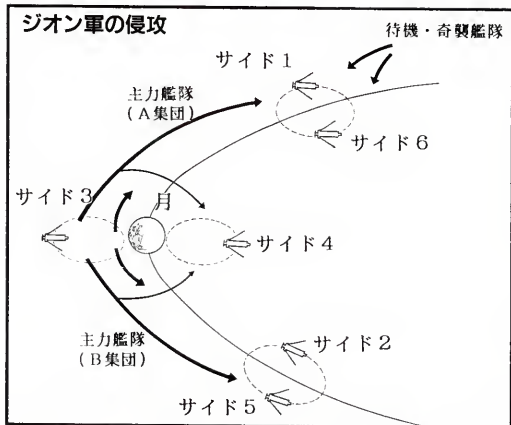
意味もあつた。

ジオンに賛同する者はすでにサイド3に移民していたという事もあり、反地球連邦派の宇宙市民を敵に回すことはない……という判断も、ジオン側にはあつたのだ。



開戦直前（直後？）に撮影されたとおぼしき、戦意高揚フィルムの中のひとコマ。無数に並ぶ艦艇のいくつかは、CGにより、その数を増やしてある。このようなフィルム、写真を数多く発表し、一般市民からの自発的協力をあおった。

ジオン軍の侵攻



MSによる破壊

各サイドの駐留軍は、そのほとんどが奇襲攻撃により、満足に防戦体制を整えられぬまま撃破されていった。

「敵は……18mの機動歩兵!?」
「馬鹿な! ジオンには一つ目巨人でも住んでいるのか!」

前線の兵は初めて見るMSに狼狽。対処の手もなかった。ジオンの一つ目巨人たち……

MS隊は、妨害らしい妨害も受けず、熱核弾頭装備のバズーカを用い、無差別に各コロニーをせん滅していった。

またコロニー内の全市民を殺戮すべく、神経ガスG3も大量投入された。このガスは無色無味無臭のガスであり、皮膚に付着しただけでも死を促す恐るべき物だった。

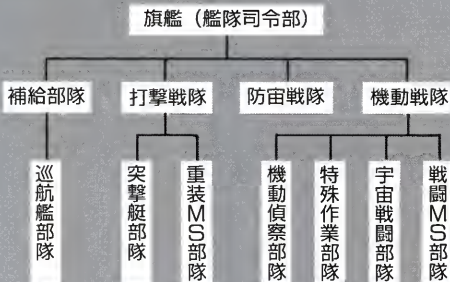
これを密閉空間内のコロニーで使用したのだ。

MSはこれらの作業を自らの手で行いつつ、敵が現れれば即座に反撃できるという強みもあり、その恐るべき作業……28億人以上を殺戮する恐怖の作業は、信じがたい速度で進んだ。

しかしG3のタンクをコロニーに接続する際に上層部は、一般兵士に「致死性のない催涙ガスである」としか説明していなかったという。

この暴挙に対して、連邦軍は即座に対応できないままだった。何しろ濃密なミノフスキー粒子（もちろんジオンが散布した）により各サイドとの交信は途絶え、マイクロ波通信などの手段で交信可能になっても、話すべきコロニーの住人は、すでに死滅していたのだから。

開戦時のジオン機動部隊編成図



核弾頭装備のバズーカをかかえた、MS-06（F型）の巨体。その背後では、別のMSが放った核弾頭の光球を確認できる。下方に広がるコロニーは、写真裏のメモを信じる

ならば、サイド2、第14番コロニー。

コロニー自体は数発の核弾頭の命中にも比較的原型を保っているが、中の人間は放射能の洗礼を浴び、生き残る確率は0に等しい。

各戦線の局面と戦局の推移

年・月・日	戦 局 の 推 移
01.03 07:20	ジオン公国、連邦軍に対して宣戦布告。
08:50	ようやく連邦の全艦隊に、戦争勃発の報告が行き渡る。
01.04 21:30	サイド2、第8番コロニー“アイランド・イフィッシュ”、正規の軌道をはずれ、地球への自由落下を始める。
01.05 04:50	攻撃可能位置にいる連邦艦隊集結。
01.08 13:15	ティアンム提督指揮の第4艦隊、ジオン護衛艦隊と交戦。
16:10	第4艦隊、70%以上の損害を受け後退。
01.10 08:27	“アイランド・イフィッシュ”前部、大気圏に突入。
08:35	アラビア上空にて、“アイランド・イフィッシュ”崩壊。
08:41	オーストラリア東岸に、崩壊したコロニーの前方部分、落下、激突。
09:00	衝撃波による第一次災害発生。
	続いて、津波などの第二次災害が発生。
	ジオン護衛艦隊、作戦の失敗確認後、後退。

プリティッシュュ作戦

宣戦布告よりわずか40時間で、三つのサイドの住民、約28億人が死滅した。

「これは許されざる暴挙である！」連邦政府高官の叫びも虚しく、ジオンは、国力の少ない自国に勝利をもたらす空前絶後の計画を実行に移した。後に言われる、コロニー落下である。

1月4日、21時30分、MS、作業ボッド等により補強された、サイド2の第8番コロニー「アイランド・イフィッシュ」は、増設された核バルスエンジンに灯をともしられ減速。地球の重力に引かれ、自由落下に入った。

「愚劣なる地球市民に対する、これは裁きの鉄槌である。神の放ったメギドの火に、必ず

や彼らは屈するであろう！」ギレン・ザビは鼻息も荒く、声高に宣言した。

ジオンが選んだコロニーの落下地点は、南米大陸の連邦軍本部、ジャブローだった。

ジャブローには強固な岩盤に覆われた地下空洞に作られた超巨大施設であり、核の直撃を受けても耐えられるとされていた。

だがコロニー落着の衝撃は、ヒロシマ型原爆300万発分にも相当する。これで破壊できぬ建造物など、地球上にありはしない。

これは、かねてから何度もシミュレートされた作戦だった。

ジオン軍はこの作戦を、コロニー（植民地）を失いその力を弱めた大英帝国になぞらえ、プリティッシュュ作戦と呼称した。

■ジオン軍の新兵器群と戦術

ジオン軍は、ミノフスキー粒子散布下（レーザー使用不可能）の戦闘を想定して、近距離白兵戦兵器、MSを開発した。

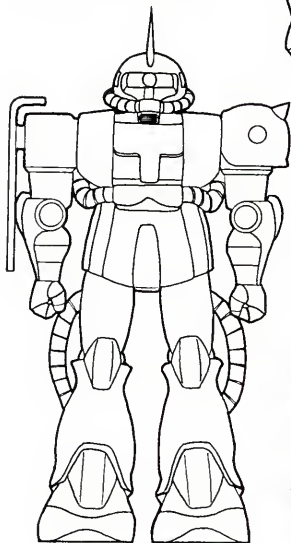
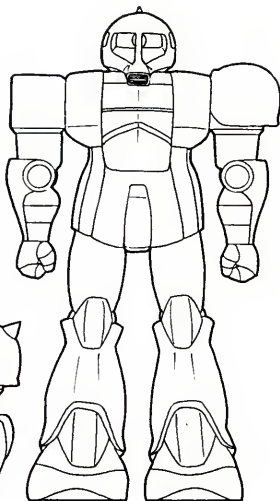
機動歩兵をそのままスケール・アップさせたMSは汎用性に富み、また手足を用いた重

心移動による姿勢制御（AMBAC機動）により、従来の宇宙戦闘機とは比べるべくもない機動性を有する。

開戦当初の戦いに参加したのは、おもにMS-05、MS-06の2機種。

→汎用MS MS-05ザク

ジオン軍が初めて量産に成功した汎用MS。開戦前、この機体で様々な実働データが集められ、開戦時においても、発展型のMS-06とともに相当数が前線で活躍した。しかし軍上層部は、もともとこの機体を員数合わせと訓練用としか見ておらず、徐々にMS-06にとって代わられていった。だが第一線を退いて後も、補給部隊や後方基地などの守備隊に回され、終戦まで使用され続けた。



←汎用MS MS-06ザクII

大戦の全期間を通じ広く使われ続けた、ジオン軍の象徴とも言うべきMS。当然生産数は両軍通じて1位であるが、各派生型も無数に存在し、最も生産数の多い標準仕様のF型、F型の改良型であるS型、地上砂漠地帯用のD型、支援砲撃用のK型、高機動型のR型、F型の後期生産型であるF2型、FZ型など、枚挙にいとまない。非常にバランスの取れた設計であったこと、また試作段階から、改良の可能性を考慮に入れたことなどが成功の要因であろう。

各戦線の局面と戦局の推移

ジオンの誤算

ジャブローが破壊されれば、物理的にも精神的にも連邦は大きな打撃を受け、ジオンに有利な条件の終戦協定も受け入れるだろう……とギレン、デギンは考えた。確かに成功していればそうだっただろう。しかしさすがに今度は、連邦軍の対応も早かった。

1月5日、12時。集結した連邦の残存艦艇が、最初の攻撃を、コロニーとそれを護衛するジオン艦隊に仕掛けた。

この時の戦場で、コロニーの降下目標がジャブローである。と確信した連邦軍は、直ちにルナツーより、迎撃用核ミサイルを搭載した艦隊を差し向けた。

この寄せ集め艦隊の指揮をしていたのは、当時ルナツー

所属のティアンム中將だった。

迎撃艦隊と、ジオンのコロニー守備艦隊との交戦は、6日未明から8日にかけて、幾度となく繰り返された。しかし補強されたコロニーは、いかに核ミサイルとはいえ外壁を崩す程度で、いまだ原型を保っていた。

1月8日、13時15分。連邦艦隊は、まずコロニーを守備するジオン艦隊を叩く作戦に出た。この戦いは、本戦開始後5日目にして初めて起こった本格的な艦隊戦となった。だが数で劣るジオン艦隊ではあったが、MSの働きにより辛くも連邦艦隊を撃破した。「あの巨人どもを、我が軍も飼っておればな……」

ティアンム中將は、苦々しげに、そうつぶやいたと言われている。

両軍の保有戦力（交戦戦力）

ジオン軍	連邦軍
艦艇 戦艦（グワジン型、他）4隻 重巡洋艦（チベ型、他）14隻 巡洋艦（ムサイ型、他）58隻 小型戦闘艦艇 88隻 補助艦艇 32隻 小型機動兵器 宇宙戦闘機（ガトル型）400機以上 モビルスーツ 900機以上 戦闘用宇宙ボッド 不明 兵員 3万人 （ここに記した戦力は、あくまで、直接戦闘に関与した総数であり、潜在的に参加した兵力等は総数内に加えていない）	艦艇 戦艦（マゼラン型、他）22隻 巡洋艦（サラミス型、他）62隻 ミサイル砲艦 21隻 小型戦闘艦艇 140隻 補助艦艇 67隻 小型機動兵器 宇宙戦闘機 200機以上 兵員 5万3千人 （ジオン軍に比べてその総数は3倍近いが、散発的な攻撃に終始し、組織だった戦闘が行えなかったのが災いした。また、その艦艇も、MS隊の前には全くの無力だった）



キシリア・ザビ少将

ザビ家一党の中でも特に諜報戦に長けており、今回の作戦でも、混乱に乗り、連邦軍主力艦艇の配備状況などを、的確に捕らえている。この後起こったルウム戦役でも、その時得られた情報がおおいに役立ち、ジオンに勝利を呼び込んだともされている。本大戦最大にして最後の戦場、ア・バオア・クーで、脱出の際に戦死。



キリング・J・ダニガン中将

ジオン宇宙攻撃軍、第2制宙師団司令官。今回、ブリティッシュ作戦護衛艦隊の指揮を取った。ドズル秘蔵の將軍の一人であり、その期待を裏切らず、降下するコロニーを守りきった。人一倍責任感の強い性格で、ジャブロー攻撃失敗の報を受けた時には、愛銃で自害しようとしたといわれる。



シン・マツナガ少尉

第2制宙師団MS大隊所属。MSパイロット。白く塗装された06を駆り、落下するコロニーを護衛。核弾頭装備のバズーカで、1隻の戦艦、3隻の巡洋艦撃沈スコアを叩き出した。後にジオンMS部隊で十指に入る撃墜王となるが、その片鱗は、この頃に現れている。ソロモン戦の際、生死不明のまま現在に至る。

コロニー落下

もはや誰もが、ブリティッシュ作戦の成功を信じて疑わなかった。

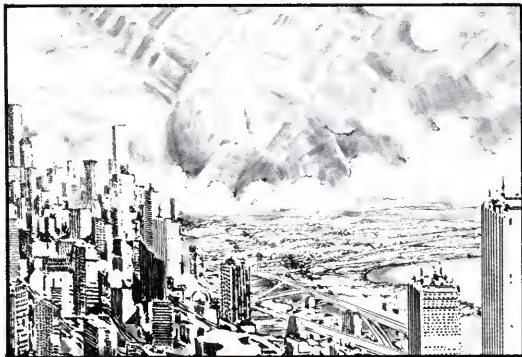
9日となると、連邦艦隊からの攻撃も、また地上からの核ミサイル攻撃も途絶えた。

地表に接近したコロニーをこれ以上攻撃しても、逆に分散した場合、被害範囲が拡大すると考えたからだ。

1月10日、2時50分、ジャブローから無数の輸送機が飛び立った。ついに連邦の撤収作戦が始まったのだ。

コロニーの予定落下時刻は、9時5分前後とされていた。残された時間はわずかだった。

そして8時27分、ついにコロニーは、大気圏に突入した。予定通りに行けば、このまま40分ほどでジャブローに到着



コロニー着陸の瞬間を捕らえた実に貴重な資料写真。撮影場所はメルボルン。この直後、メルボルンは風速 200m を越す衝撃波と、震度 9 に及ぶ震動にさらされる事となる。

当然撮影者も死亡しているが、電子スチルカメラのデータ転送先が日本の自宅に設定されていたので、映像だけが生き残った。亡き撮影者の、最後に見た光景でもある。

するはずだった。

だがここで、予想外の事態が発生した。

8 時 35 分、宇宙空間での今までの戦闘で劣化していたコロニーは、アラビア上空で四散、崩壊してしまっただ。

そしてその前部はそのままオーストラリア大陸東海岸のシドニーに落下。残る各部も、それぞれ四散し、北アメリカ、太平洋などの各点に落下した。

すんでの所でジャブローは救われたが、オーストラリア大陸の被害はすさまじかった。

大陸の 16% は水没し、また衝撃波により発生した津波、

高波が、太平洋沿岸の各地に襲いかかった。さらに舞い上がった土煙は、遙か成層圏にまで到達し、台風以上の規模の暴風雨は 1 週間前後、地球規模の気象異常は、以後 6 年

に渡って続いた。

死者、行方不明者は 2 億人にまで達し、地球の自転速度すら、速められたのだ。

戦闘の結末

かくして、両軍に多大な損失を与えたこの作戦は、ジョーン軍の思惑をはずれた形で幕を閉じた。

特に護衛艦隊の多くを失ったジョーン軍の損失は大きく、チベ級重巡 2 隻撃沈。3 隻中破。ムサイ級巡洋艦 4 隻轟沈。5 隻大破。6 隻中破という損害を受け、また、約 140 機の MS も失っている。

期間で 30 億以上の人口が失われた事実は驚異であり、この 1 月 3 日から 10 日にかけての戦いを、特に「1 週間戦争」と呼ぶ。

U.C.0079.01.14~01.17

ルウム戦役

1週間戦争で、戦いの主導権をジオンに握られたままだった連邦軍は、その威信をかけ、一大艦隊戦の決意を固めた。そしてその戦場は、サイド5——ルウム

サイド6中立宣言

先の1週間戦争により、ようやく連邦政府は、これが単なる武力闘争でないことを認識した。

一方、かねてから確固とした経済基盤を築き上げていたサイド6政府は、1月11日未明、中立を宣言。いかなる戦闘行為にも協力しない旨を、連邦、ジオン両政府に通達。

また、フォン・ブラウン市をはじめとした月の地球側の恒久都市（かつてコロニー建設基地として建設された）群は、連邦にもジオンにも必要な存在だったので、当初から攻撃目標にされることはなく、また自治体も静観を決め込んだ。開戦後、そんな動きが各地で見られる中、ジオン軍は艦隊を再編。前回のブリティッ



連邦も今回は、万全の体制を以て戦いに臨んだ。写真は、サイド5に集結しつつある第2宇宙艦隊。超望遠レンズで撮影したため、各艦同士がかなり接近しているように見える

が、実際は20km前後の間隔をあけている。この艦隊の指揮を取っていたのは、名将として名高いレビル將軍。彼は本大戦の、主要な戦場のほとんどで戦っている。

各戦線の局面と戦局の推移

連合艦隊の発進

1月13日未明、建設途上の宇宙要塞ソロモンから、ドズル中将自らが指揮を取る第1連合艦隊が発進した。

旗艦ファルメル（ムサイ級巡洋艦の改造型。ブリッジ形状が一般艦と異なる）以下、5つの艦隊から成るその連合

シユ作戰で失敗したジャブロー破壊を再び行うべく、今度はサイド5に狙いを定めた。この決定に関してはかなりの反対意見も出たが、

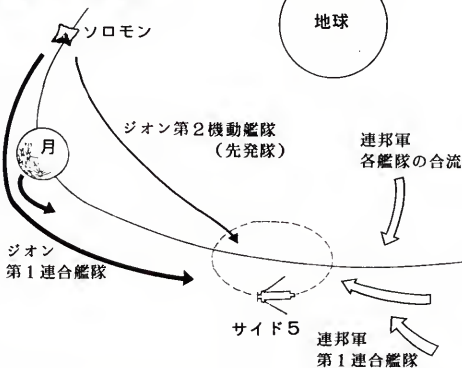
「我々はまず、腐りきった連邦政府の威信を砕かねばならない。そしてジャブローこそが、そのくだらぬ威信の象徴なのだ」と言うギレン総帥の言葉により、決行が決まった。ブリティッシュ作戰の再開である。

艦隊は、ジオン軍の作戰行動可能な全戦闘用艦艇の過半数に当たる、112隻から構成されていた（なお余談だが、ジオン軍は開戦に先駆け、小惑星塊を利用したソロモンとア・バオア・クーという、二つの宇宙要塞の建設に着手していた。この時点では、ソロモンが70%、ア・バオア・クーが50%の完成度だった）。

この事からも、いかにジオン軍部が今回の作戰に力を入れていたかが判るだろう。

その頃連邦軍は、次の攻撃目標がサイド5、すなわちルウムであることを察知していた（各サイドにはそれぞれニックスームが付けられていた。サイド1はザイン。2はハツテ。3はムンゾ。4はムーア。5はルウム。6はリーア。7はノア）

両軍の侵攻経路



連邦艦隊の反撃

さすがに今度は連邦も、手をこまねいて見ていただけではなかった。

第2宇宙艦隊司令だったレビル中将の指揮により、ただちに集結可能な艦艇がルナツーに集められた。(もう一人の名将ティアンムは、予備艦隊とともにルナツーで待機していた)

しかしジオンが行動を開始すると思われる15日は翌日に迫っており、早々にルナツーを発進。その中途で、集結する艦隊との合流を果たした。15日9時の段階で最終的に集結した艦艇は、以下の通り。

- マゼラン級戦艦×48
- サラミス級巡洋艦×142
- 他戦闘用艦艇×118

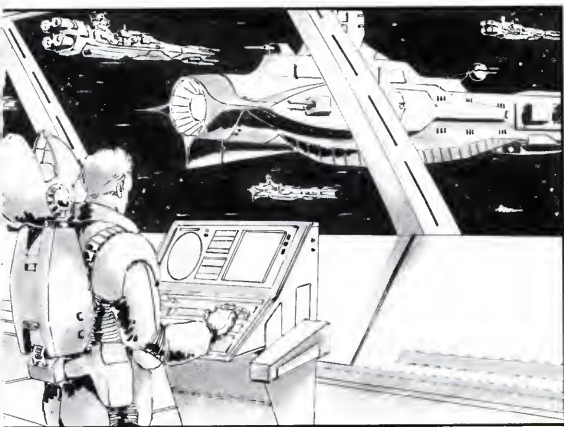
●補助艦艇×84

ジオン艦隊に比して、ざっと3倍以上の戦力である。

レビル艦隊は1月15日22時14分、サイド5にほど近い空域で、第11番コロニー「ワトホート」に核パルスエンジン取り付け作業中の工作艦と、その背後に控えるドズル艦隊を発見した。(ミノフスキー粒子のためレーダーが使えず、肉眼監視による発見だった)「諸君らの健闘に期待する!」というレビル將軍の一声が、攻撃の合図だった。

各艦はそれぞれに散開。各個撃破の陣を敷きつつ砲門を開いた。ビーム砲雷撃戦、距離2万8千m。

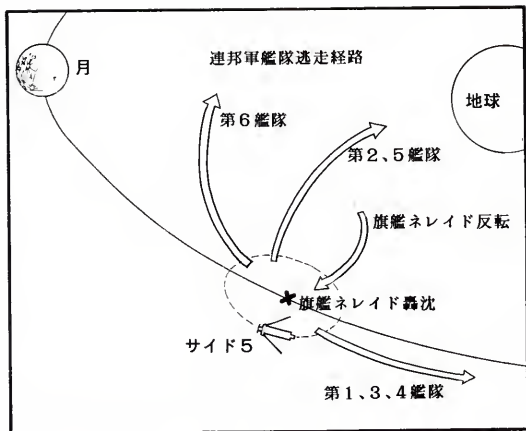
人類史上最大の艦隊戦、ルウム戦役は、こうして始まった……。



各戦線の局面と戦局の推移

月・日・時	戦 局 の 推 移
01.10	連邦政府、各地の被害確認を急ぐ。
01.11	サイド6、中立宣言。 連邦、ジオン、両政府ともに、これを認める。
01.12	連邦軍、最高幕僚会議。 ジオンの今後の動きを分析。宇宙空間の監視網、強化。
01.13 19:20	ジオン軍第1連合艦隊、サイド5に向け発進。 ブリテッシュ作戦再開。
20:00	連邦軍、ジオン艦隊の動きを察知、阻止作戦を開始。
01.14 09:00	レビル艦隊（第3艦隊）を中核とした第1連合艦隊、ルナツー発進。
01.15 11:20	ジオン艦隊、サイド5に攻撃開始。 第11番コロニーに、核バルスエンジン装着開始。
22:14	第1連合艦隊、ジオン第1連合艦隊と接触。交戦。 至近距離での総力戦が展開される。
22:40	ジオン軍、コロニーへの核バルスエンジン装着を断念。
01.16 01:00	連邦軍、この時点で艦隊の50%以上を喪失。
03:10	レビル將軍の乗る旗艦“アナンケ”撃沈。 レビル將軍、黒い三連星に捕獲される。
04:24	連邦艦隊、戦線からの離脱を開始。
05:14	マゼラン級戦艦“ネレイド”轟沈。
06:00	第1連合艦隊、作戦の中断を決定。 艦隊、順次ソロモン、サイド3本国へと帰還。





空前絶後の艦隊戦

連邦艦隊の攻撃を受けたドズル將軍は、速やかにMSの発進指示を出した。と同時に、引続き核バルスエンジン装着作業を進めるようにも伝えた。ひとたびコロニーが落下軌道に乗れば、その降下を阻止することは難しい。

しかしそれが災いした。多数の工作艦を守るために、結果的にジオン側は、ただでさえ少ない艦艇を振り分けねばならなくなったのだ。

「連邦めが、えらく動きがいが……指揮官はレビルか？」
22時40分、ついにしびれを切らしたドズル將軍は、核バルスエンジン装着作業を断念。一大艦隊戦の決意を固めた。戦いはすでに、乱戦状態へと移行していた。こうなると

MSは、がぜんその真価を発揮する。この戦いで、多くのパイロットが核バズーカ、および通常兵器で連邦軍の艦船を破壊。大いに勲功を立てた。中にはたった1機のMSで、5隻の戦艦を沈めたシャア・アズナブル中尉のような猛者もいた。

そのようなパイロットが他にも多数いたのだから、いかに3倍の戦力を持つていようと連邦軍の旗色が悪かった。「太古の巨大海洋戦艦も、航空機に破れたな……」

レビル將軍は、旧暦1945の出来事と、現在の連邦艦隊の状況を脳裏で照らしあわせてつぶやいた。

そして翌16日3時ごろ、レビル將軍の乗る旗艦が大破。脱出の際、將軍はMSに発見され、捕虜となってしまう。



レビル大将

ルウム戦没時は中将だったが、奇跡の生還を果たした後、大将に昇格。宇宙、陸、海、空、各軍に対する指揮権をも有していた。もっとも、多分にこれは連邦軍の政治宣伝の意味もあった。苦しい戦いの中、誰もが英雄を欲していたのだ。なお將軍は、ア・バオア・クーを目前にし、ジオンのソーラ・レイによって戦死している。



ロドニー・カニンガン准将

レビル將軍の副官。丸眼鏡と、ハバナ産の葉巻がトレードマーク。むさくるしい見た目からは、思いもよらないほど理知的な紳士で、ハーバード士官学校を首席で卒業。38歳の若さで准將の位を得るといって、超エリートだった。残された艦隊を逃がすため、自らの乗るマゼラン型戦艦ネレイドと、運命を共にした。



シャア・アズナブル中尉

宇宙攻撃軍、第6機動大隊所属。MSパイロット。この戦いで5隻の戦艦を沈め、2階級特進で少佐の位を得た。ドズルからの信頼も厚く、後にドズル専用艦ファルメルを贈与されている。自分のMSを赤く塗装していた事から、誰が言うともなく“赤い彗星”と呼ばれられるようになった。ジオン・トップエースの一人。



黒い三連星

ガイア、オルテガ、マッシュの3人からなる独立攻撃小隊“黒い三連星”は、本来キシリア・ザビ子飼いの部隊である。だがドズルへの援軍という意味合いもあり、この戦いに参加。大いに勲功を立てた。戦艦5隻撃沈のシャアと並び、レビル將軍を捕虜にした事で、大いにその名を上げた。

艦隊戦の果てに

レビル將軍が捕虜として捕らえられた頃、すでに戦いの趨勢は決っていた。

ミノフスキー粒子散布下の状態では、連邦艦隊御自慢の複合射撃管制システムは役に立たず、盲打ちのまま、敵のMS部隊に次々と撃沈されていった。

さらにサイド5自体も、すでに崩壊状態にあった。

連邦艦隊はその半数以上を失い、このまま戦闘を継続すれば、全滅は確実だったろう。ここで見事な働きをしたのは、レビル將軍の次席指揮官、ロドニー・カニンガン准将であつた。

1月16日、4時10分。准将は戦闘空域からの撤退を決意した。しかし敵MS隊の攻撃

の手はいまだ衰えず、その機会を見つけられぬままだった。

准将は艦隊を3方向（地球L4、L5）に分け、それぞれ独自に撤退を開始させた。

これは敵艦隊の数が少ないことを利した撤退作戦であり、仮に分散させた一つの艦隊が追撃を受けたとしても、その間に、残る二つの艦隊は逃げおおせる。そう判断したのである。

4時24分、連邦艦隊は行動を開始した。

一方、ジオン側の司令官、ドブル中將は、敵の目論見を素早く察知。そのため目標を絞り込み、地球方面に逃走した第2、第5艦隊の追撃に移った。その方面に向かった連邦艦隊には、カニンガン准将乗艦のマゼラン級戦艦「ネレイド」があつた。

4時55分、カニンガン准将



核バスーカでサラミス型巡洋艦を撃沈する、MS-06（S型）。06の額に付いている突起は、隊長機を示す物である。このツノの付いているQ.6は、S型と思ってもらってまず間

違いない。S型は、通常型のF型の各部をチューン・ナップした機体で、パイロットの技量しだいでは、F型の3倍近い速度での戦闘も行えたとされる

各戦線の局面と戦局の推移

両軍の総合兵力

	連邦軍	ジオン軍
戦艦	マゼラン型以下48隻 (36隻が撃沈、または大破)	グワジン型以下4隻 (うち2隻が大破)
巡洋艦	サラミス型巡洋艦以下163隻 (139隻が撃沈、または大破)	チベ、ムサイ型以下、78隻 (22隻が撃沈、または大破)
ミサイル・フリゲート	LI44系掃海艇以下118隻 (114隻が撃沈、または大破)	ジッコ突撃艇以下、34隻 (18隻が撃沈、または大破)
機動兵器	連邦艦隊は、MSを保有せず。機動兵器としては、わずかにトリアーエズ型戦闘機が60機、艦隊の護衛として参戦している(結局、途中で推進剤不足のため引き返している)	MS-05ザクI、320機 MS-06ザクII、2600機 これらのMSの多くは、輸送艦に積まれ、戦場付近まで運ばれた。またガトル型戦闘機も、400機近くが参戦。
その他	コロンブス型補給艦、ミノフスキー粒子散布艦などが随行しているが、参戦した84隻のうち、残ったのは、わずか2隻(それも中破の損傷を負っている)に過ぎなかった	輸送艦は、MS空母的使われ方をされた。バプア型輸送艦以下22隻が作戦に参加したが、後方に置かれていたため、損傷を受けたのは、わずか4隻(中破程度)ほど。

は、自らの乗る艦のみを転進、ジオン追撃の楯になろうと決意を固めた。

「将軍が生きておられれば、(この時は戦死と思われる)同じ事をしたとは思わなかね」と、副官に告げて。

ネレイドは、その誘導砲身が自らのメガ粒子の熱で融解するまでビームを乱射。そして5時14分、敵のビーム砲8発、大型ミサイル4発を受け、文字どおり轟沈した。

だがその間に稼げた貴重な時間により、残存艦隊はそれぞれ、戦場離脱に成功したのである。

ルウム戦役の終結

連邦艦隊は、投入兵力の80%以上を失い、残った艦艇の数は42隻にしか過ぎなかった。それに比してジオン側の損害

は少なく、戦艦、巡洋艦8隻が撃沈。16隻が大破。14隻が中破にとどまった。

これはMSの働きによる功績が大きかった。

結局この戦いは、当初の目的こそ果たせなかったものの、ジオン側の圧勝でその幕を閉じた。

またサイド5は完全に破壊され、20億人が死亡した。

後日、崩壊したサイド5の空域を視察で訪れたデギン公王は、脇にいたドズル中將に、「この破壊の跡は、戦艦のビームによるものか」と訪ねた。するとドズルは、胸を張りこう答えた。

「いえ、我が軍の、MSによるものです」と。

その目の前の空域には、無数の宇宙艦の残骸が、静かに漂っていた……。

U.C.0079.02.07~03.22

ジオン軍地球侵攻作戦

眼下の地球に、大量の部隊を降ろす……。それは、口で言うほどなまやさしいものではない。しかしジオンは、幾多の困難を払いのけ、連邦の喉元に迫る！

ルウム戦役の後に

1月15日から16日にかけて行われた戦いは、その戦場の名を取り「ルウム戦役」と呼ばれた。

この戦いの後、ジオン軍は開戦前からの計画に基づき、自国に有利な休戦条約を連邦と結ぶべく、その準備にかかった。と同時に、万一の場合を考え、地球侵攻作戦の準備も進められた。

かたや連邦内部は、ルウム戦役で瓦解した宇宙艦隊の再建に全力を注いでいた。また一番の痛手は、レビル將軍を捕虜に取られたことだった。

1月17日、ジオンは捕虜となったレビル將軍の映像と、ルウムでの華々しい戦果を武器に、全地球的規模のプロバガンダ演説を行った。

「我々優秀なるジオン国民の前には、数では優勢な連邦軍も、烏合の衆に過ぎない！」という主旨のその演説は、ジオンにあつては士気を高め、連邦にあつては意気を消沈させた。

かくして連邦軍は、士気高揚と名譽挽回のために、少数の精鋭からなる特殊工作部隊を編成。レビル將軍奪回作戦を発動させた。

その作戦は22日未明に開始された。だが、難民船に偽装した船がサイド3に無事入港したという連絡を受けて以後、一切の定時連絡は途絶えた。連邦軍首脳部は、レビル將軍奪回作戦の失敗をさとしたのである。

ジオンに兵なし

1月28日、中立サイドであ

るサイド6を通じ、ジオン政府から連邦政府に休戦条約締結の申し入れがあった。

レビル將軍奪回もままならず、またソロモンに大規模なジオン艦艇が集結しつつあり、との連絡を受け取っていた連邦政府は、その申し入れを受ける決意を固めた。

締結の日は1月31日。場所は永久中立地帯である南極大陸で行われることとなった。

当日、南極大陸観測基地に設けられた特設会場で、連邦・ジオン代表団が顔をあわせた。条約の内容は大方の予想通り、ジオン公国の独立自治権を認めさせ、さらに連邦軍の軍備縮小を促した、休戦条約とは名ばかりの、事実上の降伏勧告だった。

だが連邦政府には、徹底抗戦を行うだけの戦力も残って

各戦線の局面と戦局の推移

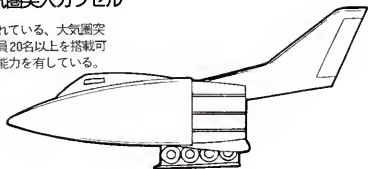
■ジオン軍の降下作戦用兵器

地上制圧の際には、各巡洋艦に装備された降下艇と、使い捨ての突入カプセルなどが大量に動員された。使い捨てのカプセルはともかく、ムサイ級巡洋艦に装備された降下艇、

“コムサイ”は、連邦の降下艇と設計理念からして異なり、なんと駆逐戦艦としての能力まで有しており、MSも2機搭載できた。降下艇と呼ぶには強力すぎよう。

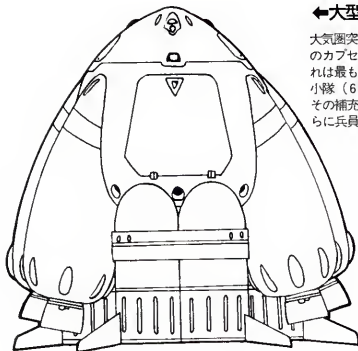
→ムサイ型搭載大気圏突入カプセル

ムサイ型艦の前部に接合されている、大気圏突入カプセル。MS 2機と兵員20名以上を搭載可能なほか、本機自体も空戦能力を有している。



←大型HLV

大気圏突入、離脱用カプセル。様々な型のカプセルが本作戦に投入されたが、これは最も標準的な仕様の機体。MS 2個小隊（6機）、もしくは大型車両10両とその補充部品、支援機材を搭載可能。さらに兵員60名が収容できる。



おらず、この条約を飲むしか手はなかった。

しかし、連邦にとっての奇跡は起こった。31日午後1時15分、条約締結の会場に、レビル將軍救出さるとの報が届いたのだ。

レビル將軍はすでにルナツー基地にあり、間髪入れず、そこから使用可能な全周波数を通じ、全地球的規模の演説が行われた。

「私はこの目で、ジオンの内情をつぶさに見てきた。我が連邦軍以上に、ジオンも疲弊している。かつてのコロニー落としとルウム戦役は、ジオンにとっても苦い勝利でしかなかったのだ。そしてジオンに残された兵力は少ない！」

これが後に言われる「ジオンに兵なし」の演説の概要である。

南極条約の締結

これを受けた南極基地の連邦首脳陣は、徹底抗戦を決意。狼狽するジオン代表団をねじ伏せ、条約の内容を再検討させた。

そして結局この日は、軍事条約の締結のみに終わり、両軍は泥沼化する戦争を継続していく事になるのである。

なおこの日締結された軍事条約の主な概要は以下の通り。

①NBC兵器、および大質量兵器（コロニー爆弾等）の使用禁止と、その他の兵器の使用制限。（ただし核動力は、制限付きでこれを認める）

②木星エネルギー船団、月面恒久都市、中立区域への攻撃禁止。

③捕虜への待遇等、人権的要素の確認。

こうして、ジオン側が戦争開始以前に立案した戦争終結までのプログラムは、音を立って崩れていった。

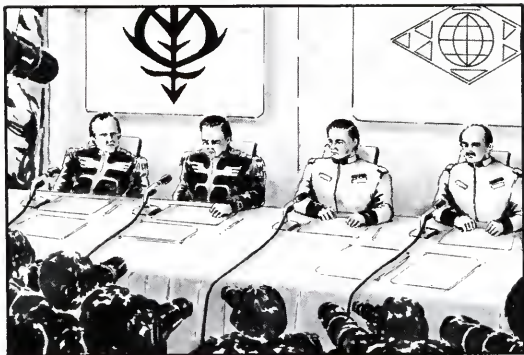
現段階で終戦協定を結んだとしても、ジオンに有利な条件は望めるべくもない。もはや残された道は、徹底抗戦しかなかった。

一部には反対の声もあったものの、ジオンの実質的指導者であるギレン・ザビは、断固地球連邦軍を粉砕すべく、かねてより進めていた計画を実行に移した。

すなわち、敵の喉元に兵力を送り込む、地上侵攻作戦である。

もちろんこの計画は、即座に地球を制圧しようなどと馬

月・日・時	事柄
01.31	ジオン公国と地球連邦の間で、南極条約締結。（レビル將軍、奇跡の生還を果たし“ジオンに兵無し”の演説を行う）
02.07	ジオン、第一次地球侵攻作戦展開。
03	以後、無数に大規模な降下作戦を展開。
04	公国軍、占領した施設などを使い、戦力増強。戦争は、膠着状態に陥る。
04	連邦軍、新型MS開発と、その母艦となる強襲揚陸艦建造に着手。
05	また、失われた宇宙艦隊の再建に乗り出す。
05	ジオン軍宇宙要塞ソロモン完成。
06	また、局地戦用MS（MS-06K型など）、水陸両用MS（MSM-03、04）の配備を開始。
06	ジオン軍、宇宙要塞ア・バオア・クー完成。月、ア・バオア・クー間の本土防衛ラインが完成する。
07	連邦軍、MSが所持しうる、小型ビーム兵器の開発に成功。
07	新造強襲揚陸艦“ベガス”型I番艦進宙。
08	RX-78ガンダム、試作I号機完成。
08	ジオン軍、潜水艦隊を正式に設立。
08	連邦軍のMS群、RXシリーズの最終調整テスト、サイド7で実施。
09.15	連邦軍のベガス型強襲揚陸艦ホワイト・ベース、RXシリーズ受領のため、ジャブローを出航。
09.17	ホワイト・ベース、サイド7への途中、ルナツーに寄港。



南極条約締結時の報道写真。ジオンは自国に有利な停戦条約が締結されるものと信じ、あらかじめ各報道機関に通達を出していた。ところが蓋を開けてみると、レビル將軍の演

説により状況は一変。ジオンはその苦しい内情を、わざわざ自分達によって広めた格好となった。この顛末を見ていたギレン・ザビの心境は、いかなるものだったろうか。

鹿げた物ではない。地球に兵を送り込む最大の目的は、レアメタル（希少金属類）と、化石燃料の確保にあった。資源採掘用小惑星や月面基地を保有するといえ、地球でのみ産出される鉱物資源は数多い。コロニーが母国であるジオン公国は、その鉱物資源を、喉から手が出るほど欲していたのだ。かくして急ピッチで、地球降下作戦の準備が進められた。そして何度となくコンピュータ・シミュレートと訓練が繰り返された後、ついにジオン本国と、建設途上だった宇宙要塞ソロモンから、多数の降下作戦用の艦隊が発進していた。

時に2月4日、13時40分の事である。

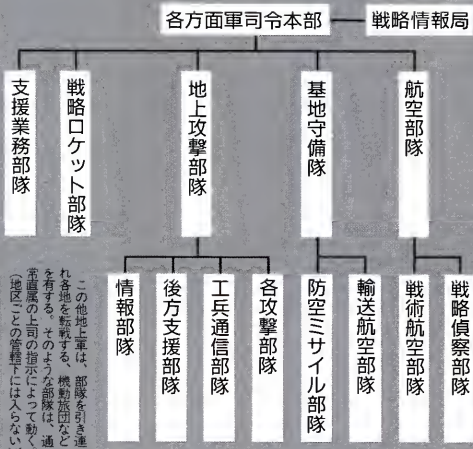
降下作戦開始

この時期、ルウム戦役で多くの艦艇を失った連邦軍に、制宙権はなかった。特に月側の空域は完全にジオンの庭のような状態にあり、降下艦隊はさしたる妨害もなく、地球の衛星軌道にまで到達できた。そして2月7日、地球降下作戦は開始された。

ムサイ級巡洋艦、チベ級重巡洋艦等の降下母艦は、降下目的地上空をフライ・バイ。牽引してきた大型HLEV（大気圏突入、離脱カプセル）を、速やかに降下させた。

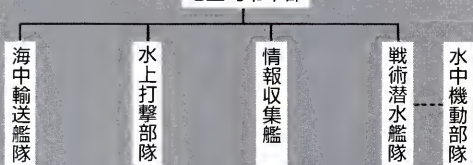
この時作戦指揮を取っていたドズル中将は、「最初に地上にキスをした者には、最上級のワインをオレがおごるぞ」と、兵達を叱咤激励したと言われる。

ジオン地上部隊



戦略海洋諜報司令部

地上司令本部



これは、ジオン地上軍の指揮系統図である。上図が、陸軍、空軍に当たる、ドズル中將の管轄下にある部隊。

そして下図が、キシリア・ザビ少将子飼いの、戦略海洋諜報部隊(事実上の海

軍)の系統図である。

とは言うものの、侵攻軍であるジオン軍の指揮系統は極めて流動的であり、特に大戦後期には、地上軍の規模は縮小の一途をたどるばかりだった。

各戦線の局面と戦局の推移

降下後の戦闘

降下目標地点には、大きく4点が選ばれた。北アメリカ・ニューヨーク周辺。中央アメリカ・カリフォルニア周辺。東アジア・北京^{ペキン}周辺。東ヨーロッパ・カスピ海沿岸である。これに対し、連邦軍は迅速な対応を取ることができなかった。なぜならコロニー落下の際の天変地異により、最も機動性を持った海上機動艦隊は全滅に近い被害を受けていたからだ。さらにジオン宇宙艦隊は、衛星軌道上よりミノフスキー粒子の最大濃度散布を行い、降下部隊がレーダーで捕捉されぬよう尽力をつくした。そのため電波誘導の迎撃ミサイルは使用できず、高々度迎撃戦闘機も敵HLVの正確な侵入軌道が判らねば、

出撃のしようもなかった。

この日降下に成功したHLV、およびシャトルの数は、400以上にもなる（迎撃されたHLVは、わずか32機）。

兵員32000人、MS220機、戦闘車両380両。これが第一次降下作戦で降ろされた、ジオン軍の全兵力である。

以後HLVは、地上に橋頭堡を確保した後、大気圏離脱。再び兵員、MSを積み降下するピストン輸送を行った。

ジオン軍はこのような大規模な降下作戦を、2月7日～15日、22日～28日、3月5日～10日、18日～22日の、4回にわけ実施した。

「それはまるで、軌道上からの絨毯爆撃だった。しかし落とされた物は、爆弾以上に危険な物ばかりだった」と、当時の降下要員は語っている。



2月24日、2度目の降下作戦時に撮影された写真。撮影者等は不明だが、ビデオ信号などから、民間人の撮影と思われる。自分達の町や村の頭上から降下してくるジオン軍は、ま

さしく空からの侵略者だった。多くの人々が始めて見るMSの威容に圧倒され、現地の駐留軍も、その巨体を見るやいなや、戦意を喪失していった。

U.C.0079.03~09

ゲリラ戦の継続

鷹は舞い降りた！ だがそれは、果てしない戦いへの前奏曲に過ぎなかった。連邦軍は緒戦の戦いで疲弊。ジオンも戦場を広げすぎ、補給もままならなかった

ジオン地上軍

地上に降りたジオン軍は、各方面の連邦軍と交戦した。

ここ地上でも、ジオンの新兵器……MSはその威力を遺憾なく発揮。連邦地上部隊の掃討を素早く速やかに行った一方、守る連邦軍は圧倒的に不利だった。

何しろ広大な大陸の、どこに次の降下部隊が降りて来るのか皆目見当がつかなかったからだ。しかもジオン地上部隊は、強力な援護射撃に守られてもいた。

衛星軌道上の宇宙艦から投射される、軌道爆雷による援護射撃である。

唯一奮戦したのは航空部隊だったが、それでもアメリカ、アジアの各大陸の各地に点する前線を支えるには、あま

りに数が少なすぎた。

ジオン軍は着実に地上にその勢力を延ばし、連邦地上軍は、集結のために拠点を手放す事を余儀なくされた。

こうしてジオン軍は、地上の都市を制圧。重工業施設、地下資源鉱山などを手中に収めたのである。

制圧下の街

政略に長けたギレン・ザビは、占領したそれぞれの都市の代表者に、その立場を保障する代わり、市民達に協力を促すよう指示をした。

高圧的な態度での占領は、反攻心しか生まめと判断しての方策である。

そのため、占領した都市でのジオン製兵器（特にMSと航空機）の製造も順調に進み、ジオンは短期間に、大規模な

地上軍を組織するに至った。

一方、中央アジア、ヨーロッパの地帯では、念願の鉱山基地の制圧に成功。臨時の宇宙港も建設され、鉱物資源の搬出が急ピッチで行われた。

そんな中、ジオンのMSに制圧されたヨーロッパのある村の老人は、

「旧世紀には、ロシアのコサック騎兵が、ナチのドイツ戦車が来た！ だった。そして今度は、ジオンのMSが来たか……」と、悲痛な面もちでつぶやいたという。

このように、順調に勢力を拡大していったジオン軍だったが、その財力はとうに尽きていた。これほど戦争が長期化するとは思っていなかったからだ。

そしてそれは、連邦にしても同じ事だった。

各戦線の局面と戦局の推移

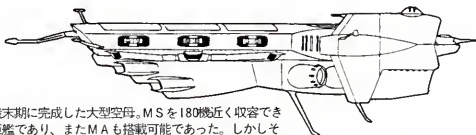
■両軍の開発した新兵器群

3月以降の半年間、戦いは泥沼化し、大きな戦いは起こらなかった。しかし、水面下での戦いは続いていた。新兵器の開発競争である。特に国力に乏しいジオン軍は、一騎当千の力を持つ兵器を欲していた。そのため新型

艦の建造をはじめ、より強力なMS、さらには新たな分類に属する兵器MAなどを、次々に実用化させていった。

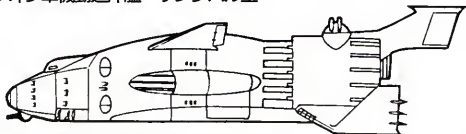
一方連邦軍も、MSの開発と、通常兵器の改良、量産に明け暮れていたのだ。

↓ジオン軍超大型宇宙母艦 ドロス型

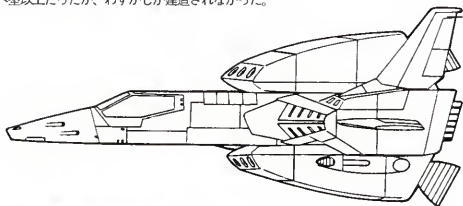


大戦末期に完成した大型空母。MSを180機近く収容できる巨艦であり、またMAも搭載可能であった。しかしその分機動力は低く、浮き要塞的役割を与えられていた。

↓ジオン軍機動巡洋艦 ザンジバル型

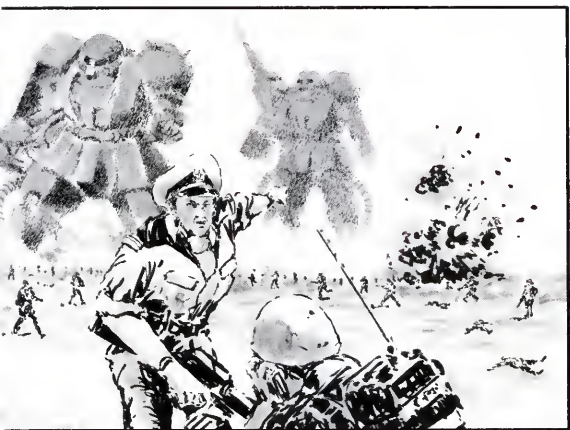


大気圏への突入、離脱が可能な重巡洋艦。MSを2個小队（6機）搭載の上、MAを2機搭載可能。攻撃力もチベ型以上だったが、わずかしこ建造されなかった。



↑連邦軍迎撃戦闘機 セイバーフィッシュ

連邦軍の新型迎撃戦闘機。大気圏上層で、ジオン軍の突入カプセルを迎撃すべく実戦配備された。コアブースターと同時に開発されたため、形状なども似通っている。



ゲリラ戦への移行

やがて3月になり、戦争は膠着状態に陥りつつあった。

1 週間戦争、ルウム戦役、そして大規模な地球降下作戦とその阻止作戦により、両軍はともに、疲弊の極に達していたからだ。

もともと戦力の少なかったジオンは、その増強と制圧した地域の防備に追われ、また連邦は、戦力の立て直しを急いでいた。

「これは、人類史上かつてない大規模な消費活動だ。しかし我々の命そのものを消費してでも、ジオンの侵攻から我々の故郷を守らねばならない」
当時連邦陸軍ヨーロッパ方面司令官だったパウルス中将の言葉である。

皮肉な事に、戦線が膠着し

たこの頃から連邦軍の士気は上がりはじめ、逆に疲弊したジオンでは、兵達に疲れの色が見え始めていた。

それらの状況が結果的に、ゲリラ戦への移行を促していた。

「ジオン軍を地上から追い出すべし！」という声のもと、少ない戦力を駆使し、連邦軍は各地で小規模な戦いを挑んだ。

迎え打つジオンにしても、補給線はのびきったままで、十分な装備もなく、連邦軍部隊の抵抗を完全に沈黙させる事はできなかった。

またこの頃より、兵器はもとより、両軍で人的資源の不足が深刻化しはじめた。

開戦当時110億だった人類は、すでに55億。不足して当然であろう。



そのため召集礼状がばらまかれる事となり、まだ年端もいかない少年たちも、戦場に駆り出されていくのである。

戦力の再建

3月～8月の半年間、両軍はそのようなゲリラ戦、小規模戦を繰り返した。そしてスローペースながら、戦力の立て直しを果たしつつあった。

特にジオンは、北米のカリフォルニア基地、ヨーロッパの鉱物資源採掘基地を拠点にし、大規模な陸上、航空部隊を保有するまでに至った。

さらにザビ家の一族の中で、最も諜報戦に長けていたキシリア・ザビは、戦略海洋諜報部隊の設立を推進。連邦地上軍の偵察、監視、さらには破壊活動を目的とした大規模な潜水艦隊を作り上げた。

「連邦軍が海上艦艇の大半を失った今、宇宙と海、二つの制海権を我々が握ったのだ」キシリアは副官のトワニングにそう語ったと言う。（この件の詳細は後出）

だが連邦軍も、本部ジャブローを中心とし、一大反攻作戦の機会を待っていた。

その工業力に物を言わせ、改良、強化されたマゼラン、サラミス級の両艦艇を急ピッチで建造（この宇宙艦隊再建計画は、ピンソン計画と呼ばれる）。

またジオンのMSに対抗すべく、より強力な新型MSの量産も行っていた。

特に最新鋭MSと、その運用を前提とした新型空母の共同開発は、V（Victory＝勝利）作戦と名付けられ、秘中の秘とされていた。

U.C.0079.09.18

サイド7遭遇戦

連邦軍も、ついにMS開発に成功した。RX-78。初めて携帯ビーム兵器を装備した、驚異の新型MSだ。ジオンのMSパイロットは、その性能に恐怖した……

V作戦の実体

9月18日、午前9時。建設途上のサイド7で、ジオンMS部隊と連邦軍は、小規模な戦いを展開した。

しかし戦いの規模こそ小さかったが、この一戦には戦史上、大きな意味が含まれていた……。

このサイド7の閉鎖空間内で、人類史上初の、MS同士の戦闘が行われたのだ。

サイド7はジオン公国より最も離れたサイドであり、またルナツー駐留軍の守備範囲内という事もあって、(建設途上で、戦略的価値がなかった事もある)今まで戦火に巻き込まれていない、数少ないサイドの一つであった。

連邦軍はこの地を、MS開発の試験場としたのだ。

すなわち、MSとそれに付随する強襲揚陸母艦ベガス級の開発とV作戦の母基地として。この事実は、連邦軍内での最高機密ランクAAAで覆い隠され、作戦そのものはジオンにも察知されていたが、基地自体の場所は、未だ捉えられていなかった。

だが9月15日、テストの終了したMS群(RX-78型3機、RX-77型4機、RX-75型8機)を受取りにジャブローを飛び立ったベガス級2番艦「ホワイト・ベイス」が、ジオンのムサイ級巡洋艦に捕捉されてしまうという失策を犯した。

さらに悪い事に、この追尾艦の指揮を取っていたのは、かのルウム戦役で勲功をたてた、あのシャア・アズナブル少佐だったのだ。

「あの艦がV作戦の母艦なら、これは、見過ごせんな」

彼は即座に、副官のドレン中尉に指示を出した。

そしてホワイト・ベイスの航路から、目的地がサイド7である事を察知。先行して、MS1個小隊をサイド7内に潜入させた。

一方の連邦軍は、たかがムサイ級1隻に何ができるのかという甘さがあった。

「何より一刻も早く、MSをジャブローに届けねばな」

その追尾を振り切らぬまま、サイド7に入港してしまったのである。これを愚行と言わずして何と言おう。

あるいはこの時、ホワイト・ベイスが相手の目を攪乱し別の航路を辿っていれば、サイド7での交戦は避けられたかも知れない。

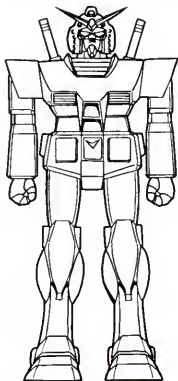
各戦線の局面と戦局の推移

■V作戦の超兵器群

連邦のMS開発計画はV作戦と名付けられ、最上級機密ランクを与えられていた。

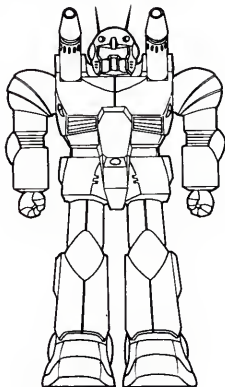
RXシリーズと銘打たれた試作MS群は、大戦初期に捕獲されたMS-06などのデータをもとにしつつも、結果的には、まったく

異なる物に仕上がっている。また特筆すべきは、本来汎用兵器であるはずのMSに、砲撃戦用、中距離支援用、格闘戦用などの個性を持たせたことだ。この用途分担の思想は、以後の連邦MSの、基本的考え方になる。



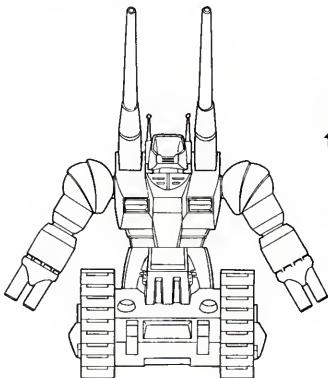
←汎用MS RX-78ガンダム

連邦軍が、その持てる技術力を結集して作り上げた高性能MS。多目的に任務をこなせる機体の性能の高さもさることながら、ビーム兵器を初めて携行したMSという点でも評価が高い。



↑中距離支援用MS RX-77ガンキャノン

RX-78の支援用に作られたMS。格闘性能も高く、非常に対費用効果に優れていることから、少数ながら生産が行われた。



←長距離砲撃戦用MS RX-75ガンタンク

試験的に作られたMSであり、MSの何たるかを理解しないまま作られた感が強い。実際前線でも、有用な運用法は見いだせなかった。

モビルスーツ戦

潜入した3機のMS-06のうち1機は外壁に残り、残る2機は、そのままサイド7内部で偵察活動を行った。それが、9月18日午前8時の事である。

潜入した06は、午後8時30分、目指す物を発見した。港に移送中の、MS群である。それを発見した時の、06搭乗兵の決断は早かった。

「敵を倒すには、早いほどいいってね!」

06の120mmマシンガンが火を噴く。その狙いは正確で、まだ半完成品であった連邦のMS群は、次々に炎上していった。

サイド7の駐留軍は戦闘車両部隊で必死に応戦したが、しよせんMSの敵ではなかつ

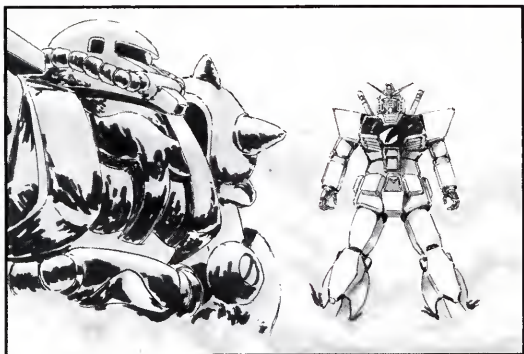
た。港内のホワイト・ベースにしても、隔壁を隔てた向こうの戦闘には、手の出しようがない。港とサイド内をつなぐ隔壁は、電源が切られ、閉不能の状態にあったのだ。

奇襲の報を受けたホワイト・ベース艦長バオロ大佐は、「サイドの中から攻撃とはな」と、もらした。

それはそうだ。コロニー内での戦闘など、本大戦勃発以来、小規模なゲリラ戦以外存在していない。

午前8時55分、06の奇襲になす術もなく、サイド7駐留軍は瓦解しつつあった。

しかしこの時、唯一完全に整備が終了し、反応炉もアイドリング状態にあったRX-78が、悠然と立ち上がった。搭乗者は、正規のパイロットではなかった。民間人のア



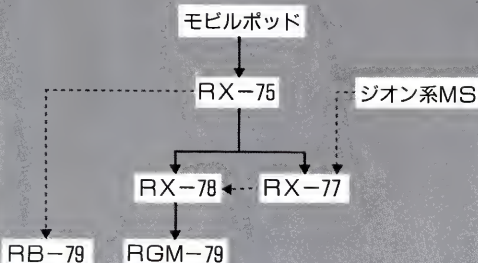
2機のMS-06のうち、後方の機のガンカメラに捉えられた一枚。(この06は損傷が軽微だったため、後に連邦軍の手で回収された) 手前にいる06が、いかにも驚いたように見え

るのがおかしい。もっとも、搭乗者にとっては笑事ではなかったろうが。奥のRX-78はテスト機のため、派手なカラーリングでまとめられている。

V作戦 主要兵器開発概念図

RXシリーズの流れを追った概念図。RX-75は、あくまでMS的な物にしか過ぎず、MSと呼べるのは、MS-05の詳細なデータを

得て開発された、77からだろう。RXナンバーの機は試作機だが、77は、少数生産もされている。



ムロ・レイ（後に軍籍、少尉に）。まだ15歳の少年である。優秀な教育型コンピュータ

に導かれ、アムロ少年は潜入していた06、2機を撃破した。驚くべき戦果である。

人類史上初のMS同士の戦闘は、いともあっけなく、午前9時20分には終了した。

アムロ少年は、そのままRX-78の仮パイロットとして扱われ、MS部品の回収などに駆り出された。

「素人でも何でも、使えるものは使わなくてはな……」

とは、ホワイト・ベースに乗り込んでいたブライト・ノア士官候補生（後に中尉）の言葉であるが、事態はそこまで切迫していた。

ホワイト・ベース出港

MSの部品などを積み込む

だホワイト・ベースは、午後4時20分、ルナツーに向けて出港することとなった。

アムロ少年同様、操舵手、通信士、機関要員など、半数以上が素人という有様であり、後に数奇な運命を辿るホワイト・ベースの、試練の始まりでもあった。

この出港の際、シャアはMS1機を従えて、自ら出陣している。

しかし連邦軍の新型MS、RX-78の性能に慄然させられたシャアは、後退を余儀なくさせられる。

「連邦のMSは、戦艦並みのビーム砲を持っているのか！」と驚愕しつつ……。

辛くもホワイト・ベースがサイド7を出港したのは、予定時刻からずれる事30分、午後4時50分の事だった。

月・日・時	戦 局 の 推 移
09.18 08:00	サイド7内に、MS-06で編成されたMS小隊が潜入。
08:15	連邦軍の新型強襲揚陸艦ホワイト・ベース、サイド7に入港。
09:00	試作MS、RX-78起動。MS-06、2機を撃破。
16:50	RXシリーズの部品を積み込み、ホワイト・ベース出港。
09.20 11:40	ホワイト・ベース、ルナツーに入港。
09.22 06:20	ホワイト・ベース、ルナツーを出港。
09.23 13:40	大気圏突入。ジオン軍の追撃を受ける。
14:10	ガルマ隊と接触。交戦状態に。(辛くも突破)
10.04 21:50	ホワイト・ベース、ガルマ・ザビ率いる機動大隊せん滅。
	ザビ家末子、ガルマ・ザビ戦死。
10.06	サイド3、第1コロニーにおいて、ガルマ・ザビの国葬が行われる。
	ジオン軍総帥ギレン・ザビ、全地球的規模の演説を展開。
10.10	ホワイト・ベース、太平洋横断。アジア大陸に進入。
	以後、エンジンの不調に悩まされつつ、(そのため大気圏離脱も不可能だった)中央アジアの奥深く進む。
10.11	レビル將軍の部隊、ドーヴァー海峡を越える。
	オデッサ作戦のための部隊集結。
11.02	ホワイト・ベース艦長ブライト・ノア、レビル將軍より、“3日以内にカスピ海を渡れ”との指令を受ける。
11.05	ホワイト・ベース、ランバ・ラル隊撃破。
	ランバ・ラル大尉戦死。

ルナツーから地球へ

9月20日午前11時40分、連邦宇宙軍の拠点ルナツーに到達したホワイト・ベースだったが、そこで待っていたのは

あまりに無情な決定だった。ホワイト・ベースはこのま

ま、連邦軍本部ジャブローに向かわれたし。正規の乗組員の半数以上を失った艦に対する仕打ちとしては、あまりに冷たい。

だが軍にも、それなりに理由があった。連邦軍の宇宙での拠点はルナツーしかなく、広範囲に及ぶ地球圏全体をカバーするの

に、あまりに戦力、人手が不足しすぎていた。また連邦軍本部ジャブローでは、ある程度ホワイト・ベ

ースに見切りを付けていた。

サイド7でのMS試験データーはすでに入手済みであり、ペガサス級母艦もすでに3番艦が就航し、4番艦以降も続々完成しつつあった。

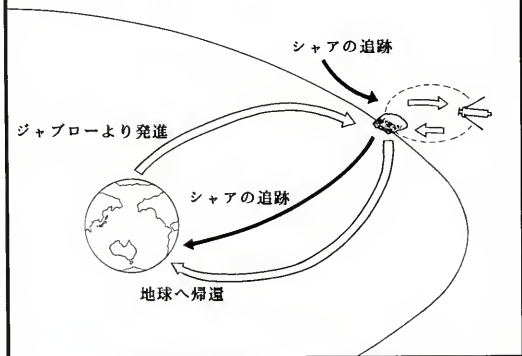
そのような理由からホワイト・ベースは、なかば見捨てられたような形になったのだ。この軍上層部の決定に対し、ルナツー司令官のワッケイン少佐はこう漏らした。

「ジオンとの戦いが、まだまだ困難を極めようという時、我々は素人まで動員していく、寒い時代とは思わんか」と。

大気圏突入戦闘

23日午後、サラミス級巡洋艦「マダガスカル」の護衛を得て、ホワイト・ベースは地球大気圏上層にまで降下した。一方シャア少佐は、直属の上官ドズル中将に「V作戦発

ホワイトベース航路～追撃部隊



見の報を送った後、直ちにMSとその他の資材の補給を受けた。そして、

「第一目標、木馬（ホワイト・ベースの呼称）。第二目標、敵のMS」と狙いを定め、4機ものMSを投入した。

大気圏突入直前の、防御の手薄な瞬間を狙ったのだ。

古今、大気圏突入前の低高度で戦闘を行った例など一切ない。それほどの危険を犯してまで、シャアはホワイト・ベースの秘密を欲していた。

ムサイからの援護射撃のもと、2方向に分散しホワイト・ベースに襲いかかるMS隊だが、徐々にではあるが力を付けてきていたRX-78とアムロ少年に、シャアのMS部隊は苦戦。3機を失い、後退するはめになる。

「連邦のMSはバケモノか！」

シャア少佐は、RX-78を称してこう叫んだ。

なおかつRX-78は、この戦いで、単独大気圏突入能力をも見せた。シャアはこれを見て、ますますRX-78の性能に慄然とした。

辛くもシャアの手を逃れたホワイト・ベースだったが、その攻撃を避けるため、航路の修正を余儀なくされた。

降下予定地点から、北にそれること2300km。そこは、ジオン地上軍の主力基地、カリフォルニア・ベースの勢力圏内のまっただ中だった……。

シャア少佐は、いち早く、北米ジオン軍を取り仕切るガルマ・ザビ大佐に通報。ホワイト・ベースの降下予定地点を知らせるとともに、航空兵力による迎撃部隊の出撃を依頼した。

U.C.0079.09.19~11.05

ホワイトベース追撃戦

大戦中、数奇な運命を辿り、堂々たる戦果を残した艦
ホワイト・ベース。戦略上は小さな戦いばかりだが、
その戦いの記録は、極めて興味深いものばかりだ……

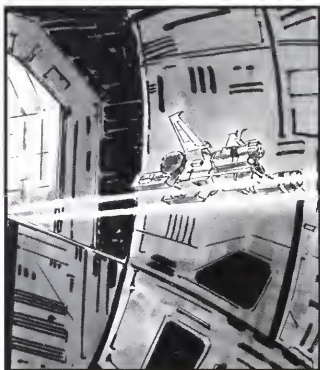
ガルマ隊の迎撃

9月23日16時（地球現地時間）。地球に降下したホワイト・ベースは、ジオン航空部隊と接触。交戦状態に入った。ガルマ・ザビ大佐自らが指揮する迎撃戦闘部隊は、ガウ型航空攻撃空母3と、ドップ型戦闘機60機以上から編成されていた。

また付近の基地から発進した機甲部隊も合流。空と陸からの両面攻撃が行われた。

以後その戦闘は、ガルマ隊の緩急自在な波状攻撃が続き、1時間以上継続された。だが、ホワイト・ベース隊はよく耐えた。

RX-78以外に、RX-77、75、およびコア・ファイターが動員されたためもあるが、素人ばかりの集団が



ここまで持ちこたえたのは、特筆に値する。ホワイト・ベースこそがニュータイプ部隊だったと言われる所以である。

ガルマ・ザビ戦死

18時近くになり、ホワイト・ベース隊は敵を排除した後、ようやく連邦軍の補給部隊と

接触できた。

136連隊所属の航空補給部隊。マチルダ中尉指揮の、ミディア輸送機から成る部隊である。

これはジャブローの差し向けた配慮ではなく、当時イギリス方面司令部で、ヨーロッパ反攻作戦の準備を進めていた、レビル將軍の采配であつ

今まさに、サイド7に入港しようとするホワイト・ベース。入港時、周囲を監視していた哨戒艇から撮影された一枚。この艦が、後に数奇な運命を辿ることになるうとは。

ホワイトベース航路1



たとえられる。

「ホワイต์・ベースの戦果。素人はかりの部隊にしては、異常すぎるな……」

レビル將軍はルナツーからの報告を受領した後、そうつぶやいたと言う。

それから10日後の10月4日、ホワイต์・ベースは、ついにジオンの最終阻止ラインにまで接近した。

ガルマ・ザビはこの報を受けるやいなや、機動一個中隊を指揮。直ちに現場に向かう。臨時に、ガルマの指揮下に置かれていたシャア少佐も、この木馬追撃戦に参加した。

4日21時、雨天野球場に逃げ込んだホワイต์・ベースに対し、絨たん爆撃によるローラーシフト作戦を展開。市街地を赤く染めた。

「これで当たらなければ、お

めでとうという所だな」と乗組員が漏らすほど、その爆撃は徹底されていた。

「敵を真正面におびき出す！」

ホワイット・ベースの艦長代行を務めていたブライト・ノア中尉は、果敢に敵襲に応じた。一方のガルマ隊は無防備にも、RX-78にのみ注意を払いすぎた。(だが冷静なガルマ大佐にしては、この行為はあまりに愚か過ぎる。戦史家たちの一部には、部隊内に裏切り者がいたとまで言う者もある)

ホワイット・ベースと、援護機のRX-77、75の砲門が一斉に火を噴く。

この集中砲火を背後から浴びたガルマ隊は全滅に近い被害を受け、そして指揮官のガルマ・ザビも、ガウと共に散ったのである。

さらなる追撃

「ザビ家の末子、ガルマ・ザビ戦死。」

この報せは、その日のうちにジオン本国へ伝えられた。

デギン公王はそれを伝える特使の前で、声もなくその杖を落としたという。

直ちにザビ家一党に召集がかけられた。そして長男ギレンの提案により、盛大な国葬が行われる事となった。公王デギンは、秘かな密葬を希望したというが、政略に長けたギレンは、これをプロパガンダに利用しようと考えたのだ。

10月6日、利用可能なあらゆる通信回線を用い（レーザ―回線までも使用したと言われる）、全地球的規模の国葬と、大演説が行われた。

「悲しみを怒りに変えて、起

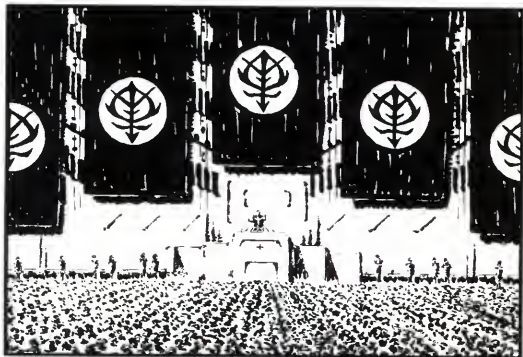
てよ国民よ！」というギレンの演説は、連邦に対する徹底抗戦の意思表示に他ならなかった。

連邦軍の秘匿回線にまでこの演説が流されたというから、さぞ連邦軍の高官たちは肝をつぶしたことだろう。この国葬は、情報収集力のプロパガンダでもあったわけだ。

一方ガルマの戦死は、各方面にも波紋を投げかけた。

まず、連邦軍のMS開発が明るみにされた点。これによりジオン公国の、対MS用MS開発に拍車がかけられた。遅かれ早かれ、量産型MSを連邦が投入すると考えてだ。

また、シャア少佐はガルマを守りきれなかった責任を取らされ、降格され、新たな部隊がホワイト・ベース追撃に差し向けられた。



ガルマ・ザビ国葬時の一枚。ギレンは身内の死までも、プロパガンダのために利用した。特にガルマを溺愛していたデギン、そしてドズルは、この頃から、ギレンの暴走に気付き

始めた。だが今となっては、ギレンの政治的手腕だけが、ジオン公国の生命線だった。この演説は全地球圏に向けて流されたので、年輩の方なら、ご覧になった記憶もあるだろう。

各戦線の局面と戦局の推移

■ペガサス級強襲揚陸艦とV作戦主要メカ群

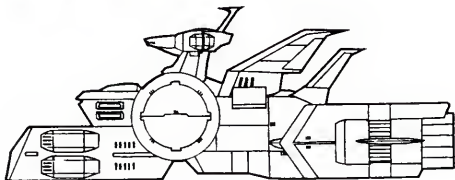
ペガサス型強襲揚陸艦は、MS 2個小隊を搭載し、敵陣深くに攻撃をかけるべく開発された艦である。そのため、1艦だけであらゆる任務をこなせるだけの能力を有している。

またペガサス型艦は、MS 支援用メカも標

準搭載し、作戦行動をより確実にできるよう配慮がなされている。

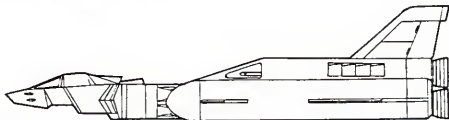
特に目ざましいのは、単独大気圏突入、離脱能力で、ミノフスキー・クラフト（空中浮揚システム）の実用化によって実現した。

↓強襲揚陸艦 ペガサス型（ホワイトベース）



ペガサス型艦は、前部左右のカタバルトデッキにMSを1小隊（3機）づつ、計6機搭載できるよう設計されている。さらに船体中央、後部にもフライトデッキを持ち、必要とあらば最大12機までのMSが搭載可能である。また船体の各ブロックは独立したモジュール構造となっており、被弾時、誘爆の危険がある時には、速やかに分離させる事が可能。このペガサス型艦の基本構造は戦後も大いに参考にされ、アーガマ型、ネル・アーガマ型など、同一構造の艦艇が建造された。

↓MS支援用戦闘攻撃機 コア・ブースター



連邦軍のRX系MSに内蔵されている脱出ポッド、コア・ファイターは、その戦闘力の高さから、少数が、純然たる戦闘機として生産された。そのコア・ファイターの攻撃力増強、航続距離延長を目的に作られたのが、このコア・ブースターである。コア・ファイター本体の後部に接合する形でドッキングするこのユニットには、可動式メガ粒子砲2門と、対地攻撃用ミサイルなどが搭載されている。この装備により、コア・ファイターは、強力な戦闘攻撃機として生まれ変わったのだ。

ランバ・ラル隊

差し向けられたのは、突撃宇宙軍の精鋭、ランバ・ラル隊だった。

ランバ・ラル大尉。ルウム戦役で大戦果を挙げ、『青い巨星』の名を欲しいままにした人物だ。

ゲリラ戦を得意とし、開戦以前から、さまざまな謀略を成功させているだけでなく、ジオンMS部隊創設の勲功者の一人でもある。

もともとはジオン・ダイクン派の人間ではあったが、その優秀な戦術家としての腕を買われ、軍内では、かなり優遇された待遇にあった。

それほどまでの人物をホワイト・ベースに放ったのだが、これは戦略、戦術的に意味のある行為ではない。あくまで

ザビ家の私怨に由来するものである。

ザビ家独裁政治のジオンならではの出来事だが、結果的に、このような個人的感情による采配がジオンの崩壊を早めたことは、疑う余地がない。特に兄弟間の確執もこの時期から顕著になり、必要以上の縄張り意識に、前線の兵たちはしばしば行動の自由を失った。新技術の導入、新兵器の配備、補給活動等についても同じ事が言える。

地上に降りたランバ・ラル隊も、そのような不幸な状況に巻き込まれる事となった。

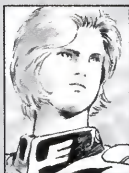
ジオン軍の内情

中央アジアでホワイト・ベースを追撃するランバ・ラル隊は、マ・クベ大佐の取り仕切るヨーロッパ鉱山基地から

ホワイトベース航路2



戦場の英雄たち



ガルマ・ザビ大佐

ザビ家の四男。建前としては地球方面軍総司令官の立場にいたが、実際の指揮権は、北米方面のみに限られた。いかにザビ家の人間とはいえ、19歳の若輩に、100万を越す軍の指揮は取れぬということだろう。そのため立場に見合った勲功を立てようと、ホワイト・ベース追撃に全力を投入した。だがその結末が、自らの死だったとは。



ブライト・ノア中尉

当初は士官候補生としてホワイト・ベースに配属されたが、正規の士官亡き後、艦長代理の任に就いた。ジャブロー到着後は、大尉の位を得、ホワイト・ベースも、ティアンム艦隊所属・第13独立艦隊内に組み込まれる。素人ばかりの集団を指揮し、幾多の戦場を生き残った彼の實力は、大いに評価されてしかるべきである。



ランバ・ラル大尉

ゲリラ戦のプロフェッショナル。ドズルの勲命のみで行動する独立部隊を指揮。開戦前から、さまざまな謀略を成功させている。MSパイロットとしても有能で、1週間戦争時には、4隻以上の戦艦、巡洋艦を撃沈。その愛機、MS-05が青色に塗装されていたことから“青い巨星”の異名で呼ばれる事もある。

補給を受ける手はずになっていた。だがマ・クベはキシリア少将直属。一方のランバ・ラル隊は、ドズル中将の直属部隊だったのだ。

もともとキシリアは、ホワイト・ベース追撃などという個人的感情からくる作戦を良しとしていなかった。またヨイロッパで、連邦軍が大規模な反攻作戦を計画しているとの情報もあり、余計な補充物資を送る気もなかった。

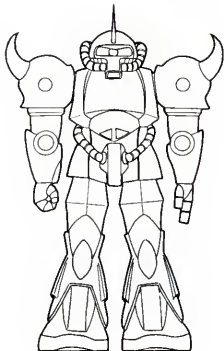
ランバ・ラル隊は満足な補給も受けられず、要請した新型MS(MS-09)の補充も、中継点であるマ・クベの基地で、かすめ取られてしまうような事にもなった。

逃げるホワイト・ベースも、追うランバ・ラル隊も、持てる戦力をかき集めての戦いに明け暮れたのである。

■ジオン軍 対MS用MSの出現

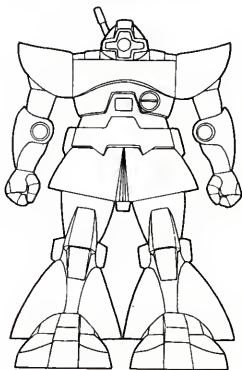
連邦軍が、いずれはMSを実戦に投入してくる事を予見していたジオン軍上層部は、早くから、対MS用MSの開発に着手していた。特に地上の局地戦を想定して設計されたMS-07グフは、MSの動力機構を一時的にマヒ

させる電撃兵器、ヒートロッドを装備している。またMS-09ドムは、格闘戦を考慮にいった重装甲を施し、白兵戦兵器として、ヒートサーベルや、敵MSのカメラを焼き付けせる、低出力ビーム砲などを装備している。



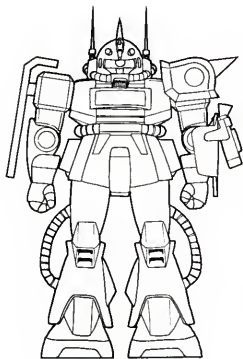
←地上戦用MS MS-07グフ

対MS用武装を装備した初めてのMS。06よりも地上での移動能力を重視して設計されているが、そのために宇宙空間での使用が困難となり、陸戦型のための生産で終る。



↑局地戦用重MS MS-09ドム

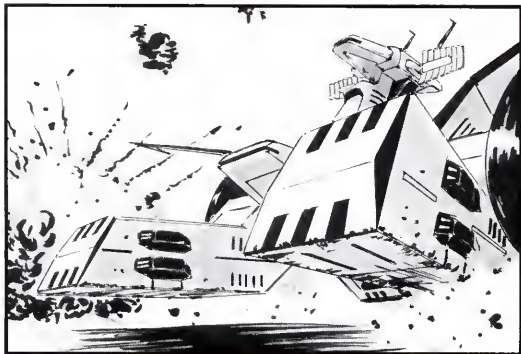
本来地上での局地戦を前提に設計されたが、汎用性に優れており、後に宇宙戦用型が生産された。宇宙戦型のR型はリック・ドムと呼ばれ、大戦末期に活躍。



←砂漠地帯用MS

MS-06Dデザート・ザク

MS-06の砂漠戦用。単に防塵装備などを追加しただけでなく、F型に比べて、装甲、出力の増強が計られている。これは対MS戦闘を予測した物であり、総合性能は高い。



低空を浮行するホワイト・ベースの姿を撮影した、貴重な一枚。MS-06のガンカメラでとらえられた映像である。地上を低速で移動するホワイト・ベースは、格好の攻撃目標

であり、ドップ隊は思う存分、対艦攻撃を行った。しかしホワイト・ベースの対空火器は充実しており、その濃密な弾幕は、数多くの攻撃機を返り討ちにしている。

オデッサ・デイ

一方連邦軍の状況はどうであったか。

ランバ・ラル隊の攻撃の間を縫い、細々ながら、マチルダ隊の補給が行われた。そしてその際に、逃走を続けるだけだったホワイト・ベースに新たな指令が下った。

ホワイト・ベースは、5日以内にカスピ海を越えられたし。

これはヨーロッパ反攻作戦、通称オデッサ作戦の準備を進める、レビル將軍直々の命令であった。時に11月2日、ホワイト・ベースが中央アジアに到達し、すでに2週間以上が経過していた。

レビル將軍はホワイト・ベースの戦果を聞き、本物のニュータイプ部隊と確信したの

である。

「いかにニュータイプ部隊だろうと、一隻の艦に後方攪乱を行わせるとは……。苦しい戦いですな、これは」

という、当時副官だったエールラン中將（後にジオン側のスパイと発覚）の言葉に、「この程度のリスクを乗り越えられんようでは、真のニュータイプ部隊とは言えんよ」と、レビル將軍は事もなげに答えたという。

11月5日、ホワイト・ベースはカスピ海付近で、ランバ・ラル隊を撃破した。

これにより、かねてよりニュータイプの実戦投入を計画していたジオン側は、ホワイト・ベース隊がニュータイプ部隊であるという確信を得た。そして2日後、ついにオデッサ作戦が発動した。

U.C.0079.11.07～11.09

オデッサの戦い

ヨーロッパ～アジア間における、連邦軍反攻作戦。この戦いの後、地球の軍事バランスは一変。ジオンは、敗戦への道を歩みだすのだった……。

その目的と目標

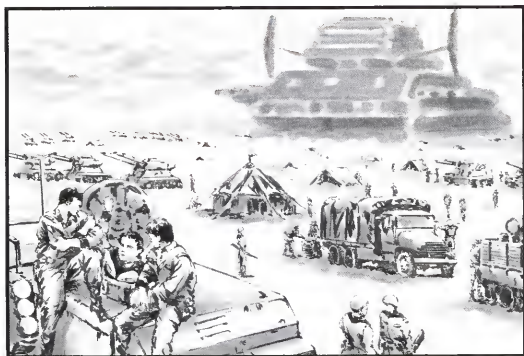
オデッサ作戦。

この作戦は、貴重な鉱物資源（ボーキサイト、ニッケル金など）を産出する中央アジア～ヨーロッパ間の鉱山を、ジオン軍から奪回するための作戦である。

と同時に、ヨーロッパのミラリバーバランスを一変させようという目論見もあった。

10月10日、イギリス・サウサンプトンの基地より、レビル將軍の乗るビッグ・トレール型陸戦艇が発進した。このビッグ・トレール「パターン号」は、今回の作戦の移動指令本部となる。

11日、ビッグ・トレールはドーバー海峡を越え、集結拠点となるワルシャワを目指した。これに先立って、トリポリ、



中継点であるユーゴスラビア方面でキャンプを張る第3軍所属の第26機甲大隊。遠方に見えるのは、ジナルアルプス山脈だろう。撮影日は11月5日。作戦開始前の、最後の休息

といった所だろうか。背後に控えるビッグ・トレールは、8号艇の「マルケッティア号」。第3軍には、レビル將軍の「パターン号」以下、3隻のビッグ・トレールが配備されていた。

各戦線の局面と戦局の推移

ジェノバ、ライプチヒ、ストックホルム、ハノーバーの基地よりも各部隊が発進。ワルシャワに通じる幹線道路は移動する機甲部隊で埋めつくされ、空には幾条もの飛行機雲が出来たという。

またオスロ港からは、ヒマラヤ級空母、アルバータ級ミサイル巡洋艦を主力とする2艦隊が南下。ジオンの潜水艦隊に牽制をかけた。

都合8方面から、このオデッサ作戦に向けて部隊が集結した事になる。

これは開戦以来、最大の地上戦を予感させた。

「本作戦の勝敗は、すなわち、今回の大戦の勝敗でもある。

資源に乏しいジオン軍は、この鉱山を失えば、おのずから終戦を申し込んでくる！」

各軍の司令官は、こう言っ

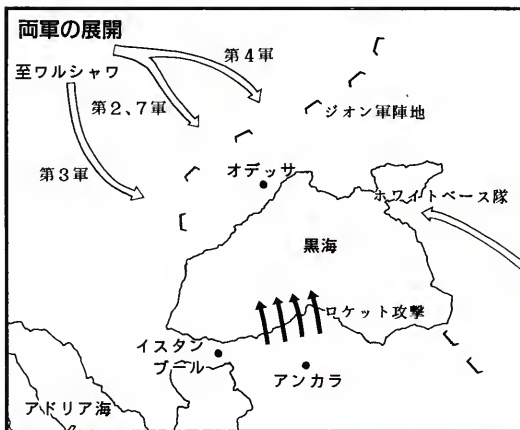
て部下を励ました。

しかし部隊の集結の遅れは目立ち、レビル將軍は作戦開始日の繰上げを諦めざるを得なかった。余計な時間を与えれば、敵は完璧な布陣を整えてしまふだろう。それは、避けねばならない事態だった。すでに作戦の決行自体は、ジオンにも察知されている。1時間でも1分でも早く、敵の先手を打たねばならないのだ。

「お前らの1分の遅れが10人。1時間の遅れが100人の友軍兵を殺すと思え！」

後方から追隨する補給部隊では、このような檄が飛ばされていた。

途中故障した車両を放棄してでも、部隊の集結は急がれた。すべては、ヨーロッパに勝利をもたらすために。





軍属の戦場カメラマン撮影による、決死の一葉。MSの足元では、このような昔ながらの歩兵達がうごめいていた。いかにMSが強力な兵器と言えど、陸戦の主力は太古の昔から変わらず歩兵である。彼ら是对戦車ライフ

ル、無反動砲などで身を固め、砲弾の雨の中を駆けめぐる。……何のために？ それに答えられる者は、戦場のどこにもいない。なおこの写真は、戦後、ユニバーサル・ビューリッツァー賞を受賞している

ジオンの布陣

マ・クベの上官キシリアにしても、鉱山基地を失うわけにはいかない。だがキシリア少将の本来の拠点は月であり、表だって支援部隊を送ることはできなかった。ここにも、ジオン軍内部の不協和音が見え隠れしている。

それでもキシリアは、「男子のメンツ、軍の権威、それが傷つけられても軍が勝利すればよろしい！」

と言い放ち、虎の子のエース部隊「黒い三連星」をマ・クベの基地に秘かに派遣した。この黒い三連星こそ、ルウム戦役でレビル將軍を捕虜にした部隊である。それがレビル指揮の部隊と地球で戦う。戦場の中の因縁と言うべきだろうか。

各戦線の局面と戦局の推移

■両軍の主兵器

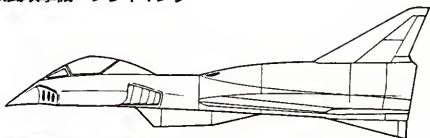
連邦軍はジオンの航空戦力が不足しているのを察知し、集められるだけの航空機を、本作戦に投入した。

さすがのMSも、地上においては空からの攻撃に弱く、その行動は制限されてしまった。

その際、意外な活躍をしたのがジオンの戦術偵察機ルググンである。

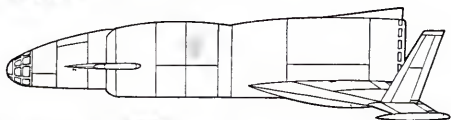
ルググンは連邦軍の攻撃機隊の機影を捉え、予測進路を素早く割り出し、地上のMS隊に最も安全な進行経路を教えたのである。

↓連邦軍戦闘攻撃機 フライマンタ



連邦軍の主力戦闘攻撃機。長大な航続距離を誇り、また爆弾搭載量も多い。しかし空戦能力は低く、戦闘機の護衛は不可欠だった。連邦軍はこのフライマンタを地上攻撃の主力とし、制空戦闘にはT1Nコッド型を大量に投入した。

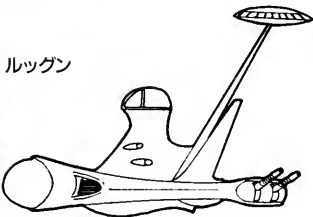
↓連邦軍重爆撃機 デブ・ロググ



鉱山基地や森林にたてこもるジオン軍掃討に投入された大型爆撃機。機体底部に無数の20ミリモーターガトリング砲を装備した地上掃射型、レーザー誘導爆弾を搭載した拠点攻撃型など、多数の派生型が実戦に参加。多大な戦果を上げた。

→ジオン軍戦術偵察機 ルググン

超高出力のレーダーを有し、ある程度までのミノフスキー粒子濃度なら、遠距離の索敵が可能。また高性能赤外線センサ、聴音センサなども搭載し、総合的な情報収集能力を高めている。機体の完成度も高く、空戦能力こそ低いのが、余剰推力を利し、短距離ならばMS-06を1機運搬可能である（機体下部に吊り下げる）。



両軍の投入戦力

	連 邦 軍	ジ オ ン 軍
総兵員数	370万人が直接戦闘に参加。 さらに後方要員が400万人以上。 地上の全兵員の半数に相当する。	90万人が戦闘に参加。 後方要員が8万人前後。 (アフリカからの援軍含む)
戦車・機動兵器	主力戦車が5800両以上。 その他戦闘車両、9000両以上。 (MSも少数参戦)	主力戦車、2000両以上。 その他戦闘車両、1500両以上。 MS、1100機以上。
火砲	火砲、総数2万5000門以上。 ロケット砲、1万基以上。 対地ミサイル、4万発分。	火砲、総数1万門前後。 ロケット砲、2000基以上。 対地ミサイル、2万発分。
航空機	戦闘機、1800機以上。 対地攻撃・爆撃機、3300機以上。 補助航空機、800機以上。	戦闘機、600機以上。 対地攻撃・爆撃機、800機以上。 補助航空機、500機以上。
その他	ビッグ・トレイ型陸戦艇、12隻。 ベガス型強襲揚陸艦、1隻。 牽制用海上艦隊、6戦隊。 (この他、現地のバルチザン兵も 攻撃に協力したとされているが、 詳細は不明)	ダ・ブデ型陸戦艇、5隻。 ギャロップ型陸戦艇、8隻。 固定メガ粒子砲座、約200基。 (この他、連邦艦隊への攻撃のため、 8隻のユーコン型潜水艦がア ラビア海等に待機していた)

作戦決行

そして11月7日6時、各地に配備された総計2万5000門に及ぶ火砲、2000基ものミサイル、ロケットランチャーが、一斉に火を噴いた。それがオデッサ作戦決行の合図だった。

レビル將軍は各陣地から、同時に部隊を侵攻させた。最も原始的な包囲戦である。

「勝は大兵にあり」。

古来からの戦訓通り、数に勝る連邦軍は圧倒的多数を以て、オデッサ基地を守るように設置されたジオン防衛線に挑んだ。

北からは、61式戦車を主体とした機甲師団を擁する第4軍が。北西からは、第2軍、第7軍が。そして西からは、レビル將軍指揮の第3軍が。

さらに好天に恵まれた航空隊も、キエフ、ソフィア、イスタンブールの前線基地から飛び立った。

また黒海対岸のアンカラからは、間断なくミサイル、ロケット弾攻撃が行われた。

特筆すべきは、連邦軍が量産型MSを、少数ながら実戦投入した点だろう。

RX-78の実戦データをインプットしたRGM-79ジムが総計30機、試験的に投入されたのだ。

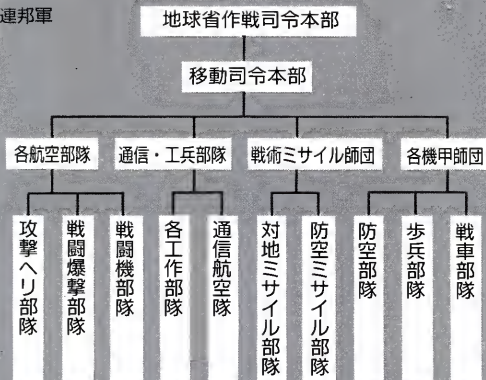
このMS部隊は、ジオンにその秘密を知られないよう後方に配置されたが、それでも21両の戦闘車両、4機のMSを撃破したと伝えられている。だがその一方で機械的トラブルも相次ぎ、30機のうちまともに戦闘行動が行えたのは、15機前後だったと言われる。

各戦線の局面と戦局の推移

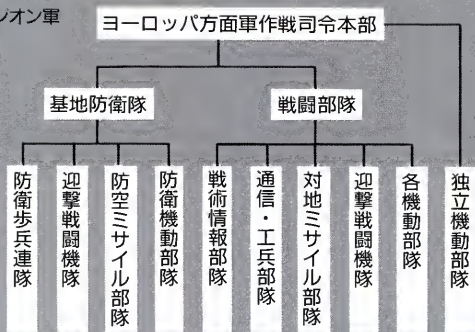
両軍の部隊構成

今回の作戦における両軍の指揮系統は、以下のようになっている。それぞれ責務を果たし、最善の策を取ったが、戦いの最中、指揮系統が混乱することが度々起こった。(両軍ともに)

連邦軍



シオン軍



月・日・時	戦 局 の 推 移
10.10 18:00	イギリス方面より、レビル將軍率いる第3軍が発進。
10.11 02:50	レビル軍、ドーバー海峡横断。
10.12	連邦軍、陽動のため、オスロ港から2艦隊を南下させる。
10.20	各軍、集結地点であるワルシャワに到達。野戦本部設営。
10.25	作戦最終確認。攻撃地点隠蔽のため、陽動部隊を多数各地に派遣。
11.02	連邦軍、追加の増援部隊到着。(主に航空兵力)
11.06	ジオン軍、黒い三連星が支援のため到着。
11.07 06:00	オデッサ作戦の開始。 連邦各部隊、行動を開始。 航空機隊、順次発進。
09:20	ホワイト・ベース隊、ランバ・ラル隊の生き残りと交戦。
13:40	レビル將軍の主力部隊が、第1陣の防衛網突破。 他の前線でも、ジオン軍後退を開始(守備範囲をせまくするため)
20:00	突出したレビル軍、敵の反撃を受ける。
11.08	前線、やや落ち着く。(双方手が出せない状態)
11.09 03:35	北の第4軍、包囲網を突破。以後、さしたる抵抗を受けずに進軍。
05:00	第4軍の突入をさかいに、連邦軍の攻勢がはじまる。
11:00	ジオン軍、防衛線の縮小。 連邦軍主力部隊(第3軍)、カルバート山脈東、キシニョフへ到達。
17:00	ジオン軍司令官マ・クベ大佐、宇宙へ撤退。
11.10	残敵掃討。14時には、臨戦体制から警戒体制へ。

連邦軍の進撃

戦いは、7日午前6時から10日まで、丸3日間続いた。

ジオン軍は少ない戦力ながら、各個撃破戦法を駆使してよく耐え、数では4倍近い連邦軍とともに渡り合った。

もちろん、MS部隊の活躍があつたのは言うまでもない。そしてこの戦いの中、多くの伝説も生まれた。

ジオン軍対地攻撃機隊のヘルムート・ルッツ大尉は、3日間のうち地上にいた時間は、補給と仮眠のための12時間程度でしかなかった。それ以外の時間は愛機、ド・ダイGA(対地攻撃型)と共に、常に空にあった。

連邦軍は圧倒的数で押し寄せてくるため、索敵にかける時間は少なくてすむ。彼は容

易に敵を発見し、480両もの戦闘車両を撃破。タンク・キラの名を欲しいままにした。

なお彼は、自機が戦闘爆撃機にもかかわらず、14機の敵戦闘機をも撃墜している。

だがそんな彼も、9日、降着装置の不備で着陸に失敗。帰らぬ人となった。

連邦軍ではテキサン・ディミトリー中尉が、T-1Nコックピット型戦闘機でドップ以下34機を撃墜。作戦終了後、第1等戦功殊勲章を受けている。後に彼は、テキサスの黒い悪魔、サミュエラ少佐に次ぐ地球圏のトップエースの一人となった(本大戦での総撃墜機数301機)

さらに将官で言えば、ルウムの奇跡、レビル將軍もまた、新たな伝説を残している。

ジオン軍総司令官マ・クベ

各戦線の局面と戦局の推移

大佐の「核による脅迫」にも屈せず、將軍はただ黙ってその手を振った。これは前進あるのみ、という確固たる自信の現れであった。

このレビル將軍の行動に、居合わせた各将官は、この戦いの勝利を確信したとされる。こうして敵味方ともに奮戦した3日間であったが、物量の差は最後まで覆せず、主要なジオン軍高官達は宇宙巡洋艦ザンジバルで本国へ撤退。残された兵の多くは連邦に投降したが、中にはジオンの勢力圏内である、アフリカへ逃走する部隊もあった。

なお、この戦いの後、ただ1隻で後方攪乱の任を果たしたホワイト・ベース隊に対し、レビル將軍はブライト・ノア艦長の手を取り、その労をねぎらったと伝えられている。

戦場の英雄たち

写真未入手

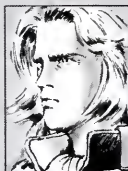
ヘルムート・ルッツ少尉

ジオン軍ヨーロッパ方面第15戦術爆撃隊所属。陽気で明るい性格の持ち主で、部隊内での人気も高かった。マ・クベ大佐が「前線で不足している物は何か？」と聞いた時「コア・ファイター型が、あと30機もあれば助かります」と言ったエピソードは有名。残念ながら写真未入手。この戦いで戦死。



ロイ・ジューコフ大佐

後方で指揮を取るマ・クベ大佐に対し、ジューコフは防衛隊を指揮して、常に前線にあった。彼はMSの性能をあまりあてにしておらず、戦車隊を中心に部隊を展開させた。地形を利用した待ち伏せ戦法を多用し連邦軍の進行をよく食い止めたが、物量差に押し切られてしまう。10日15時ごろ、進行する連邦軍に捕らえられ捕虜に。



テキサン・ディミトリー中尉

連邦軍第6空軍288戦術航空隊所属。その甘いマスクから、仲間の間では「レディキラー」の愛称で親しまれていた。フライ・マンタ戦闘爆撃機に搭乗していた頃は平凡なパイロットだったが、TINコッドに機種転換してからめきめきスコアを稼ぎ、エースにのしあがった。彼の自叙伝「大空の騎士」は、ベストセラーにもなった。

U.C.0079.11.18~11.22

ベルファスト上陸戦

連邦海軍の、大西洋における戦略拠点ベルファスト。この軍港を海面下から監視する、潜水艦隊があった。ジオンの誇る潜水艦部隊、マッド・アングラーである

潜水艦部隊の誕生

話は2月にまで遡る。

大量の地上制圧部隊を降ろしたジオン軍は、直ちに各都市の占領を行うと共に、連邦軍の軍施設、兵器工場の多くを接収した。

中でも一番の収穫は、カリフォルニアの連邦海軍基地を、ほぼ無傷のまま制圧できた事であろう。

このカリフォルニア基地には、潜水艦建造を一手にまかなう大規模な造船所があった。そしておあつらえむきに、稼働可能な数十隻の潜水艦も残されていた。

ジオンの侵攻があまりに迅速すぎ、破壊する間もなかったのだ。

これがジオン潜水艦隊発足の発端である。

せっかくの潜水艦建造施設であるが、ドズルなどは、

「宇宙艦艇建造施設、もしくはガウ型攻撃空母の生産に回すべし!」と唱えた。

海のない、生粋の宇宙の戦士である。そう考えるのが普通であろう。

しかし古き戦史から、海洋制圧こそが地球制圧につながると学びとっていたキシリアは、頑強に潜水艦隊設立を提唱。完成後は月に配備されるはずだったドロス型宇宙空母2番艦「ドロウ」をドズルに譲ってまで、その考えを実行に移させた。

キシリアの暗躍

こうして連邦軍の攻撃型潜水艦VIII(8)型は、USMサイロの一部を撤去、MS格納庫に改装され、新たにユーコ

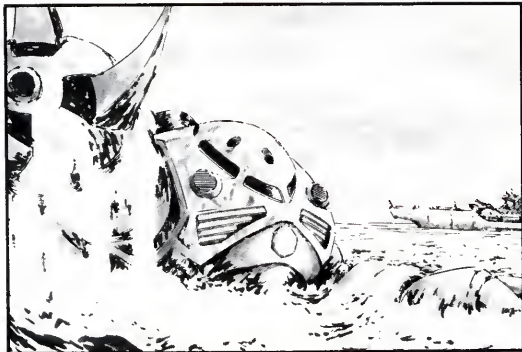
ン型として生まれ変わった。また同じく残されていた旧式の潜水艦V(5)型は、各種電子装備などを施され、情報収集潜水艦ブローパーとして再生された。

海洋艦艇の開発など不可能だったコロニー国家・ジオンにとって、連邦の優秀な潜水艦を手でできたのは幸運だった。さもなくば、ジオンは終戦まで、一切海洋兵力を持たないままだっただろう。

さらに、それを有効に運用したキシリアの采配にも、先見の明があったと言える。

7月より実質的に運用され始めた潜水艦隊は、戦略海洋諜報部隊の名の下、連邦地上軍の偵察、また海上通商活動の妨害、さらに残存海上艦隊への攻撃を行った。

キシリアの意見の正しさを、



ベルファスト港内で姿を現す、MSM-07ズゴック。水陸両用MSの中では新型であり、水中移動速度、陸上での機動力ともに、MSM-03を上回る。遠方に見えるのは、連邦軍

の新造ミサイル駆逐艦「モンブラン」型。船籍ナンバーなどから推察するに、第82護衛艦隊所属の「ログウッド」と思われる。軍の記録写真の1枚。

完璧なまでに証明した潜水艦隊であったが、彼女には、さらに別の目算もあった。

収集した情報の独占である。月が拠点であるキシリアにとって、自らが提唱し設立した戦略海洋諜報部隊は、地球を視ける唯一の窓だった。

彼女は地球から送られてきた情報を、まず自分が目を通し、特に有用でないものはそのまま各方面に流した。そして自分に役立ちそうな物を抽出し、それを独占したのだ。

これにより独自のニュース・ソースを得た彼女は、モビルアーマー、新型MSの開発、ニュータイプの実戦投入などを独自に行った。

やがて潜水艦隊は、少数ながら地球のジオン軍の中で、最大の戦略的意義を持つに至ったのである。

海面下の諜報戦

事実、潜水艦隊の働きは目ざましかった。

あらかじめ連邦勢力圏の各都市に潜ませていた諜報組織とのコンビネーションもあり、大は連邦海軍主力艦隊の動きから、小は各軍港の兵員数まで、全て明るみにされたのである。

また潜水艦隊は、秘密工作の母艦としても活躍した。

優秀な技術者の誘拐。軍事機密の奪取。要人暗殺などなど、それこそ、ありとあらゆる任務に使われたのである。仮にジオンがこの潜水艦隊を持たなかったならば、終戦は、もっと早かつたろうという軍事評論家もいるほどだ。

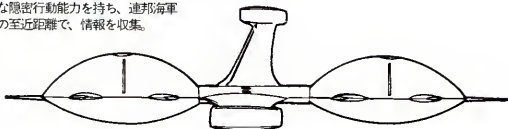
■ジオン軍の海上兵力

連邦の艦を再生して生まれたユーコン、ブローパー、マッド・アングラーの3艦。このほかジオンは、水陸両用MSと水中用MA、水上攻撃機シーランスなどを有していた。なお艦艇数は、ユーコン型84隻、ブローパー型

56隻、マッド・アングラー型2隻と、以外に少ない。その戦力不足を、MSに頼っていたのだ。なおユーコン型は数多くの派生型が存在しており、MS搭載数を増やした型や、逆に減らし、各種兵装を増やした型もある。

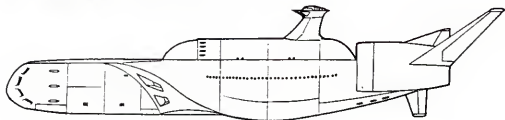
↓情報収集潜水艦 ブローパー型

高度な隠密行動能力を持ち、連邦海軍基地の至近距離で、情報を収集。



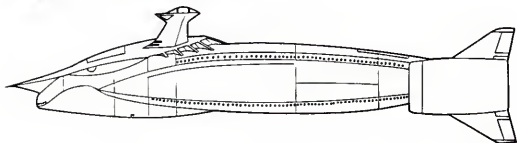
↓攻撃型潜水艦 ユーコン型

標準的なユーコン型は、水陸両用MSを1小隊（3機）搭載。またシーランス型水上戦闘機を1機、連絡、偵察用として格納している。後期生産型のユーコンの中には、MSを4機以上積める型も存在する。



↓水中母艦 マッド・アングラー型

水陸両用MSを3小隊（9機）搭載できる上、水中用MA、MSN-07を1機搭載できる能力を持つ。またシーランス型水上戦闘機を6機、偵察用小型航空機も3機以上搭載できる。まさしく深海の空母だ。



各戦線の局面と戦局の推移

マッド・アングラー

ユーコン型潜水艦以外にカリフォルニア基地には、連邦海軍が完成途中で放棄していた超大型の潜水母艦があった。海底のミサイル基地として建造されていたこの艦を、ジョンは水中指令母艦マッド・アングラーとして再生させた。この艦と2隻のユーコン型による潜水戦隊をマッド・アングラー隊と命名。大西洋方面連邦海軍基地・ベルファストを牽制するため、北大西洋に配備した。

そして10月末より動きだしたマッド・アングラー隊の司令官に収まったのは、シャア中佐（着任後、大佐）だった。そして配属されて間もない11月18日、彼はベルファストの港町に潜むスパイ107号か

追撃の手

ら、初メテ見ル戦艦、第二どつくニ入ル。形式不明との報告を受けた。

ホワイト・ベースを最初に発見したシャアは、この因縁の再会にほくそえんだ。

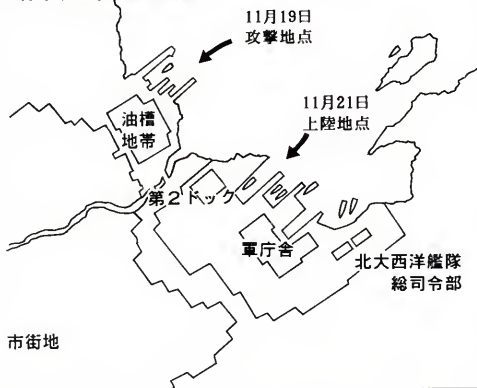
「配属されて早々に、木馬に出会うか……。私は運がいい」

そしてベルファスト方面の通商破壊に当たっていたブリン艦隊を指揮下に置き、ベルファスト港への上陸作戦を開始した。

ベルファスト港攻撃は、連邦海軍の戦力削減の意味もあり定期的に行われていたが、今度の指揮を取るのは伝説の人物シャアである。

彼はその攻撃目標を、ホワイト・ベースとガンダム一本に絞りこんだ。

ベルファスト周辺地図



■連邦軍の海上兵力

連邦軍の海上兵力は、極めて旧式、かつ貧弱である。これは開戦時のコロニー落しにより、海上艦艇の大部分が失われてしまったからだ。しかも宇宙艦艇建造が最優先されたがために、不足する戦力の補充も行われていな

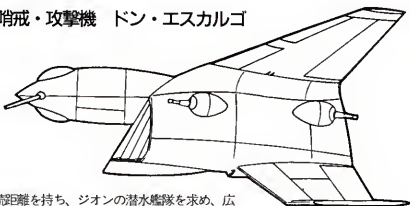
い。ただジオン潜水艦隊の猛威は無視できず、対潜攻撃機と、その母艦である小型空母は増産が続けられている。しかしその数はまだまだ少なく、制海権はジオン軍の手の中にあるのが現状だ。

↓対潜小型空母 ヒマラヤ型

ジオン軍の潜水艦隊撃滅のため組織された、対潜攻撃部隊の母艦となる小型空母。就役は大戦以前だが、大戦中期、新たに数十隻が追加で建造された。



↓対潜哨戒・攻撃機 ドン・エスカルゴ



長大な航続距離を持ち、ジオンの潜水艦隊を求め、広大な海洋を哨戒する。敵艦発見後は、対艦ミサイル、複合追尾式魚雷などを駆使して攻撃を開始する。なお本機は垂直離着陸機能を持ち、巡洋艦などのヘリ甲板上にも着艦可能である。

2回の上陸作戦

ホワイト・ベースを目標とする攻撃は、11月19日と21日の、2回に分けて行われた。

19日の攻撃には、水陸両用MS、MSM-03ゴッグ2機が使用された。

19日11時過ぎ、ユーコンからの弾道ミサイルの援護射撃を得て、2機の03は上陸に成功。偵察を兼ねた破壊行動を続けた。

しかしホワイト・ベース隊と、ベルファスト守備隊の活躍の前に、撃破されてしまう。だが2機の03は、クリアな電子スチル写真をユーコンに送信していた。それを受領したシャアは17日、今度はMSM-07とMSM-03の2機を送り込んだ。

MSM-07は新型の水陸

各戦線の局面と戦局の推移

月・日・時	戦 局 の 推 移
02	ジオン軍、北米カリフォルニア基地制圧。 連邦軍の潜水艦群と、その建造ドックを手中におさめる。
03	連邦軍正式潜水艦、VII型の改修作業始まる。
06	最初の潜水艦隊（ユーコン型3隻で編成）編成。北太平洋に配備。
07	潜水艦隊の数、10を越す。大西洋、インド洋、北極海にも配備完了。 以後、通商妨害、残存艦隊攻撃に活躍。
09	大西洋で、残存艦隊掃討作戦が行われる。
10.10	マッド・アングラー完成。試験航海実施。
10.30	マッド・アングラー隊発足。 司令官は、シャア・アズナブル大佐。
11:07	オデッサ作戦。牽制のため、2潜水艦隊北上。
11.18	シャア、ホワイト・ベースらしき艦をベルファストに発見。
11.19	ベルファスト近海に配備されていた26潜水艦隊（フラナガン隊）、ベルファスト港停泊中のホワイト・ベースを確認。
11.21	26潜水艦隊、MS2機による、ベルファスト港攻撃。 同日深夜、ホワイト・ベース、ジャブローに向け出港。
11.22	マッド・アングラー移動。ホワイト・ベース追尾。
11.24	マッド・アングラー、連邦海軍の対潜攻撃部隊を攻撃。ヒマラヤ型母艦撃沈に成功。
11.27	マッド・アングラー、ジャブローの宇宙船用出入口発見。 シャア大佐、ジャブロー攻撃を決意。

両用MSであり、その陸戦能力には定評がある。

2機は再び港内に潜入。今度是用心深く、水中から港への攻撃を行った。

連邦のMSに陸上戦を挑むのは、あまりに無謀と判断したためだった。

また今回の作戦の目的は、あくまで戦いを長引かせる事にあった。無理にホワイト・ベース隊を倒すこともない。

作戦の目的

作戦の目的は二つあった。

まず、ホワイト・ベースの足を止める事。そして戦闘の混乱に乗じ、ホワイト・ベース内にスパイを送り込む事だった。

シャアは、ホワイト・ベースの次の目的地がどうしても知りたかったのだ（ジオン側

はホワイト・ベースを、必要以上に重要視していた。まさか最新鋭艦が連邦内で厄介者扱いされているとは、夢にも思っていなかった）。

結局、17時から開始された上陸作戦だったが、今回もホワイト・ベース隊の奮闘により、戦いは18時20分に終結している。

前回同様、今回も帰還機なし……。しかし当初の予定通り、ホワイト・ベース出港の足を遅らせ、さらにスパイの潜入工作にも成功した。

翌22日、1時38分、予定より4時間ほど遅れ、ホワイト・ベースはベルファストを出港した。

その遅れた時間の間に、シャアはホワイト・ベース監視網を、より完全な物にする事に成功したのである。

U.C.0079.11.30~12.03

ジャブロー上陸作戦

連邦軍本部ジャブロー。ジオン軍の激しい攻撃を、何
度となく退けた難攻不落の地下巨大要塞。そのジャブ
ローに、シャア大佐率いるMS部隊が挑む！

連邦軍本部ジャブロー

ジャブロー。

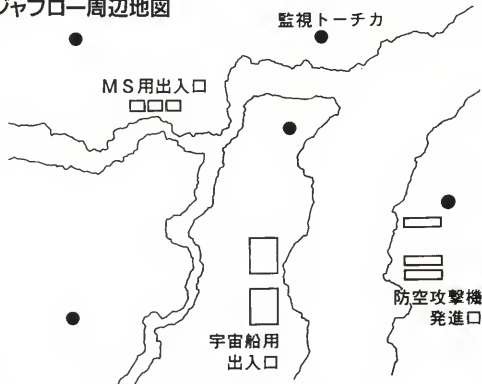
南米の天然の地下大空洞を
利用し作られた、地球上の軍
事施設としては最大級の物で
ある。

その総敷地面積は42平方km。
通常45万人もの人員（軍属含
む）が生活する、ちよつとし
た市に匹敵するサイズなのだ。
ここには連邦軍最高指令本
部が置かれ、さらに軍工廠、
宇宙艦艇建造ドックなどがひ
しめきあっている。

基地であり、工場であり、
宇宙港であり、そして街でも
ある。

そんな大規模な施設なのだ。
いかにジオン軍といえ、そう
そう手出しできる物ではない。
せいぜい牽制のための、定期
爆撃を行う程度だった。

ジャブロー周辺地図

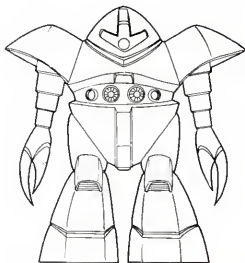


各戦線の局面と戦局の推移

■ジオン軍の水陸両用機動兵器群

水陸両用MSの開発は開戦前から行われていた。しかしその開発は難航し、地球侵攻作戦当初は、MS-06の水中型(M型)が暫定的に使用されていた。その後、本格的な水陸両用MS、MSM-03が完成。7月前半か

ら、順次配備されはじめた。このMSM-03を有して以後の潜水艦隊の活躍は目ざましく、連邦軍は反撃の手段を持たなかった。その後水陸両用MSは、隠密行動用の04、格闘型の07、重攻撃型の10などに発展。



↑水陸両用MS

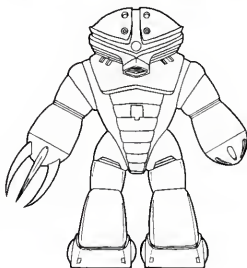
MSM-03 ゴック

最もポピュラーな型の水陸両用MS。水中での機動力を重視した機体で、機雷防御用の特殊装備“フリージャーヤード”を持つ。

↓水陸両用軽MS

MSM-04 アッグアイ

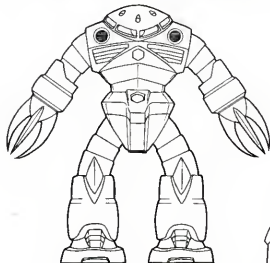
隠密行動用に設計された軽MS。パイロットの他に1名の兵員を収容でき、揚陸用MSとしての機能を持っている。



↓水陸両用重MS

MSM-10 ゾック

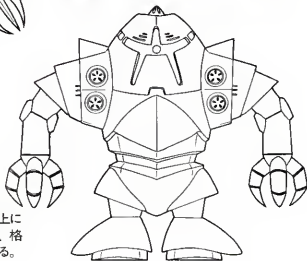
MA的要素を持ったMS。水中発射可能なメガ粒子砲9門を持つが、陸上での機動性はなきに等しく、移動砲台としての役割を担う。



↑水陸両用MS

MSM-07 スコック

あらゆる点で、03を凌ぐ機体。特に陸上における機動性はMSMシリーズ中随一で、格闘用MSとしても十二分に使用可能である。





無謀な賭け

開戦当初、ブリティッシュ作戦の失敗でジャブローを討ち漏らした事は、ジオンにとって最大の痛手となった。

連邦軍はこのジャブローを基点にし、宇宙艦隊の再建、MSの実戦配備を果たしつつあったのだ。

「誰でもいい、ジャブローを陥とした物には、元帥の位を与えよう」

あの冷徹なギレン・ザビまでもが、そう漏らしていたほどののだ。

しかしこれに果敢に挑んだ者がいた。誰だろう、あのシヤア・アズナブルである。

11月27日、彼はホワイト・ベース追尾の際、宇宙艦艇用大型ゲートを発見した。

「木馬が消えた地点を徹底的

に調査しろ。ジャブローの基地もろとも、徹底的に叩き潰してやる」

もともと北米カリフォルニア基地でも、近日中に第二次ジャブロー攻略作戦（第一次作戦は9月に決行。失敗に終わっている）を実行するつもりだった。

そこにシヤアからの通報である。慌てながらも、作戦の準備に喜々として奔走した。

部隊の集結

かくして付近の基地から、ありとあらゆるMSが集められた。もちろん、潜水艦隊秘蔵の水陸両用MSも、多数集結した。

30日、夜明け前の3時、先発隊として、水陸両用MS3機からなる小隊が河川沿いに侵攻した。これは、カムフラ



ージュされたハッチの位置を確認するためである。

一方6時30分、カリフォルニアから待望の増援部隊が到着。これでMSは総計54機、ガウ型攻撃空母18機という機動大隊2個分の戦力が揃ったのである。

それを遡ること半時間ほど前、すでに先発隊は突入口を発見していた。

作戦の開始

7時20分、ガウ型攻撃空母はついにジャブロー上空に到達。先発隊からの発光信号を確認した後、対地ミサイルによる弾幕を形成。第一次攻撃隊として、MS-06、07、09から成る陸戦MS部隊を降下させた。

「ザクと、グフ、ドムの第一波、突入します！」

しかし、さすが連邦軍本部ジャブローである。その対空防衛網は強個だった。

「さすがにジャブローだ。何機のMSが降りられるんだ」と、あの赤い彗星シヤアがうめくほど、その対空攻撃は激しかった。

結局降下した46機（残る8機は温存された）のうち、無事に着陸できたのは28機という有様だった。

この降下作戦の様子を確認していた軍高官たちは、「つけられましたな、ホワイ・ト・ベース……」

「ああ。永遠に厄介者かな」と、ホワイ・ト・ベースの存在を疎ましがったという。

一方のジオンは、ニュータイプ部隊であるホワイ・ト・ベース隊を恐れ、ジャブロー攻略を早めたというのに。

潜入部隊

降下に成功したMS隊は、独自に行動を開始した。しかし陸戦用MS隊は、言ってみれば困だった。

ジャブローの施設のほとんどは、地下深くに建造されている。地上を叩いても、何の意味もない。

本命の攻撃部隊は、先に出發した先発隊の方だった。シャア大佐はその先発隊と合流。秘かにジャブロー内部のMS工場に潜入し、破壊工作を行った。

しかし結局、その破壊活動は失敗に終わった。時限爆弾の全てを、排除されてしまったためだ。

7時55分、シャア大佐は因縁のMS、RX-78と接触。交戦した。

その間も、地上の部隊は健闘していた。この戦いにより、ジャブローはその20%近くの対空砲座を失ったという。

作戦の結末

作戦は、降下したMS隊の被害が50%を上回った時点で中止された。これ以上攻撃を続けても、全滅を待つだけとの判断だ。

「……10ヶ月前の作戦（ブリテッシュ作戦）の失敗が、ここまで我が軍を苦しめる事になるうとはな」

「ジャブローですか？」

「ああ。これから宇宙では、苦しい戦いが始まるぞ……」

MS部隊を回収しつつ、カリフォルニア基地から赴いたマノク中佐は、副官とこのような会話を交わしていた。

こうして第二次ジャブロー

月・日・時	戦 局 の 推 移
11.27	マッド・アングラー、ジャブローの宇宙船用出入口発見。
11.28	マッド・アングラー、アマゾン河口より後退。 カリフォルニア基地、ジャブロー攻撃準備を進める。
11.30 03:20	水陸両用MS3機からなる先発攻撃隊、アマゾン河を遊行。
05:40	先発攻撃隊、MS用出入口を発見。 ジャブロー側で、先発隊の存在を察知。警戒警報発令。
06:30	カルフォルニア基地より増援部隊到着。 ガウ攻撃空母18機から編成される攻撃隊、ジャブローへと侵攻。 マッド・アングラーは後方で待機。
07:20	攻撃隊、ジャブロー上空にさしかかる。 MS隊降下開始。 ジャブロー、迎撃体制に入る。迎撃戦闘機隊発進。
07:30	MS隊、降下後散開。2～3機の小隊に分かれ、ジャブローへの進入路を捜索。
07:40	シャア大佐、先発攻撃隊、およびMSM-04で編成される隠密攻撃部隊と接触。
07:50	シャア大佐、RX-78と交戦。 MS工場爆破、失敗。
08:20	地上のジオンMS隊、総数の50%（13機）が撃破される。
08:30	ジオン攻撃部隊、撤退開始。
09:00	攻撃部隊、撤退完了。追撃機の攻撃を受ける。

各戦線の局面と戦局の推移

ジャブロー攻略に参加した両軍のMS

連邦軍	RX-75 ガンタンク	ホワイト・ベース隊に所属していた1機と、ジャブローに置かれていた1機が参戦。総計2機。
	RX-77-1 ガンキャノン	ホワイト・ベース隊の1機と、ジャブローでロールアウトしたばかりの3機が参戦。総数4機。
	RX-78-2 ガンダム	ホワイト・ベース隊の1機のみが参戦。シャア大佐の駆るMSM-07（S型）と交戦。
	RGM-79 GM	標準装備型30機と、軽装甲のライトアーマー型3機、訓練型のトレーナー型1機、総計34機が実戦参加。
ジオン軍	RX-77-4 ガンキャノンII	試作で作られた1機が出撃。しかしその中途、反応炉の出力ダウンで後退。敵との交戦なし。
	MS-06 ザクII	F型14機その他、S型3機、K型6機が参戦。F型のうち4機は、改良型のF2型だった。総数22機。
	MS-06K ザクキャノン	06シリーズの中でも、肩に中距離キャノン砲を背負ったこのK型は、特に優秀な働きぶりを見せた。
	MS-07B グフ	総数13機が参戦。その中の2機は、07C-3が実験的に投入されたと言われるが、定かではない。
	MS-09 ドム	総数7機が参戦。半数は、トローベン（TROP）と呼ばれる陸戦強化型機だった。
	MSM-03 ゴッグ	先発隊として2機が出撃した。MS用ゲートを発見するなど、1小隊ながら攻撃に貢献。
	MSM-04 アッガイ	隠密工作隊として密かに潜入。陸路を進み、ジャブロー内部へと密かに潜伏した。総数6機。
	MSM-07 ズゴック	シャア大佐駆るS型1機と、ノーマル型2機が出撃。シャア大佐機以外は、降下中に撃破された。
	MSM-10 ソック	先行量産機の1機のみが参戦。MSM-03、2機を引き連れ出撃した。

侵攻作戦は、多大な被害を出して終了した。

なお連邦軍の量産型MS、RGM-79も、この戦いに参加している。オデッサで用された初期量産型は機構上のトラブルが頻発したが、今回参戦した型は改良が施されており、連邦軍は有意義な実戦データを採取できた。

参戦したのは34機で、うち11機が損傷しつつも、12機のMSを撃破している。

また、北米カリフォルニア基地は秘蔵のガウ攻撃空母18機のうち8機を失い、以後、ジャブロー攻撃を敢行する事はなかった。

そしてジャブローの地下深くでは、マゼラン、サラミス型をはじめとした、70隻以上の艦が完成しつつあったのである。

U.C.0079.12.05~12.15

アフリカ掃討作戦

熱砂のアフリカ。押し寄せる連邦軍大部隊の前に、勇猛なジオン軍兵士達は、いかにして戦ったか？灼熱の攻防戦が、今、始まろうとしていた……

アフリカの大地で

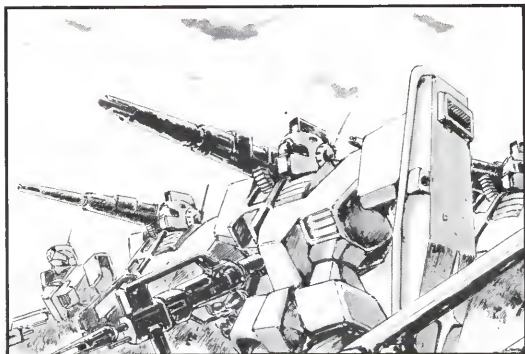
ヨーロッパほどではないにしろ、アフリカには、数多くの鉱山基地が点在していた。

特に金、ダイヤモンドの採取は、このアフリカの大地に依存していたのである。

11月上旬のオデッサ作戦以後、この地に、多くの敗残の部隊が流れてきていた。そして機があれば、ヨーロッパの地を奪還しようと画策していたのだ。

このアフリカの状況を憂慮した連邦軍は、ヨーロッパの全兵力を南下させてでも、アフリカのジオン軍を叩こうと決意した。

これが11月末からのアフリカ戦線であり、12月5日に開始されるアフリカ掃討作戦だった。



連邦従軍カメラマンの撮影による物。RG M-79の他にも、実戦配備されて間もないRG C-80の姿も見える。アフリカ戦線は、来るべきソロモン攻略戦のための模擬戦でもあ

った。実際GMの派生型の各型は、この戦いで実働データが集められた。しかしパイロットの練度はまだまだ低く、ジオン軍パイロットから見れば赤子同然だった。

各戦線の局面と戦局の推移

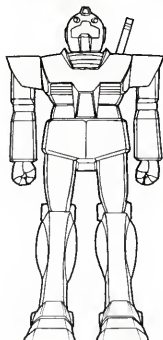
■両軍の主力モビルスーツ

ジオン軍の主力は、MS-06以下、07、09。その他、各型の派生型機も数多く参戦した。06F型の最終生産型FZや、*ドワッツの異名を持つ09G型などが、意外なほど多数投入されている。一方連邦軍も、GMの派生

型をはじめ、RX-77の準量産型機や、RX-75の発展型、RMV-1などを前線に送り出している。

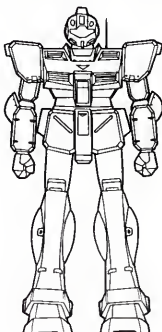
しかし連邦軍はMSよりも、航空戦力に、より比重を置いていた。

↓RGM-79 GM



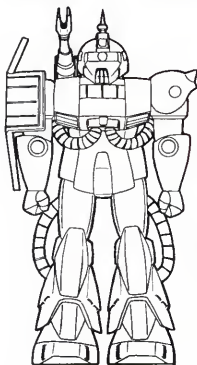
もっとも標準的仕様のGM。今回の作戦終了後、多数の機体が宇宙に送られた。

↓RGM-79G GMコマンド



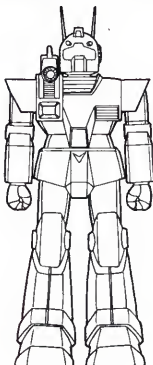
連邦軍の主力MS、GMの改良機。本来宇宙用だが、テストの意味で実戦投入された。

↓MS-06K ザクキャノン



06の中距離支援機。アフリカでは、D型と並びポピュラーな機体だった。

↓RGC-80 GMキャノン



GMの中距離支援機。ガンキャノン量産型機を隊長機とした。支援部隊を構成した。

アフリカ掃討作戦

特に12月5日から開始された掃討作戦は、地球上の連邦軍全兵力の20%近くをつぎ込む大規模なものだった。

すでにヨーロッパのジオン軍は瓦解し、カリフォルニア基地を中心とした北米大陸もジャブロー攻撃により余剰戦力を失っていた。

そのため、このような思い切った手段が取れたのだ。

「地球に巣くう、ジオンの猿どもは早々に追い出さねばな。ここは、スペース・ノイドのような、小汚い連中の住める土地じゃない」とは、総指揮官の任を負う、地球育ちのハイマン将軍の言葉だ。

掃討戦の展開

地中海沿岸のカイロ、ベン

ガジ、トリポリから23個師団そしてインド洋沿岸からは、

七つの輸送艦隊から降ろされた揚陸部隊（14個師団から成る）が掃討作戦に参加した。

兵器総数は、戦闘車両8800両、航空機4200機、

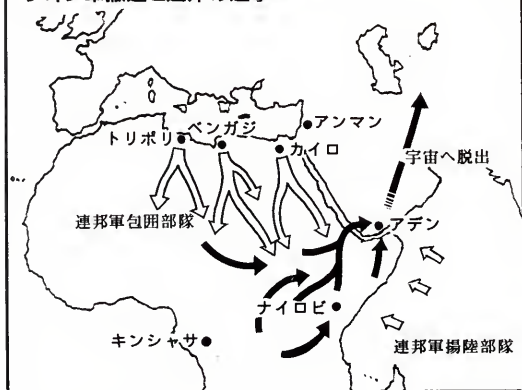
火砲、ミサイル砲3万100基。MS、940機にもなる。

これだけの大部隊を集めたのは、宇宙での反攻作戦（ソロモン攻略作戦）の前に、地上のジオン軍を掃討しようと考えての事だ。

12月5日から、先発隊として総計4個師団がアフリカ大陸に足を踏み入れた。

この掃討戦に際し、駐留ジオン軍の反応は二つに別れた。アフリカ周辺で最大規模の宇宙港のあるアデン基地に逃げ込み、早々に撤退しようとする連中。そしてアフリカに

ジオン軍撤退と連邦の進撃



戦場の英雄たち



エーリッヒ・ハルトマン少佐

ジオン第20潜水戦隊第2番艦U-202艦長。司令部の帰還命令を無視してまで、押し寄せる連邦軍の揚陸艦隊攻撃に全力を尽くした。“海の銀狼”と異名を取り、インド洋方面の連邦海軍を震え上がらせた名艦長だったが、12月13日艦と共に運命をともにする。しかし彼の艦はこの戦いで、8隻の揚陸艦、3隻の駆逐艦を撃沈している。

写真未入手

ジョン・クエスト

ジオン軍、キリマンジャロ方面第18補給基地所属。第2級整備兵（上等兵に相当）。パイロット全滅の危機に際し、自ら慣れぬ手付きでMSを操縦。血路を開き、基地の仲間の脱出を援護したとされる。その際、敵MS撃墜機数6機以上。しかし、あくまで前線の兵達の証言によるもので、真偽のほどは定かではない。写真未入手。

踏みとどまり、徹底抗戦を叫ぶ連中だ。

残された兵士達

「おめおめ宇宙に逃げ出せというのか！ 行きたいものは行くがいい。残りたいものは共にわれらとこの地で戦い続けよう！」

アフリカ方面きつてのエース部隊、青の部隊を率いるロンメル中佐はこう叫んだ。彼のような者をはじめ、多くの部隊が、アフリカにとどまる決意を固めた。

地下鉱山を秘密基地とし、そこにたてこもる者。青の部隊のように、村人になりすまし反撃の機を待つ者等々……。もちろん中には、持てる戦力を駆使し、必死に抗戦した部隊も多い。

だが押し寄せる連邦軍の数

は圧倒的だった。いかに優秀なMSが、パイロットが揃っていても、20倍以上の戦力を押し返す事はできなかった。何より彼らはまともな航空戦力を持たず、上空からの対地攻撃の格好の餌食になったのである。

かくして12月の半ばまでに、戦いの大勢は決した。

ほとんどの基地は沈黙し、ジオン・アフリカ方面軍の歴史は、ここに終わりを告げた。数カ月前のゲリラ戦時代ならともかく、もはや戦いは、物量戦に移項していたのだ。貧弱な装備しかない彼らに、とうてい勝ち目などなかった。後に残されたのは、破壊の傷跡であり、そして戦後10年近くに渡り連邦軍を苦しめる、地下組織化したジオンの残党部隊だったのである……。

U.C.0079.12.24~12.25

ソロモン攻略戦

(星一号作戦)

今大戦の天王山となった、宇宙要塞ソロモンの攻防戦。
連邦軍はジオン本土侵攻のための足がかりとして、
いかなる犠牲を払っても、このソロモンを欲した……

艦隊、宇宙へ……

12月2日9時。連邦軍本部
ジャブローより、ティアンム
提督指揮する第2連合艦隊が
発進した。

その数、マゼラン級戦艦20
隻以上、サラミス級巡洋艦が
60隻以上にもなる。これほど
の数の宇宙艦艇が同時に宇宙
へ昇った例は、かつてない。

その轟音は、はるか400km以
上離れたベレン市にも届き、
噴出煙は、全天の星々を覆い
隠したという。

ソロモン攻略の主力となる、
このティアンム艦隊が宇宙に
出た段階で、すでに戦いの趨
勢は決していたとさえ言う戦
史家もいる。

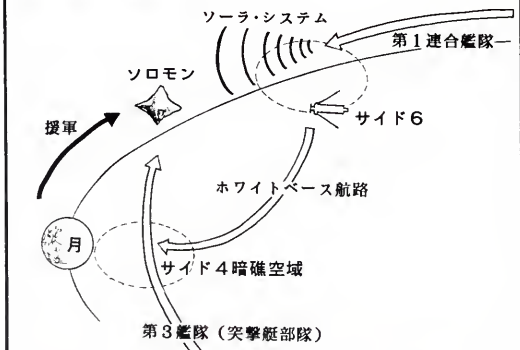
ともあれ、無事大気圏を離
脱したティアンム艦隊は、ル
ナツーへ直行する軌道に乗っ



ジャブローから発進した、連邦軍第2連合
艦隊の勇姿。撮影者等は不明だが、恐らく、
軌道上に待機していた誘導艦（ルナツーから
発進した）からの撮影と思われる。これらジ

ャブローから発進した全ての艦はMS搭載能
力を有しており、さらに各種武装も強化され
ている。連邦軍は、ようやくジオンと同等の
艦艇を擁することができたのだ

連邦艦隊の集結



た。その目的は一つ。

ジオン本国への侵攻作戦、

星一号作戦決行のためである。

星一号作戦

泥沼化した戦局を一気に打破すべく、敵の宇宙要塞ソロモンを陥落せしめ、制宙権を奪取。その後、持てる全宇宙艦隊を投入しサイド3へと向かう。

文字にすれば、たったこれだけの事だ。しかし連邦軍は、たったこれだけの事に、半年以上の時間と、余剰兵員の全てを割いたのである。

本来、最大級の宇宙艦隊を有するはずのソロモンであったが、度重なる掃討戦などで疲弊の極にあり、新造艦なども、本国を守るア・バオア・クーやキシリアの月に、優先的に配備されていた。

これは全て、ソロモンを取り仕切るドズル・ザビの政治手腕のなさに由来するものである。それにしても艦艇の増援などもなく、唯一届いたのが試作モビルアーマー1機というのはあまりに心もとない。

12月20日未明、まず露払いを請け負う、ワッケイン大佐指揮の第3艦隊がルナツーを出港。続いて第5、第9艦隊が出港し、22日2時、ついに主力艦隊である第2連合艦隊と、付随する第2、第11、第13艦隊がルナツーを後にした。星一号作戦の第1段階、ソロモン攻略戦の開始である。

ソロモンの状況

これをしてドズルは、「ソロモンに落ちろというのか、父上は！」副官のラコックにそうこぼした。

作戦開始

24日18時、崩壊したサイド4の残骸に紛れて接近中だった先鋒の第3艦隊が、ついに行動を開始。

艦隊は横一文字隊形に移動した後、パブリック型突撃艇による切込み攻撃を行った。

「メリークリスマス！ ザビ・ファミリー！ 第3艦隊がおまえらに、とっておきのクリスマス・プレゼントを用意してきたぜ！」

次々に突入するパブリック型突撃艇は、ビーム攪乱幕を形成する特殊ミサイル弾を、ソロモンの水際に放った。

ビーム攪乱幕。

濃密な磁性金属粉によって作られる、対ビーム拡散バリアーである。

果敢なパブリックの活躍に

より、最も対空ビーム砲座の多い区画にビーム攪乱幕を形成する事に成功した。

「敵は数が少ない。ミサイル攻撃に切り替えるのだ！」

ドズルはそう言い、敵のMS部隊の侵攻に備えた。ビームが使えなくなれば、敵はMSで斬り込んでくる。そう考えたのだ。

その読みは当たっていた。18時35分、第3艦隊司令ワッケインは、各艦に伝達を出す。そして速やかにMS隊が発進した。

ドズルはその総数を見て、「勝てる！」と確信した。

しかし発進したMS隊は、陽動部隊にしか過ぎなかったのだ。

15分間の死闘

「諸君らは、15分だけ持ちこ

両軍の兵力差

	連 邦 軍	ジ オ ン 軍
戦艦	マゼラン型以下24隻 (12隻が撃沈、または大破)	グワジン型以下3隻 (3隻ともに撃沈)
巡洋艦	サラムス型巡洋艦以下121隻 (28隻が撃沈、または大破)	ムサイ型、チベ型以下48隻 (36隻が撃沈、または大破)
モビルスーツ	RGM-79型他、総計5200機 (未帰還機、2000機以上)	09R型他、総計3400機 (未帰還機、3000機以上)
戦闘機	ブースター装着コア・ファイター型以下、総計880機	ガトル型戦闘機以下、総計580機 (未帰還機、300機以上)
突撃艇ほか	パブリック型他、総計280隻 (220隻以上が未帰還)	ジッコ型他、総計88隻 (ほぼ全滅)
その他	MS母艦として運用されたコロンプス型輸送艦が520隻。この他に、ミサイル駆逐艦、ビーム砲艦などが参加。また連邦軍は、要塞攻略用兵器として“ソーラー・システム”を使用。絶大なる戦果を上げた	ジオン軍はソロモンに設置された、多数のビーム、ミサイル砲座を持つ。さらに大型空母、ドロス型2番艦“ドロワ”を保有。また戦闘の終盤、超大型MAビッグ・ザム出撃。連邦艦隊を恐怖のどん底に陥れた。

各戦線の局面と戦局の推移

月・日・時	戦 局 の 推 移
12.02 19:00	連邦軍、4隻の隠艦を、それぞれ別航路でジャブローから出港させる。
21:00	連邦軍、第2連合艦隊ジャブローを発進。
12.05	第2連合艦隊、ルナツーに入港。 ジオン軍、連邦軍の攻撃目標がソロモンと察知。
12.20	連邦軍第3艦隊、ルナツーを出港。
12.22 02:00	連邦軍第2連合艦隊、ルナツーを出港。
12.24 18:10	第3艦隊、サイド4の残骸を利用し、ソロモン至近距離まで到達。 先鋒の突撃艇部隊発進。ビーム攪乱幕を張ることに成功。
18:35	第3艦隊から、MS隊、戦闘機隊発進。
18:50	第2連合艦隊、サイド1の残骸を楯に、ソーラー・システム展開。 ソロモン、ソーラー・システムの照射を受ける。
19:10	連邦軍第2連合艦隊、MS隊を発進させつつソロモンに接近。
19:30	ジオン軍、MS部隊、艦艇を呼び戻し、水際作戦を展開。 ソロモン総司令官ドズル・ザビ、重MSビッグ・ザムで出撃。
20:20	連邦軍MS隊、ソロモン内に突入。
20:25	ジオン軍、グラナダ基地よりソロモン支援艦隊を発進させる。
20:40	ソロモン総司令官ドズル中將、ソロモン放棄を決意。
20:55	連邦軍作戦司令官、ティアナム提督戦死。
21:15	ドズル中將戦死。 ソロモン残存部隊、そのほとんどが撤退を完了。
12.25	連邦軍、残敵掃討後、ソロモンに駐留。

たえてくれればいい。その間に主力艦隊が、対要塞兵器を使用する！」

ワッケイン司令の言葉を信じ、各MSのパイロット、各艦の乗組員は必死に奮闘した。「まだだ！ まだ沈んじやならん！ ミサイルを撃ちつくすまでは！」

そのような、マゼラン型戦艦艦長の台詞が、この死闘の壮絶さをよく物語っているだろう。

この戦いの中、ホワイト・ベース隊所属のアムロ・レイ少尉は、3隻のムサイ型巡洋艦と、1隻のチベ型重巡洋艦を撃沈している。

そして18時50分、ソロモンは、サイド1の暗礁空域に潜む、連邦軍第2連合艦隊（ティアナム艦隊）を発見した。ドズルは素早く、戦艦グワ

ランを中心とした遊撃艦隊を差し向けた。

しかし、その兵力差は圧倒的だ。だが副官ラコックの、「援軍を求められては……」という言葉でドズルは一笑し、「これしきの事で、国中の笑い者になるわ」と応じた。

ジオン軍の構造的欠陥が、最悪の形で露呈した。他の兄弟に笑われる事を恐れたドズルは、ソロモンの全兵士を、自分のプライドのために負け戦に引き込んだのだ。

この時、ドズルが素直にキシリアの隊に援軍を求めている、ソロモンは首の皮一枚で、救われたかもしれない。その頃連邦軍主力艦隊は、要塞攻略用の秘密兵器、ソーラ・システムの展開に追われていた……。

ソーラ・システム

サイド1の暗礁空域に展開されていたソーラ・システムとは、数百万枚のミラーによって構成された、単なる凹面反射レンズだった。

だがその単なるレンズは、強固なソロモンの岩盤を融解するだけの力を秘めていた。ソロモン第6ゲートは40秒間の照射により、ぽっかりと大穴をうがたれた。

「何事だ!? レーザーとでも言うのか!」

さすがに、これは予想だにできなかった攻撃である。ソロモンは温存艦艇を含め、多大な被害を受けてしまった。

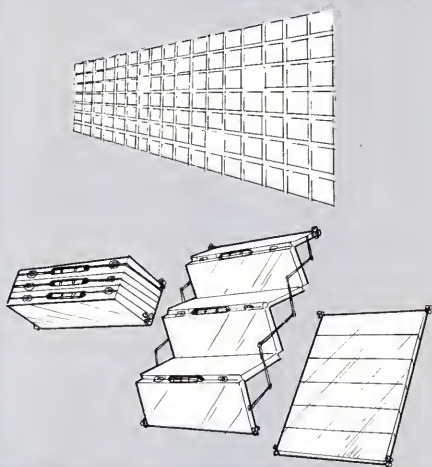
この段階で、戦闘の主導権は完全に連邦の手に渡った。迎撃のグワラン隊をなんなく打ち破った主力艦隊は、ソ

連邦軍の超兵器 ソーラ・システム

20m×20mの反射ミラー400万枚以上から成る、巨大な反射集光ミラー。それが、ソーラ・システムである。原理的には極めて原始的な代物だが、各ミラーの制御は極めて複雑、かつ大規模な物で、このミラーの制御だけで、旗艦タイタンのメイン・コンピュータはバンクに近い

状態だったという。

しかし威力は絶大で、焦点部分の温度は限りなく太陽表面温度にまで近くなるほか、事実上照射時間は無制限。一度ミラーを展開すれば、いくらでも攻撃を続けられる強みがある。だがミラー自体は無防備で、攻撃に対して非常に脆い。



各戦線の局面と戦局の推移

ロモンに急行。MS隊を急速に進ませ、大部隊を以てソロモンの制圧戦に回ろうと出た。

ビッグ・ザムの出撃

もはやソロモンの劣勢は誰の目にも明らかだった。

ドズルは残った艦隊、MS隊を再編。水際作戦に移項した。だが、敵より遥かに劣る戦力で水際作戦を行っても、破滅を待っただけでしかない。「残った敵の数、決して多くはない！」

ドズルは部下をそう励ましつつ、自ら大型MAビッグ・ザムに搭乗、出陣した。

この時点でドズルは、敗北を悟っていたのかも知れない。20時過ぎ、連邦軍のMS隊はソーラ・システムによって開けられた大穴より、次々にソロモン内部へと潜入してい

った。

また同時刻、月のキシリアはソロモン戦局悪化の報を受け、マ・クベ大佐率いる支援艦隊を派遣した。だが、その決定はあまりに遅かった。

「敵の新兵器とMSのために、艦隊の4分の3は破壊、または稼働不能であります！」

副官ラコックの報告を聞いたドズルは、残存艦隊に敵艦隊突破の指示を出すと、ビッグ・ザムを駆り、戦闘空域に乗り込んだ。

一方ティアンム提督は、再度ソーラ・システムの使用を決意。残存艦隊を一掃し、勝利をより確実な物とした。

「戦力をスタスタにされすぎた。遺憾ながら、ソロモンを放棄する！」

ドズルは艦隊の崩壊を見て、最後の命令を下した……。



乱戦状態のソロモンを、第2戦闘空域から見る。前方のRGM109を、僚機ガンカメラから捉えた映像。彼らは第2連合艦隊所属の部隊で、今まさにサイド1の暗礁空域を抜け、

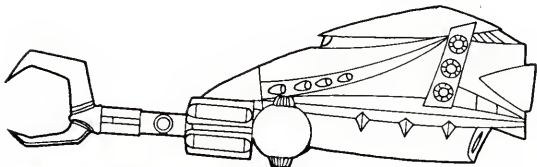
戦場に向かう所である。連邦軍のMSパイロットの大部分が初陣であり、そのため、本作戦におけるジオンMSとの撃墜比率は、ジオン1：連邦3.2であった

■ジオン軍の超兵器モビルアーマー

本戦最終盤で猛威をふるったビッグ・ザムをはじめ、ジオン軍は大戦末期、多数の強力なMAを前線に投入している。

しかし多数開発された機の多くは、構造上欠陥があり、またMSに比して異常なまでに

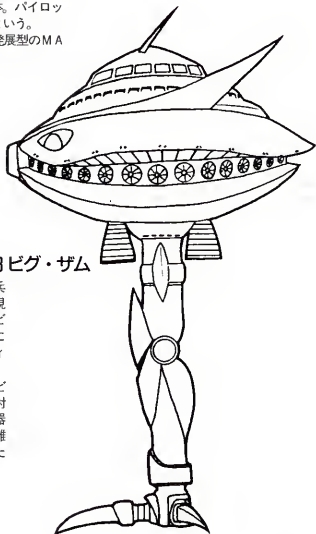
製造コストがかさむため、最大数生産されたMA-05ビッグロととも、大戦終了までに12機が完成したに過ぎない。確かに単機の性能は優れていたが、対費用効果の点で言えば、その有用性にははなはだ疑問が残る。



↑高速戦闘用MA MA-05ビッグロ

その機動性を活かし、艦船に対し一撃離脱戦法を挑むというコンセプトでまとめられた機体。パイロットには、特にGに強い者が選抜されたという。

その高性能さゆえ12機が生産され、発展型のMAも製作が進んでいた。



→重攻撃型MA MA-08ビッグ・ザム

ジャブロー、ルナツーなどの対要塞用兵器として建造された、1年戦争時最大規模の機動兵器。大口径、高出力の拡散ビーム砲1門が主武装だが、機体の周囲にビーム兵器を湾曲させる対ビーム・フィールド（1フィールド発生機）を持ち、さらに360度全方位に砲撃可能な小口径ビームをも有する。また脚部のツメは、対空用ミサイルにもなる。完全無欠の兵器ではあるが、唯一、機動兵器の至近距離からの攻撃には防御の手段がない。また稼働限界時間も、極端に短い。

戦場の英雄たち



ティアンム提督

連邦宇宙軍、第2連合艦隊司令。大将。開戦の際の1週間戦争時には、第4艦隊を指揮。ジオンのMS隊の前に全滅に近い被害を受けた。今回の作戦はその雪辱戦だったわけだが、作戦は成功しながら、中将自身は戦死。自らの艦隊が制圧したソロモンに足を踏み入れる事はなかった……。



ドズル・ザビ中将

ジオン宇宙攻撃軍総司令官。階級は中将。姑息な戦略を嫌い、あくまで総力戦によってのみ得る勝利を、真の勝利とした、昔気質の武人。そしてそれが、最も致命的な弱点でもあった。しかし部下からの信頼は厚く、彼もまたそれに答えるべく、この戦いではMAで単独出撃。撤退する部隊の楯となり戦死した。

ソロモン陥落

確かに、ビーム攪乱幕と高出力拡散ビーム砲を搭載したビッグ・ザムの威力は圧倒的だった。

戦艦、巡洋艦の火器を物ともせず突っ込んでくるその様は、脅威そのものだった。

だが、わずか1機のMAで戦局を覆せるはずもない。

21時15分、5隻の戦艦、8隻の巡洋艦を撃沈した後（撃沈された戦艦の中には、ティアンム提督搭乗の旗艦タイタンも含まれる）、ビッグ・ザムは、RX-78型MSの特攻を受け破壊された。

なおドズル・ザビは、ビッグ・ザムと運命を共にしたと言われている。

22時30分以降は、残敵の掃討戦が展開された。しかし戦

闘可能な艦の大部分は、ビッグ・ザムの行動中、すでにア・バオア・クー方面へと逃走を果たしていた。

脱出艦隊

脱出した艦隊の中には、ドロス型大型空母2番艦、ドロワの艦影もあった。

まだ機装も不完全な未完成艦だったが、ソロモンの悪夢と称されるエース・パイロット、アナベル・ガトールとその中隊の護衛により、辛くも敵MS隊の追撃を払いのける事ができたのだ。

「未熟な連邦のMSめが。来るなら来てみるがいい。ア・バオア・クーで、貴様らを粉碎してやる。必ずな……」

遠ざかるソロモンをドロワの舷窓から見つめつつ、ガトールは悔しげにつぶやいた。

U.C.0079.12.21~12.29

RX-78-NT1強奪作戦

サイド6のコロニー内で、その戦いは密かに進行した。
連邦軍の新型MS、RX-78NT1を奪取せよ！
これは、歴史の陰に埋もれた小さな戦いの記録である

RX-78NT1

かくして、ジオンの誇る宇宙要塞ソロモンは陥落。直ちに補給部隊などが到着し、ジオン本国侵攻のための前線基地として機能しはじめた。

それと前後し、中立であるはずのサイド6で、秘かに一つの作戦が進行しつつあった。その作戦は、ニュータイプ用MS、RX-78NT1の奪取作戦である。

RX-78NT1とは、もともとRX-78の4号機として開発された物で、全天周ニターやマグネット・コーティング技術など、最新鋭の技術を投入し、「よりパワーアップしたガンダム」として生まれるはずの機体だった。

しかし非公式ながらニュータイプ・パイロットと称され

るアムロ・レイ少尉用に、制御系統を調整。新たにNT1の形式ナンバーが与えられたのだ。

北極基地襲撃

NT1開発を察知したジオン軍は、このMSを捕獲、もしくは破壊しようと考えた。

ニュータイプの研究では、一歩も二歩も先んじていたジオンである。ニュータイプ用兵器の恐ろしさを、よく知っていたのだ。

かくして12月14日、精鋭ぞろいの特殊部隊、サイクロプス隊を投入し、北極の、MS開発基地襲撃が決行された。

これに投入された兵力はMS4機。機動小隊一個である。まず2機のMSM-03C

ハイ・ゴッグが、陽動のため基地に突入した。続いてMS

M-03CとMSM-07Eの2機が、地下水路より密かに潜入。パーツ状態のNT1を奪取する目論見だった。

しかし、開発基地には予想以上の守備兵力があった。そして連邦軍も、NT1輸送用シャトルを待機させていたのだ。

14日9時からの奇襲は失敗に終わり、パーツ状態のNT1は、あと一歩の所で宇宙に運ばれてしまったのである。

作戦の失敗を悟ったサイクロプス隊長のシユタイナー大尉は、直ちに撤収命令を出した。そして揚陸母艦であるユーコン型潜水艦と合流。ノバリゼムリヤ基地より、HLVで月・グラナダ基地へと帰還した。

本来なら、これで作戦は中断されるはずだったが……。

各戦線の局面と戦局の推移

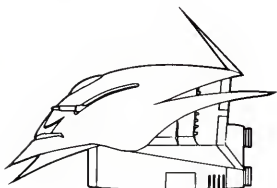
■両軍のニュータイプ専用兵器

一部では超感覚者と誤解されているニュータイプだが、現在では“優れた洞察力と認識力を有する、鋭敏な精神の持ち主”と定義されている。それが人類の進化とどう関わってくるのかは諸説入り乱れているが、ともかく

大戦末期、この優れた洞察力を、MS等の機体制御に役立てようという研究が進んだ。これが俗に呼ばれる、ニュータイプ専用機である。特にジオン軍では、無数の小型攻撃メカの制御などに応用された。

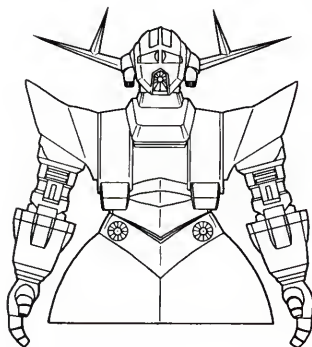
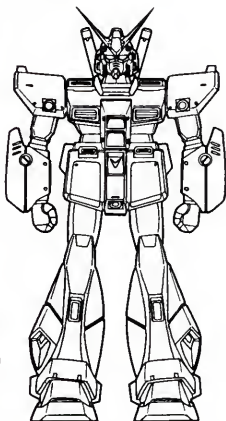
↓RX-78NT1アレックス

連邦軍が、RX-78・3号機をもとに開発したNT専用MS。しかしジオン軍のNT専用機と異なりサイコミュなどは持たず、あくまで操縦系、反応伝達系を強化しただけに過ぎない。



↑MAN-08 エルメス

ジオン軍の開発した、NT用MA。空母の概念を極限まで小型化した機動兵器。ビットと呼ばれる無数の小型機動兵器を、サイコミュ（精神感應制御装置）によってコントロールする。もはやエルメス本体は、そのための発令所にしか過ぎないのだ。だがサイコミュ自体が不完全だったため、本来の戦闘能力は発揮されなかった。



←MSN-02 ジオング

ジオン軍が試作した、NT専用MS。だが唯一の試作機は未完成状態（脚部が存在しなかった）のまま出撃したため、MAとして分類される事もある。手足が本体より分離し、有線操作により全方向からの攻撃（オールレンジ攻撃）を行う。完成していれば、全高30mを越す超大型MSになっていたはずである。

ルビコン計画

だが、この作戦失敗が、次の作戦への発端となった。

偶然にも、NT1がサイド6に運び込まれていた事実が発覚。月のグラナダに帰還していたサイクロプス隊に、再度の出動命令が出されたのだ。

「戦局を打破するためには、いかなる犠牲を払ってでもアイツを手に入れるか、破壊するしかないのだ」

これは、サイクロプス隊の上に立つキリング中佐の言葉だが、たかが1機のMSを奪取して戦局が変わるものではない。

これはあくまで、キリング中佐が手柄を立てたいがため、サイクロプス隊に無理を強いたのだと言える。

しかし命令に逆らえぬのが

軍人である。12月18日、サイクロプス隊は民間人に変装。

サイド6内に潜入し、最終テスト中のNT1強奪計画を画策した。

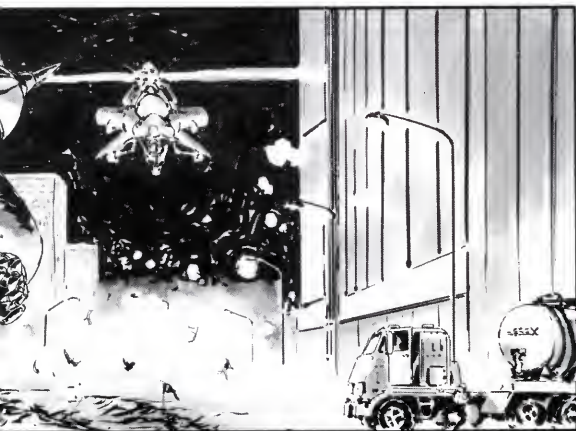
ルビコン計画の発動である。

闘士ケンプファー

この戦いのため、サイクロプス隊には、1機の新鋭MSが与えられた。MS-18Eケンプファー。（旧ドイツ語で闘士の意）MS-14を上回る性能を秘めた、格闘戦専用MSである。

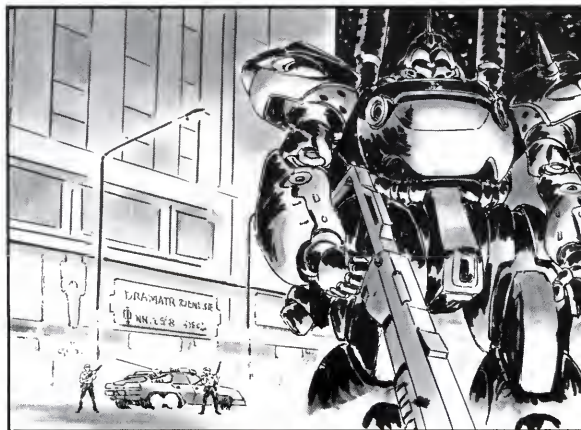
準備を整えたサイクロプス隊は、20日夜、作戦を開始した。

シュタイナー隊長以下、3名が連邦兵士に変装。残る1名がMS-18Eを駆り、基地に突入するという二段構えの作戦であった。



各戦線の局面と戦局の推移

月・日・時	戦 局 の 推 移
12.11	ジオン軍特殊工作隊サイクロプス隊、地球に降下。 連邦軍北極基地への奇襲攻撃準備。
12.13 18:00	サイクロプス隊を乗せたユーコン型潜水艦、ノバヤゼムリヤ基地を出港。
12.14 09:00	サイクロプス隊、連邦軍北極基地に奇襲攻撃開始。 NTIを搭載したシャトル、宇宙へ。
09:25	サイクロプス隊、北極基地へ撤退。
12.16	サイクロプス隊、グラナダ基地へ帰還。
12.17	ジオン軍グラナダ基地、サイド6・リボーコロニーにてNTI発見。
12.18	NTI奪取のための、ルビコン計画発動。 サイクロプス隊、サイド6・リボーコロニーに潜入。
12.19	サイド6政府、全ジオン公国艦艇の強制退去を命じる。
12.20 19:30	サイクロプス隊、連邦兵に変装し、NTIテスト基地へ潜入。
19:40	コロニー内で、MS-18Eケンプファー（サイクロプス隊所属）出撃。
20:00	MS-18E、RX-78NTIと交戦。あえなく撃破される。 また潜入した3名のサイクロプス隊員、連邦兵と交戦。2名戦死。 （含シュタイナー隊長）
12.22	ルビコン計画責任者、キリング中佐、独断でサイド6への核攻撃を決意。
12.24	ソロモン攻略戦。
12.25 10:55	核ミサイル搭載のサイド6攻撃艦隊、連邦艦隊に発見。撃沈される。
12:00	サイクロプス隊の残兵、破棄されていたMS-06FZで、NTI攻撃。 MS-06FZ、NTIに撃破される。

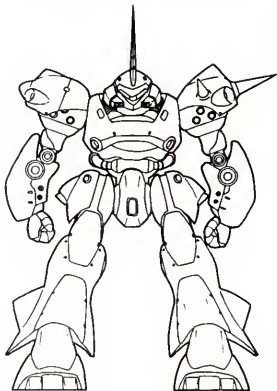


■ジオン軍大戦末期の機動兵器群①

大戦末期、敗色濃いジオン公国は、数多くの新型兵器を試作、そして量産化し、次々に前線に投入していった。中には思わず首をひねらざるをえない物もあるが、ここに紹介するのは、かなりの効果を上げた優秀な兵器群

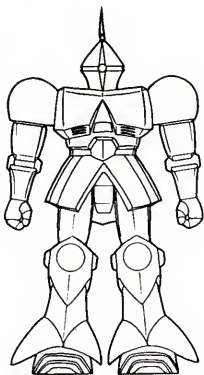
である。

特に大戦末期になって登場したMS-14は、ジオンのMSとしては初めてビームライフルを携帯。その戦闘力は、RX-78と同等か、それ以上だったとされる。



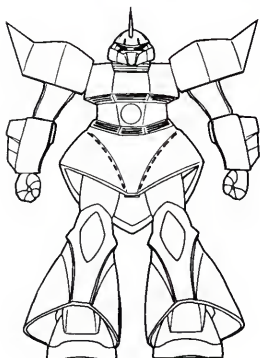
←MS-18E ケンプファー

戦闘用のMS-14に対し、このMS-18は格闘戦専用に設計された。



↑MS-15 ギャン

次期主力MSの座を、MS-14と争って敗れた機体。ビームライフルを持たず、多数の武器を内蔵した、攻守一体の専用シールドで武装する。どちらかと言えば、格闘戦に重きを置いた機体だった。



←MS-14 ゲルググ

あらゆる面で、連邦のRX-78と双璧を成す高性能機。もしもこの機が数カ月早く実戦配備されていれば、戦局は一変していただろう……という戦史家もいる。大戦末期、最も成功した機体の一つ。

戦場の英雄たち



クルト・シュタイナー大尉

ジオン軍特殊工作隊、サイクロプス隊隊長。階級は大尉。諜報活動や破壊工作など、ありとあらゆる任務を巧みにこなす歴戦の勇者。しかし過去、反逆罪（捕虜の女性を逃がそうとした際、上官と口論）のかどに問われたいきさつもあり、軍上層部からは疎ましがられていた。NTT奪取の際、連邦兵の銃弾に倒れる。



マイア・パゾク中佐

連邦軍艦隊第3艦隊・第14戦隊司令。核ミサイルを搭載したジオン艦隊（チベ型1、ムサイ型2）を発見。即座に攻撃を決意した。彼の戦隊は数で劣っていたが（サラミス型2）、コロニーの残骸を楯にしつつ巧みに攻撃。索敵1隻を失いつつも、敵艦隊をせん滅した。彼の働きにより、リボーコロニーの住民2200万人が救われた。

ポケットの中の戦争

だが、いかに優秀な部隊と言えど、あまりに頭数が少なすぎた。

20日夜8時前後、潜入した3人のうち、シュタイナー隊長以下2名が戦死。またMS-118Eも、不完全ながら起動したNTTに、もろくも撃破されてしまっている。

サイクロプス隊は瓦解した。キリング中佐は独断でサイロド6攻撃を決意。核ミサイルを搭載した艦隊を差し向けた。狂気の沙汰とも言うべきキリング中佐の命令だが、間一髪、ソロモン陥落後、残敵掃討に当たっていた連邦艦隊がこれを発見。25日11時に撃沈されている。

そして同日正午、ただ一人残ったサイクロプス隊の残兵

が、放棄されていたMS-06でNTTを攻撃。30分ほどの戦闘の後、撃破されている。なお、この小規模な戦闘の顛末を知らされたレビル將軍（この時は、ソロモンでジオン進攻の準備を進めていた）は、報告書を一目見るなり、「しょせんは、ポケットの中の戦争に過ぎんさ。我々には、もっと大きな戦場が待っている」と、歯牙にもかけなかったと言われている。

そしてこの後のア・バオア・クー戦にもNTTは間に合わず、当初予定されていたアムロ・レイ少尉に使われることなく終戦を迎えるのである。なお最後になったが、この戦いは長らく極秘扱いにされ公表されていなかった物で、戦後20年の歳月を経て、ようやく公表の運びとなった。

U.C.0079.12.30

ソーラ・レイ照射作戦

本大戦中の兵器の中で、コロニー爆弾と並ぶ最終兵器。
直径6.5km。空前絶後のレーザー砲ソーラ・レイ。
その、戦慄の巨砲の攻撃目標は……!?

最終防衛線

ソロモンは今や、連邦軍の前線基地として機能していた。ソロモン戦に参加した各艦隊が待機し、さらに温存されていたレビル艦隊（第1連合艦隊）も、12月26日にソロモンに到着。星一号作戦は最終段階に入りつつあった。

だがソロモン陥落の報せにザビ家一党は至って冷静で、公王デギンなどは、

「ドズルにしてみっともな事だよ」とまで言ったという。

実際將軍達にとって、ソロモン陥落は、ある程度予想された事であった。そのためソロモンに、必要以上の増援を送らなかつたのだ。

総帥ギレンは、月とア・バオア・クーを結ぶ最終防衛線において、侵攻してくる連邦

艦隊を叩こうと考えていた。もちろん、ジオンの総艦艇数は、連邦のその5分の1以下である。まともに艦隊戦を挑んで、勝てる物ではない。だがギレンは、不敵にほくそえむだけだった。彼には、必勝の策があつたのだ。

コロニー・マハル

サイド3、第3コロニー・マハル。12月22日から、マハル市民の強制疎開が行われていた。

そして他のコロニーの太陽電池板も、このマハルに集められ、多くの工作艦や工作用MSも集結しつつあった。

誰の目にも、本土決戦のための準備である事は明らかだった。

「すでに連邦の艦隊は、月にまで迫っているらしい！」

市民の間では、このような噂が流れた。

確かにこれは、決戦のための準備だった。

ソーラ・レイ・システム。

コロニー自体を一つのレー

ザー砲とする、究極の兵器だ。

ギレンはこれを使い、連邦艦隊の大半を殲滅。残敵を、

グラナダとア・バオア・クー

の戦力で掃討しようと考えていたのだ。

そのような兵器が用意されている事を知らぬ（さすがの情報網も、この時はかりはソーラ・レイの存在を察知できなかった）連邦艦隊は、29日、順次ソロモンを出港した。

公王デギンの動向

ギレンは自らア・バオア・

クーに陣取り、最終作戦の準備に入つた。

各戦線の局面と戦局の推移

ジオン本国では電力の使用制限が数日前より行われ、街は闇に包まれた。

また最終決戦に備え、15歳以上の男子は、学徒兵として動員されていた。

公王デギンは、事態が破滅的方向に向かっていると判断。公王として、独自に連邦軍と終戦協定を結ぶべく、唯一自分が指揮権を有するクワジン型戦艦クレート・デギンと数隻のムサイ型巡洋艦を率い、サイド3を発った。

だが、これを見逃すギレン・ザビではなかった。

「老いたな……父上」

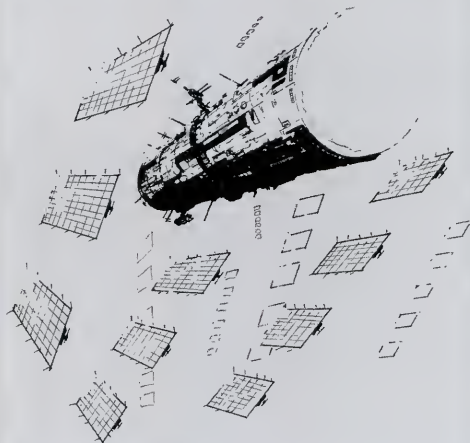
そう言いつつ、彼は作戦の準備を続けたという。

12月30日、20時20分。クレート・デギンは、レビル艦隊と、レーザー通信による接触に成功した。

ジオン軍の超兵器 ソーラ・レイ

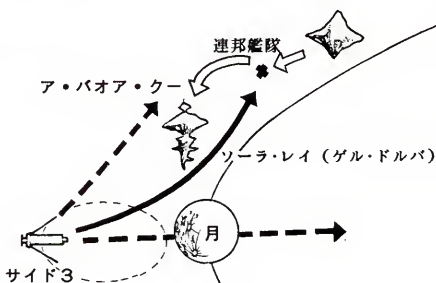
サイド3のコロニーが、もともと窓のない密閉型であったため、ソーラ・レイへの改造作業は比較的敏速に進められた。まずその内部をアルミニウム（当然、ヨーロッパ基地から運ばれた物である）で鏡面化。外壁各部に無数の冷却装置が設

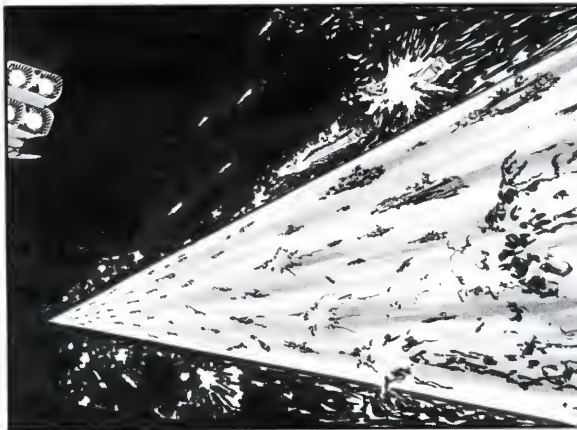
置され、コロニー内部には、ヘリウムを主体とした大気が充填された。そしてレーザー発振用の膨大な電力は、サイド3の全コロニーからマイクロ波に変換され送電される。しかし技術上の問題から、発射は1発に限られた。





連邦軍の進路とソーラ・レイの発射軸線





基本照準ゲル・ドルバ

ギレンは、このまま父デギンを放置しておけばジオンにとって害悪を成すと判断。ソーラ・レイで、連邦艦隊もろとも全てを消失させようと考えたのだ。

当初から設定されていた三つの発射軸線のうち、ゲル・ドルバが照準が選択され、ソーラ・レイ発射の秒読みが始まった。

もちろんごく一部の者以外は、その軸線上にグレート・デギンが存在する事を知らなかった。

発射予定時刻、21時5分。軍用以外のサイド3の全電力が、コロニー・マハルことソーラ・レイ本体に、マイクロ波に変換され送電されはじめた。

「基本照準ゲル・ドルバ」増設された無数のロケット

モーターが火を噴き、ソーラ・レイはゆっくりと、その向きを変えていく。その先には、連邦軍主力艦隊と、グレート・デギンがあった。

予定時刻から数秒の遅れもなく、ついにソーラ・レイは発射された。

直径4 km近い口径のレーザーは3秒間に渡り、漆黒の宇宙を横切った。

その光は、地球上の赤道付近からでも観測できたという。

これにより、デギン公王の乗るグレート・デギン、そしてレビル將軍搭乗の旗艦「ブエーベ」が消滅した。

だがギレンはグレート・デギン撃沈にとらわれ、一つの失策、あえて知りつつも、失策を犯していたのだ。

U.C.0079.12.31

ア・バオア・クー攻略戦

多大なる被害を受けつつ、なおジオン本土を目指す
連邦艦隊。ギレン・ザビ総帥は、自ら前線に立つ。
その戦場は、宇宙要塞ア・バオア・クー！

残存艦隊の集結

ソーラ・レイにより、主力の第1連合艦隊の大半は失われた。

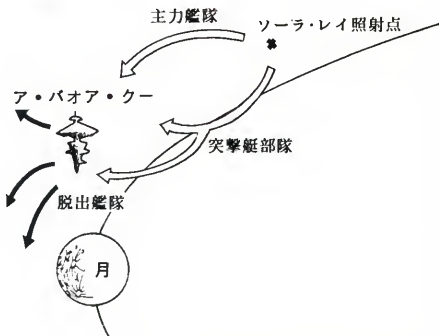
ア・バオア・クーに侵攻しつつあった艦艇の、3分の1が失われた計算になる。

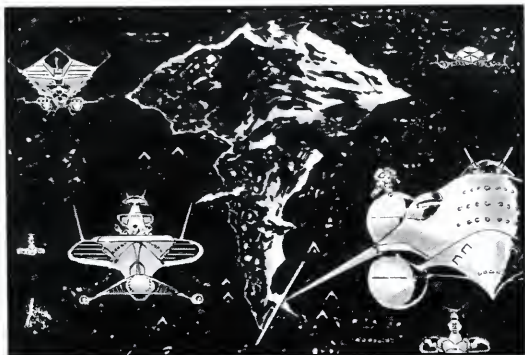
しかし、より効率的な発射軸線を取れば、全艦艇の50%以上は破壊できたに違いない。それが30%の損害にとどまったのは、あくまでギレンがグレート・デギンにこだわった故である。

一方、連邦軍上層部はア・バオア・クー侵攻を強行する姿勢を崩さなかった。ここでジオンに余計な時間を与えることは、得策ではないと判断したのだ。

事実、この決定は正しかった。仮に侵攻を1週間延期し

連邦残存艦隊の進路





ア・バオア・クーに集結したジオン艦隊。数自体はソロモン戦とさほど変わらないが、ドロス型宇宙空母2隻（ドロス、ドロワ）の他、グワジン型も数隻（グワジン、グワデン、ア

サルム他）が参戦。艦艇自体の戦力は、大戦中最大規模と思われる。ただし、これまでの戦いで優秀な兵員の多くが失われており、質的にはルウム戦役時以下だろうが……。

たならば、再びジオンに、ソーラ・レイ発射の機会を与えたであろう。

だが前線の兵にとっては、

これは無謀な決定とも言えた。何より基幹艦隊を失い、命令系統がスタスタに寸断されていたのだから。

12月31日5時50分。

連邦艦隊は取り急ぎ残存艦艇を再編。かつて邪魔者扱いされたホワイト・ベースも、マゼラン型戦艦「ルザル」とともに、残存艦隊の中核を成す事となった。

士気上がるジオン軍

「今や地球連邦軍艦隊の半数が、我がソーラ・レイによって宇宙に消えた。この輝きこそ、我らジオンの、正義の証である！」

総司令官のギレン自らが、

兵達の士気を鼓舞。

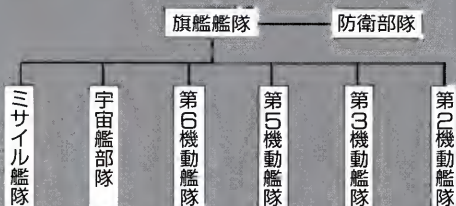
「ジーク・ジオン！」の叫びが、ア・バオア・クーを揺るがせた。

この空域に集められた戦力は、戦艦4隻以上、重巡30隻以上、軽巡80隻以上にもなる。これは稼働可能な全ジオン艦艇の、70%近い数である。

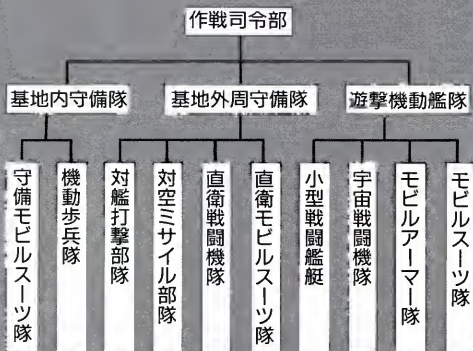
またMSも多数集結しており、MS-06が1500機以上、MS-09R1200機以上。そして新型のMS-14も、200機以上集められていた。これに旧式機、量産試作機などを併せれば、およそ3000機近い数になる。

兵自体は学徒兵や動員兵が多く、質は低かったものの、誰もがここア・バオア・クーを抜かれれば本国が戦場になる事を知っており、いやがおうにも、士気はあがっていた。

連邦軍残存部隊



ア・バオア・クー防衛部隊



各戦線の局面と戦局の推移

両軍の総兵力

	連 邦 軍	ジ オ ン 軍
戦艦(空母)	マゼラン型以下18隻 (14隻が撃沈、または大破)	グワジン型3隻。ドロス型2隻 (最終的な撃沈数不明)
巡洋艦	サラムス型巡洋艦以下98隻 (60隻が撃沈、または大破)	ムサイ型、チベ型以下41隻 (30隻以上が撃沈、または大破)
モビルスーツ	RGM-79型他、総計4800機 (未帰還機、4000機以上)	O9R型他、総計3600機 (未帰還機、3000機以上)
戦闘機	ブースター装着コア・ファイター 型以下、総計900機	ガトル型戦闘機以下、総計830機 (未帰還機、120機以上)
突撃艇ほか	バブリック型他、総計110隻 (ほぼ全滅)	ジッコ型他、総計46隻 (ほぼ全滅)
その他	MS母艦として運用されたコロ ンブス型輸送艦が84隻。他に、ミ サイル駆逐艦、ビーム砲艦などが多 数参加。また艦内に収容できない MSは、各艦の甲板上などに固定 され、前線まで輸送された。	この他ジオン軍は、MA-05以 下、少数ながらもMAを投入。中 には、未完成だった試作機も駆り 出されたという。なおア・バオア・ クーに設置されたビーム、ミサイ ル砲座は、ソロモンよりも増設さ れている。

第1波攻撃

8時10分、連邦軍は第1波攻撃に、バブリック型突撃艇と、宇宙戦闘機、掃海艇を差し向けた。

ソロモンの時と同様、ビーム攪乱幕を形成する作戦だった。

総司令官のギレンは、これに冷静に対処。MS隊を温存し、対空ミサイルで応戦を開始した。

「ここを攻めるには、やはり数が少なすぎたな」

ほくそえむギレン。

ソロモンの戦訓から、ア・バオア・クーにはミサイル砲座が増設されていた。そのためビーム攪乱幕を形成するはずだったバブリック型突撃艇は、次々に撃破されていった。「各艦に指示。MS隊急速発

進！ア・バオア・クーに取り付き、砲座を一掃せよ！」
8時40分、しびれを切らした連邦艦隊は、MS隊を放出。各艦も、各個にア・バオア・クーに斬り込んだ。

明らかに無謀な戦いさまではあったが、ソーラ・システムを積んだ輸送艦は先のソーラ・レイ照射で失われており、他に打つ手がなかったのだ。

「1人でもいい。1人でも残れば、我が軍の勝ちだ」

かくしてア・バオア・クー周辺の空域で、かつてない壮烈なMS戦と、至近距離での艦隊戦が展開された。

数で押す連邦軍に、ジオン側は、ドロス型空母を中核とした機動艦隊で応戦。特にNフィールドに置かれていたドロスと、Sフィールドのドロワは、よく敵の猛攻に耐えた。125



MS隊突入

9時40分、戦局に変化が起こった。やや遅れて攻撃に加わった連邦軍第3艦隊の奮戦により、Sフィールドのドロス型空母ドロワが沈んだのだ。これにより、Sフィールドの戦闘力は大幅に低下する事となった。

「全機、Sフィールドが手薄だ！ このまま一気にア・バオア・クーに切り込め！」
第3艦隊の旗艦「ヒペリオン」に乗るベーター中将が檄を飛ばす。

MS隊は沈んだドロワを楯にしつつ、ア・バオア・クーに突入した。

「外からドンバチやったって、ラチあかないのよね！」

MSパイロット達は、辛くもア・バオア・クー内部に到

達。ビーム砲座、ミサイル砲座を次々に破壊していった。

そして同じ頃、司令室のギレン総統が倒れた（戦後の調査により、キシリア・ザビが殺害したと判明）。

白兵戦

10時から11時にかけて、戦いは乱戦の様相を呈してきていた。

ジオン側は、Sフィールドに開いた穴をうめるためNフィールドのMS隊を振り分けた。しかしそのため、ア・バオア・クー自体の総合戦力の低下を招いた。

また連邦のMS隊によって対空砲座の多くが沈黙。自航不能になった連邦艦艇は、そのままア・バオア・クーに接舷。白兵戦を挑んだ。

「ここは敵陣の下真ん中だ！



味方に当たる事はない！ 全ビーム、全ミサイル、全て撃ち尽くせ！ 全てカラになったら脱出させてやる！」

接舷した、戦艦ヒペリオンのベーター中將はそう指示を出し、自ら対MS用無反動砲をかつぎ艦外へ出た。

古今、一將軍が無反動砲を担ぎ敵地に乗り込むなど例がない。

余談だが、ベーター中將はこの戦いから無事に生還。後にルナツー方面軍の総司令官となり、グリプス戦役の際に戦死している。

乱戦に次ぐ乱戦

このベーター中將を代表的な例として取り上げたが、他の将兵達も、同じように果敢に戦っていた。

中には、自らの反応炉を暴

走させ、続く艦艇の血路を開いたサラミス型巡洋艦「フィラデルフィア」のような例もある。

「お前ら、負け戦で新年を迎えたいか！ どうせだったら、勝利の美酒に酔おうぜ！」

これは第22MS機動大隊所属の、ミヤ・サミエック少佐の言葉だ。

まさに血で血で洗う戦いという言葉が似つかわしかった。すでに戦術はなく、あるのはただ、壮烈なサバイバル戦のみだった。

戦史家の多くが、ソロモン戦より、このア・バオア・ク一戦こそを1年戦争最大の戦いと称するのには、そういう理由があったのだ。

投入された兵力は、ソロモン戦よりも少ないのにもかかわらず。

月・日・時	戦局の推移
12.29	星1号作戦最終段階。連邦軍第1連合艦隊、ソロモン出港。
12.30 08.20	レビル提督、グレート・デギンからの通信を受ける。
09:00	グレート・デギン、レビル艦に接舷。
09:05	ジオン軍、ソーラ・レイ発射。基本照準ゲル・ドルバ。
	連邦艦隊の30%以上が失われる。
12.31 00:00	連邦軍上層部、星1号作戦の強行を決定。
05:00	連邦軍、残存艦隊の再編成終了。
08:10	ア・バオア・クー攻略戦の開始。
	連邦軍、突撃艇を主力とする第1次攻撃隊を発進させる。
08:40	連邦艦隊からMS隊発進。
09:25	ア・バオア・クー司令室にて、ギレン・ザビ戦死。
09:40	ジオン軍大型空母、ドロス沈没。
	連邦MS隊、ア・バオア・クーに突入開始。
10:00	至近距離での乱戦が続く。
10:10	ドロス型空母、ドロワ沈没。
12:05	キシリア・ザビ、ア・バオア・クーから脱出直前、乗艦していたザンジバル型巡洋艦もろとも戦死。
12:15	ア・バオア・クーの電力供給、一部区画を除き停止。
18:00	ジオン共和国臨時政府、連邦政府に終戦協定締結を申し入れる。
01.01 15:00	地球連邦政府とジオン共和国の間で、終戦協定が結ばれる。 ジオン独立戦争（後に1年戦争と呼称）終結。

戦いの趨勢

正午を過ぎる頃に、すでに戦いの趨勢は決した。

ア・バオア・クーの多くの兵士は戦意を失いつつあり、中には逃走する艦も少なくなかった。

戦線離脱した艦の中には、勇猛を讃えられ、3年後に反連邦運動を起こすデラース少将と、その指揮下にある艦艇もあった。

そしてまた、ジオンが密かに建造していた宇宙要塞（火星）木星間の中間軌道にあつた「アクシズ」へと落ち延びる艦もあった。

そのような出来事を経て、0時15分、ア・バオア・クー中央部ミサイル工場に火災が発生。

これが機となり、ア・バオ

ア・クーの全機能は停止した。そのミサイル工場の真下には、電力供給の基幹となる配電管が、網の目のように走っていたのだ。

宇宙要塞ア・バオア・クーは落ちた。

そしてザビ家最後の一人であるキシリア・ザビもまた、脱出用の機動巡洋艦ザンシバルとともに、炎に飲み込まれたのである。

ジオン本国の動き

その日の午後、連邦艦隊は、生存者の救出、残敵の掃討に明け暮れた。

一方ジオン本国では、指導者であるザビ家の一族朗党が死に絶え、状況は混乱を極めた。

しかしジオンには、まだ月のグラナダと本国に残され

戦場の英雄たち



ギレン・ザビ総帥

実質上、ジオン公国の全権を握る独裁者。知的で冷酷。戦闘指揮に関しても、類まれなる才覚を見せる。しかし連邦艦隊もろとも父デギンを殺害した事から、実の妹キシリアの憎しみを買い、作戦中に射殺される。(その事実は、長らく隠べいされ続けていた)だが彼を信奉する者は多く、カリスマ的魅力を多分に秘めていた。



ダグラス・バードー中将

第6艦隊司令官。自艦ヒベリオンをア・バオア・クーにあえて着底させ、続く味方のために突破口を開いた。先に戦死したレビル提督とは、士官学校での同期であり、このア・バオア・クー戦を、その弔い合戦と考えていたようだ。部下から「闘将」と呼ばれるほど、普段から血気さかんな將軍だったと言われる。

た戦力があつた。

これを用いれば、2度に渡る宇宙要塞攻略戦に疲弊した連邦軍を叩くこともできるだろう。

だが、それはジオンにしても破壊を意味していた。

仮に宇宙に在る連邦艦隊を殲滅できたとしても、連邦軍の国力は底無しである。早々に艦隊を再編し、今度こそジオン本国を叩きにくるだろう。すでに艦隊の基地となる二つの宇宙要塞も、連邦の手に落ちていくのだ。

残されたジオン公国議会は、直ちに共和国政府としての体を整え、(この時、多くのザビ家寄りの人間が暗殺、もしくは拘引された)サイド6を通じて、連邦政府に終戦協定の締結を申し入れた。

連邦軍にとっても、これ以

上の戦いは国力をいたすずに消耗するだけであり、経済崩壊に陥るのは、火を見るより明らかだった。

「ジオンが何を言おうと構わん。ジオン・ダイクンも、ザビ家一党も今はない。自治権が欲しくばくれてやれ。後の事は、どうとでもなる」

連邦政府高官達は、自分達の身の保身しか考えていなかった。ここでジオンに大きな貸しを作り、その上で、自分達に従属させようと考えていたのだ。

かくして、残された連邦艦隊の中から無傷の艦艇が集められ、政府高官達の乗る連絡艇の護衛艦隊が編成された。協定の批准の場所は、月面はグラナダ。

その日時は、宇宙世紀0080、1月1日15時。

終 戦 協 定

かくして、1年間続いた史上最大の戦争は幕を閉じた。しかし政治上戦争は終結したが、残された敗残兵達は、密かに地下に潜み、ジオン復興の機会を待ち続ける…

グラナダの調印

月面のグラナダ上空を埋めつくす、連邦艦隊。

ソロモンとルナツーに帰還途中の全艦艇が、ジオン側への示威行動のために集められたのだ。

これは、これからのジオン共和国の行く末を、暗示しているかのようにも見える。

そして、お互いの全権団が条約内容を確認した後、調印が行われた。

ここに、地球連邦政府とジオン共和国間の終戦条約は批准され、丸1年間に渡った戦いは、その幕を閉じた。

1年前までは113億だった人類は、この時、すでに54億。歴戦の將軍達も、そのほとんどが、帰らぬ人となっていたのである。

戦後の始まり

ア・バオア・クー陥落と同時に、ジオン国内および各地の基地、研究施設では、大規模な終戦処理が行われていた。

まず、軍機に属する大部分のデータが全消去され、新兵器、秘密兵器の類も、図面、データ、試作機などが急ぎ処分された。

中にはそれらの秘密を持ち、連邦に取り入ろうとする研究者、軍高官などもいた。

これに対応し連邦軍は、終戦条約締結と同時に、駐留軍と称し、サイド3に宇宙艦隊を派遣している。

使用可能な兵器の封印と、その総数の確認。さらに、先の軍事機密等の入手のためである。

ジオン国内の国防軍の中に

は、徹底抗戦を叫ぶ部隊も少なくなかった。

しかし共和国政府の素早い対応により、連邦軍と実際に砲火を交えたという記録はない。

ジオンの残した物

ア・バオア・クー陥落は、即座に、地球に留まるジオン軍にも伝わった。

ほとんどの部隊が降伏し、抗戦を行う部隊も、間もなく鎮圧された。

もちろん中には、地下に潜伏し、ジオン復興をもくろむ輩もいたが。

連邦軍は、ジオンの軍需工場を全て没収。MS-06以下、ジオンの主要なMSの多くを、無傷のまま入手した。そして数多くの最新兵器、秘密兵器の捕獲にも成功。戦

各戦線の局面と戦局の推移

両軍の残存兵力

	連 邦 軍	ジ オ ン 軍
兵員	総兵員数3600万人 (開戦時の、およそ60%が戦死)	総兵員数 300万人 (開戦時の、およそ80%が戦死)
宇宙艦艇	戦艦、巡洋艦の総数128隻 (建造途中の艦、90隻以上)	戦艦、巡洋艦の総数46隻 (行方不明艦も多数存在)
モビルスーツ類	実動可能機、8000機以上 (生産中の機、4000機以上)	実動可能機、2000機前後 (生産中の機、800機前後)
各種機動兵器類	宇宙、地球用戦闘機 3万機以上 (生産中の機、8000機以上)	宇宙、地球用戦闘機6000機 (生産中の機、1200機)
拠点	地球全域は、ほぼ連邦の手に戻っていた。宇宙拠点に関しては、ルナツー、ソロモンの二つが機能。さらに戦争が伸びた場合、要塞建造用の小惑星を移送してくる計画もあった。なお終戦後、ア・バオア・クーも連邦の手に	地球上の拠点は、ほぼ全て連邦軍に奪回されている。宇宙空間においては、月のグラナダと、サイド3本国しか残されていないかった。(ただし火星、木星軌道間に、小惑星基地アクシズが存在)

連邦軍内の事情

終戦後、しばらくは、ジオン残党の掃討戦が展開された。しかし何ヵ月かするとそれ

後の連邦軍再建に役立たせた。例えば、ビーム偏向フィールドや、サイコミュ・システムなどは、全てこの時、ジオン側から奪取した物である。これにより、連邦軍のMS開発は、一足飛びに進歩を遂げた。さすがに、MS開発にかけては先鞭を切ったジオン軍。廉価版のRGM-79など問題にもならない高性能機が、多数開発途上にあつたのだ。これらの技術を手に入して、後に連邦軍は高性能機開発ラッシュの時を迎えるのだが、それは戦後の傷跡の癒える、5年ほどしてからのものである。

も落ち着き、退役希望者の募集が募られた。当然、徴収兵は、その責務から解放された。さすがに終戦期、多くの兵を抱える余裕はなかったのである。だが優秀な人材から先に軍を去って行き、結果的に残ったのは、国粹主義者か、他に行き場のないような者ばかりだった。これが戦後の連邦軍を弱体化させていく、大きな要因となった。またRX-78NT1などという機体を開発したにも関わらず、連邦軍は戦後、ニュータイプというものの存在を完全に否定。ニュータイプ・パイロットと言われていた者にも、特筆すべき報償はなく、逆に危険な存在とされ、飼いか殺し状態に置いたのである。



ジオンの亡霊

一方、勇猛を讃えられたジオン軍兵士達が、おとなしく連邦に下るはずはなかった。何度か書いたように、ある者は地球のいづこかに立てこもり、またある者は、ジオン寄りのコロニーに潜伏した。中でも大規模な物は、小惑星帯に浮かぶ、小惑星アクシズだった。

終戦直後の混乱に乗じ、無数の艦隊がアクシズへと逃走した。

宇宙国家ジオンの艦艇は、そのほとんどが、地球圏外航行能力を有していたのだ（もともと、経済的な軌道を選択しても、木星軌道までがせいぜいだ）。

もちろん連邦も、そんな動きは察知していたが、追撃

に振り向けられるほどの余剰戦力などありはしなかった。また、たかが小惑星に立てこもった数千人数度の部隊で、何が出来るかと判断したのであろう。それを、みすみす黙認したのである。

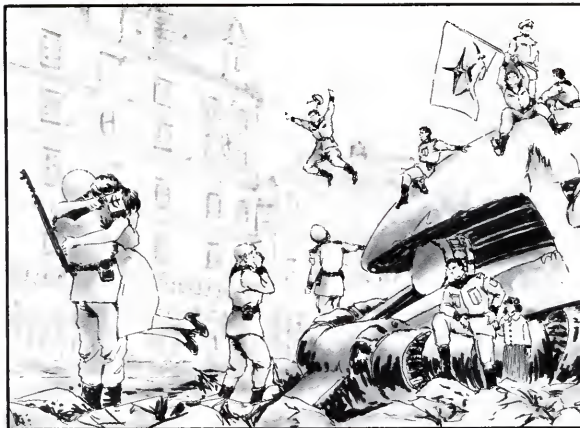
連邦政府高官達にとって、地球の復興こそが、優先すべき全てだったのである。

しかし、この判断の甘さが、後に命取りになる。

ジオン・ダイクンの忘れ形身、シャア・アズナブルの反乱までの十数年間、連邦政府は、延々、ジオンの亡霊に悩まされ続ける事になるのだ。

1月1日のあの日。

あの日に全てが終わったのではなく、あそこから、全てが始まったのかも知れない。



今大戦の被害

死傷者	全人口113億のうち、総計59億人が死亡。重軽傷者の数、把握できず。 (死亡者の大部分は、開戦時の1週間戦争、ルウム戦役による物) 残存人口、54億人。おもに地球とサイド3。
地球の環境	コロニー落しにより、オーストラリア大陸の30%が水没。 第1次災害、第2次災害で、太平洋、インド洋の沿岸地帯の都市、壊滅的打撃を受ける。以後異常気象が6年余も続く。
宇宙の環境	大部分のコロニーが壊滅。(サイド1、2、4、5全滅) 無数の破片、残骸が、衛星軌道上にリング上に浮遊。戦後20年近く経った現在も、その破片の大半は宇宙に残り続ける。
経済	経済破綻。戦後の経済に見られる大規模なインフレーション。 また戦時借款などによる市場の損失、天文学的数字に。 戦争によるあらゆる方面の損害額、把握する者なし。
ほか	唯一、人類の半数が死亡した事により、戦後の物資不足は回避された。 しかし労働可能年齢の人口(特に男子)不足は甚だしく、女性の各方面への進出が、より盛んとなる。

兵隊よもやま話 ②

戦争が人間によって遂行される以上、戦場での噂は

なくならない。遥か古代より、戦場での噂は、時として兵士の士気に大いに影響を与えてきた。

ここでは、本大戦中に両軍の間でささやかれた噂のいくつかを、見ていくことにしよう。

●敵は強力な機動歩兵

これは開戦当初、連邦軍内でささやかれた噂である。当然MSの事であるが、大気のない宇宙空間では遠近感が乏しく、その大きさを把握することは難しい。そのため18mのMSを、機動

戦争中流れた、数々のウワサ

装甲服を着込んだ歩兵と勘違いしたのだ。

もっともすぐさま正しい

情報が各部隊に伝達されたが、開戦当日には、この噂が広く流布。多くのコロニー守備隊が判断を誤り、貴重な時間を費やした。

●コロニー内に伝染病

これも開戦当初の噂である。ジオン軍はコロニー住民抹殺の際、無色無味無臭のガスを使用した。

そのため近隣のコロニーでは、謎の宇宙病原菌の存在が囁かれ、多くの住民の間でパニックが起こった。もっともその住民達も、間

もなく先の死亡者達の後を追ったのだが。

●連邦軍の超兵器!

生粋の宇宙育ちであるジオン軍の兵士達は、地球進攻作戦の際に地上におり、

笑い話とも言うべき数々のエピソードを残している。

例えば、雷や竜巻の類の自然現象。

多くの兵士が、これを連邦軍の新兵器と見誤った。

竜巻に向けてメガ粒子砲を乱射したなどの、ほとんどドン・キホーテまがいのエピソードも残っている。

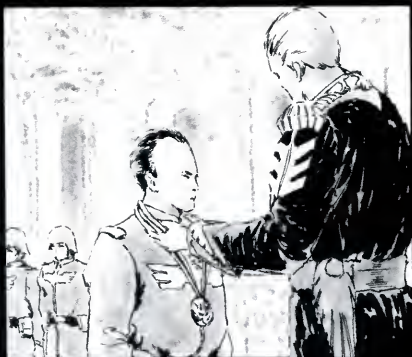
またアフリカなどの熱帯においては、免疫が完全で

なかったためか、多くの兵が風土病などに倒れた。これをジオン兵は、連邦軍の生物兵器と勘違いし、あわてふためいたのである。

●ソロモンの悪霊

連邦軍がソロモンを陥落させ自らの要塞として使用していた折、姿の見えない敵からの攻撃を受け、数隻の巡洋艦が撃沈されている。

連邦兵士は、これをソロモンに巣くう悪霊の仕業だと恐れおののいたが、後にサイコミュに制御された超小型戦闘メカ(ビットと呼称される)による遠隔攻撃と判明した。



第 3 章

1年戦争 エースパイロット名鑑

かつてない大規模な戦いであった1年戦争のさなか、それまでの多くの戦争同様、数多くのエースパイロットが生まれては、消えていった……。

特にこの戦いで生まれた新兵器MSのパイロット達は、ある時は戦闘機を、ある時は艦艇を、そしてまたある時は敵のMSを相手に数多くの伝説を残していった。

しかし現在その資料の多くは散逸し、文献によっては、撃墜スコアもくい違っている有様だ。

そこで本書では、残る資料を可能な限り集め、当時の軍関係者にも取材し、出来る限り完全な撃墜スコアを表記した。特にジオン軍に関しては、最も詳細な資料と自負できる。

「はじめに」 エースパイロットの条件

エースとは何か？

そもそもエースとは、旧フランス語で「傑出した者」という意味を持っている。それが戦闘機出現の際、5機撃墜を果した者、というように変わっていったのだ。

この5機撃墜という条件も、たまたま最初の撃墜王と呼ばれた人物の撃墜スコアがそうであっただけで、特に意味のあるものではない。

しかし後々、戦闘機のパイロット達の間で、5機撃墜がエースの称号として語り継がれていったのである。

MSのエース

これはMSにおいても同じ

く、敵MS5機撃墜がエースの条件となっている。

ところが開戦当初、連邦軍はMSを有していなかった。従ってジオン軍からは、一人のエースも生まれないままだったのだ。

これが士気にかかわると判断したジオン軍上層部は、巡洋艦クラス以上の艦船5隻以上撃沈を「シッブス・エース」とし、勲章授与の対象とした。

それ以後、5隻以上の艦船撃沈が「シッブス・エース」。5機以上のMS撃墜が「MSエース」という呼称で、ジオン、連邦を問わず用いられた。新時代のエースの登場である。

撃墜機数の確認

さて、両軍のエース達のトータル・スコアを比較すれば判るが、ジオン軍のエース達の方が、シッブス・エース、MSエースともに格段に多い。

これは連邦より早くMSを使用していたため、練度の高い優秀なパイロットが揃っていた点と、数の上で、常に守勢に立たされていた事による。

古くからエース・パイロットが多く生まれる国は、敗戦国と相場が決まっている。これは敵が数で常に優位で、出撃すれば、索敵に時間をかけなくて済む……という理由による。

しかし連邦軍側もなかなか健闘しているが、この数字、実は必ずしも正確な物と言え

ない。

連邦軍の撃墜機数確認は自己申告制であり、ガンカメラによる撃墜確認も、形だけの物となっていた。

それに比してジオン軍は厳格で、必ず自分以外のパイロットの証言が必要な上、ガンカメラでの映像も細密にチェックされた。

このように、撃墜機数確認の中にも、両軍の気風が現れているのである。

なお撃墜機数スコアでの階級は最終階級。また所属部隊は変わることも多く、ここでは割愛させていただいた。

1年戦争エースパイロット名鑑

連邦軍：MSパイロットのエースたち

- ① テネス・A・ユング (少佐) MS：149機 艦船：3隻
使用機種=RGM-79GS、79SC
- ② アムロ・レイ (少尉) MS：142機 艦船：9隻
使用機種=RX-78-2
- ③ リド・ウォルフ (少佐) MS：68機 艦船：4隻
使用機種=RX-77D、RGC-80、RGM-79SP
- ④ シャルル・キッシンガム (中尉) MS：52機 艦船：2隻
使用機種=RGM-79
- ⑤ ロン・コウ (少尉) MS：43機 艦船：3隻
使用機種=RGM-79SC
- ⑥ フランクリン・ノボトニー (中佐) MS：43機 艦船：1隻
使用機種=RGM79GS
- ⑦ ハイイツ・ベア (中尉) MS：37機 艦船：2隻
使用機種=FA-78-1
- ⑧ デリス・ハノーバー (少尉) MS：32機 艦船：なし
使用機種=RGM-79

公国軍：MSパイロットのエースたち

- ① ブレニス・オグス (中佐) MS：193機 艦船：8隻
使用機種=MS-06F、06F2、09R、14C
- ② ノルディット・パウアー (中佐) MS：191機 艦船：4隻
使用機種=MS-06S、06K、06R、09RII
- ③ ジョニー・ライデン (少佐) MS：185機 艦船：6隻
使用機種=MS-06F、06RII、14C、14B
- ④ エリック・マンスフィールド (大佐) MS：156機 艦船：3隻
使用機種=MS-05B、06S、06R、14S
- ⑤ シン・マツナガ (大尉) MS：141機 艦船：6隻
使用機種=MS-06F、14JG
- ⑥ ギャビー・ハザード (中佐) MS：138機 艦船：2隻
使用機種=MS-05S、06FS、06RII
- ⑦ グレニス・エスコット (中尉) MS：103機 艦船：12隻
使用機種=MS-06S、MA-05
- ⑧ ロバート・ギリアム (大尉) MS：115機 艦船：6隻
使用機種=MS-06S、MSM-07E、06RII、14S

連邦軍 アムロ・レイ大尉

連邦の白き流星

アムロ・レイは、当初民間人でありながら連邦軍初のMSパイロットとなり、さらに初のMSエースともなった。

彼の活躍は、高性能機RX-178とともに、すでに神格化されているくらいもある。

1年戦争終結後、ニュータイプとして危険人物扱いされ軍にも黙殺された形となったが、先年の「シャアの動乱」以後、その存在と活躍ぶりが、にわかにクロイズ・アップされた。

彼の戦果は調べれば調べるほど興味深い物ばかりで、まったく訓練を受けていなかったにもかかわらず、最初の出撃で2機のMS-06を撃破

している。

MSエースとなったのは、それからわずか数日後であり、この事実はまさしく驚異と言えるだろう。

これも、彼のニュータイプとしての覚醒ぶりを示す良き判断材料だが、この事実を長らく公表しなかった連邦軍にはつくづくあきれるばかりである。

話を戻そう。大戦中ホワイト・ベースに乗艦していた彼は、圧倒的物量で迫るジオン軍追撃部隊をこごとく退け、瞬く間に100機撃墜の舞台を突破。ソロモン攻略戦時には、シブス・エースとしても頭角を現した。

彼の艦船撃墜スコアは連邦軍最高に位置するが、わずかな数分の戦闘で、ムサイ艦2隻を撃破した事すらあると言われる。

しかも彼の戦果はホワイト・ベースの他のMSパイロットの確認もあり、非常に信頼できるスコアとなっている。

さらにここではスペースの都合で割愛したが、レイ少尉は、ドズル・ザビ搭乗のMA-108の他、総計5機以上のMAをも撃墜していると言われる。

もしそれが事実なら、大戦中ただ一人の、MAエースということになるのだが。

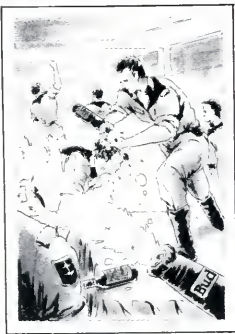


連邦軍 リド・ウォルフ少佐

踊る黒い死神

ウォルフ少佐は、かねてからMSパイロットとして教育されていた人物ではなく、もともと戦闘機パイロットだった。しかし人員不足から、促成教育でMSパイロットに仕立てられ、戦場を送り込まれたのである。

だが、戦場に出てからの彼の活躍は目ざましく、アフリカ掃討戦で21機撃墜を記録し、わずか1週間でエースに。その後は宇宙に上がり、主だった戦場のほとんどで活躍した。彼の愛機は黒色で塗装されていたが、これは戦闘機パイ



ロット時代からの物であり、ジオン軍のパイロット達は、戦場を乱舞する彼の機を、
「踊る黒い死神」と呼称した。ア・バオア・クー戦で戦死。

公国軍 シャア・アズナブル大佐

赤い彗星：そしてジオンを継ぐ者

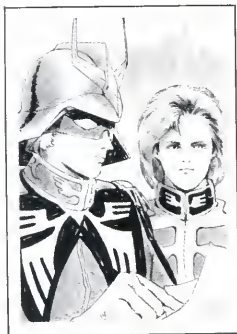
赤い彗星として勇名をはせた伝説的人物であり、ジオン・ダイクンの遺児として、先年大規模な軍事行動を行った張本人でもある。

大戦時からその戦闘における優れたセンスを見せた彼は、ルウム戦役時、5隻の戦艦を

撃沈。一躍、シブス・エースとして名乗りを上げた。

彼の愛機は常に真紅の塗装が施されており、戦場の兵はその赤い機体を見ただけで戦意を喪失したと言われる。

そしてそのカラーリングは、ネオ・ジオン総帥となった後、も踏襲されたのである。



1年戦争後の戦果を加えれば、そのMS撃墜機数は300を確実に越すものと思われるが、詳細は不明だ。

公国軍 ブレニア・オグス中佐

ワンシヨット・キラのブレニア

大戦中、両軍を通じてのトップ・エース。

開戦時から終戦まで、常に宇宙空間での最前線で戦い続けてきた、歴戦の勇士である。彼は無駄弾を撃つことを極端に嫌い、常に正確無比な射撃を心がけた。それがいつし



か、彼にワンシヨット・キラ（一撃必殺）の愛称を与えたのである。

だが普段は、その戦法からは想像もできないような温和な人柄で、しばしば自分の撃墜スコアを、新兵に譲ってやる事もあったという。

大戦末期は

MS教導師団で後進の兵の育成に全力を注いでいたが、人員不足のため、訓練の行き届かない兵を出陣させるのに終始反対の立場にいた。

公国軍 ララア・スン大尉

ソロモンの姿なき亡霊

最近まで、その存在は口頭でしか伝えられていなかった伝説上の人物。

優れたニュータイプ能力を利し、MAN-08の遠隔制御メカ・ビットで、ソロモンに停泊する多数の戦艦、巡洋艦を撃破した。



その攻撃は連邦軍の兵の間で「ソロモンの姿なき亡霊」として恐れられた。

だが彼女の戦果は軍の公式記録には残されず、ごく一部の者にしか知られていなかった。それが今回、当時の軍の交信記録によって明確にされ

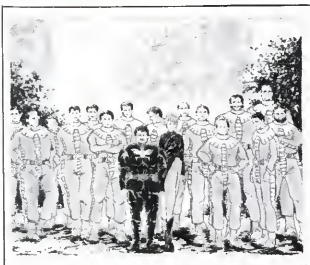
たのは、本書最大の収穫だろう。不鮮明ながら当時の写真も入手できたので、併せて掲載する。戦後40年たって、今回初めて掲載される物である。

公国軍 ランバ・ラル隊

青き巨星ひきいるゲリラ戦集団

青い巨星と呼ばれるエースパイロット、ランバ・ラル大尉率いる戦闘集団が、ランバ・ラル隊である。

この隊はエース部隊として



も誉れ高く、まず隊長のランバ・ラル自身が、ルウム戦役と1週間戦争などで6隻の巡洋艦、戦艦を撃沈している他、アコース、コズンといったパイロット達も、残念ながらエースとして記録はされていないが、それに見合うだけの勲功を立てている。

特に本隊は、ドズル・ザビ中将の直属部隊として特殊任務に着手が多く、幾多の戦場で、密かに友軍の援護などを行った。

彼らはホワイト・ベイス隊追撃の任務を受け、逆に撃破された。

公国軍 サイクロプス隊

特殊工作のプロフェッショナル隊

サイクロプス隊。彼らは月のグラナダ基地に属する特殊工作隊であり、MSを駆使しての戦闘行動の他、生身での諜報活動や破壊工作などを、



幅広くこなす。言わばオールマイティな、戦争のプロフェッショナル集団なのだ。

少数精鋭主義の徹底された部隊であったが、大戦末期は十分な人員の補充もなく、ただでさえ少ないメンバーが、わずか4人という時期もあった。

これは隊長のシユタイナー大尉の立ち回りの悪さによるものとされるが、かつて様々な任務に奔走させた部隊を冷遇するとは、軍内部の不条理を感じられずにはいられない。

結局陽動部隊として扱われ、全員戦死した。141

公国軍 黒い三連星

レビル將軍を捕虜とした伝説の3人

黒い三連星。それはガイア、オルテガ、マッシュというメンバーで構成された、独立小隊である。

開戦前からその能力ゆえ、軍内での立場を優遇されていた彼らは、1小隊にして、独自の指揮系統によって行動する事が許されていた。

その独自の指揮系統とは、すなわち、キシリア・ザビ中将直属の立場である。

彼らはその立場を存分に生かし、ルウム戦役では、あのレビル將軍を捕虜とする事に成功。その名を轟かせた。

さて、彼らの戦果であるが、三位一体の攻撃を身上としていたため、逆にスコアは3分

の1とされ、個人単位であればそれほど物ではない。

しかしそれでも、コンビネーション攻撃で14隻もの戦艦、巡洋艦を沈めた事実は特筆に値する。これが3分の1されると、6隻となり、ギリギリ、エースに届かない。だが彼らは、3人ひと組の戦果を全てと考えており、その点に關しての不平、不満はなかった。

硬い絆で結ばれた彼らであったが、オデッサ作戦の援軍として地球に降りた際、ホワイト・ベースと遭遇。連邦軍のエース、アムロ・レイ少尉駆るRX-78に、もちろんも撃破されている。



本書参考資料

本書を作成するにあたり、特に参考とした書籍をここに掲載した。(順不同)なお資料作成において、有形無形の品々や証言を提供し

ていただいた方々には、本書の完成をもって
お礼としたい。(1年戦争全記録・0094
版編集室)



- 『1年戦争』 マウント・フジ出版
『モビルスーツの発展』 バスコンル・パブリック社
『地球連邦軍の戦力』 バスコンル・パブリック社
『ジオン軍、その栄光と興亡』 バスコンル・パブリック社
『宇宙戦争論』 マクセイ・ブックス
『世界のモビルスーツ』 ダイナミック・ミリオンKK
『世界の宇宙艦艇』 ダイナミック・ミリオンKK
『世界の海上艦艇』 ダイナミック・ミリオンKK
『1年戦争を見つめて……』 ノア出版
『実録! これがモビルスーツだ』 バンダイ・モデルクラフト
『EBシリーズ MS大図鑑』 バンダイ・モデルクラフト
『MS-ERA』 バンダイ・モデルクラフト
月刊M』 各号 バンダイ・モデルクラフト
『兵器最先端95 宇宙艦隊』 帝人社
『宇宙艦船・全記録』 帝人社
『図解・現代の機動兵器』 帝人社
『宇宙の超兵器』 ワン・ブリッジ社
『宇宙世紀・100億人の記録』 音羽社
『1年戦争のモビルスーツ部隊』 ジャパン出版
『地球連邦軍、宇宙艦隊の全容と記録』 メガロ社
『グレート・デギン帰還せず』 ドイツェラント書店
『4人の宇宙艦隊司令長官』 ドイツェラント書店
MSジャーナル各号 MSジャーナル社
MSジャーナル別冊『どろ沼の激闘オデッサ』 MSジャーナル社
" 『作業用MS戦場写真集』 MSジャーナル社
" 『激突ソロモン戦』 MSジャーナル社
" 『ア・バオア・クー』 MSジャーナル社
" 『水陸両用モビルスーツのすべて』 MSジャーナル社
" 『MS-06とバリエーション』 MSジャーナル社
宇宙の艦船各号 宇宙人社
宇宙の艦船別冊『1年戦争のジオン軍艦』 宇宙人社
" 『1年戦争の連邦軍艦』 宇宙人社
モビルスーツ・ファン各号 オド・コーポレーション
アナハイム広報誌『ルナリアン』 各号

STAFF

企 画

株式会社メディアワークス
第4編集部・書籍編集課(安藤利明)

構成・編集

スタジオ・ハード
山口 宏
平沢正弘
木川明彦

イラスト

大河原邦男
石橋謙一
前田真弘
根木義雄
中村淳一

装 丁

タケモトアツシ (t-DESIGN LAB.)

カバーイラスト

As'まりあ

デザイン

ユメックス株式会社
西山祥子
今野椰子

協 力

株式会社サンライズ企画室

※本書は1991年3月に株式会社バンダイ・出版課より発行されたエンターテインメントバイブル・シリーズ「機動戦士ガンダム 戦略戦術大図鑑」を復刻した物です。文章・データに2005年現在と合致しない部分がございますが、原書のままです。ご了承ください。

※ご協力いただいた方々の所属は発行当時のまま記載しております。

発 行 2005年3月20日 初版発行

発行者 佐藤辰男

発行所 株式会社メディアワークス

〒101-8305 東京都千代田区神田駿河台1-8東京YWCA会館
TEL03-5281-5243(編集)

発売元 株式会社角川書店

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
TEL03-3238-8605(営業)

印刷所 共同印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えます。

© 創通エージェンシー・サンライズ

宇宙世紀ボックス

機動戦士ガンダム 戦略戦術大図鑑

PART.15 一年戦争全記録

CONTENTS

THE YEAR OF WAR 2

YEAR OF WAR MOBILE SUIT GRAFTY 10

第1章 戦争の発端と両軍の戦力

歴史的背景 18

地球連邦軍の戦力 22

ジオン公国軍の戦力 28

第2章 各戦線の局面と戦局の推移

開戦〜1週間戦争 40

ルウム戦役 48

ジオン軍地球進攻作戦 56

グリラ戦の経緯 62

サイド7遭遇戦 66

ホワイトベース追撃戦 72

オデッサの戦い 80

ベルファスト上陸戦 88

ジャブロー上陸作戦 94

アフリカ掃討作戦 100

ソロモン攻略戦 104

RX-78-NT1強奪作戦 112

ソーラ・レイ照射作戦 118

ア・バオア・クー攻略戦 122

終戦協定 130

第3章 1年戦争エースパイロット名鑑 135

1年戦争戦略地図 38

兵隊よもやま話① 両軍の兵士達の生活スタイル 34

兵隊よもやま話② 戦争中流れた、数々のウソ 134

STRATEGY ENCYCLOPEDIA NO.15

戰略戰術大圖鑑

PART.15_一年戰爭全記錄]



HISTORY OF ONE YEAR WAR

STRATEGY ENCYCLOPEDIA NO.15

戰略戰術大圖鑑

[PART.15_一年戰爭全記錄]

HISTORY OF ONE YEAR WAR

MS NO.15 ENCYCLOPEDIA

.....

HISTORY OF ONE YEAR WAR

MS NO.15 ENCYCLOPEDIA

.....

HISTORY OF ONE YEAR WAR

OFFICER'S MANUAL FOR THE ARTILLERY

戰略戰術大圖鑑
[PART-15]
第二次世界大戰

NO
15

1915

戰術戰術大圖鑑

1915

戰術戰術大圖鑑

1915

戰術戰術大圖鑑

1915

戰術戰術大圖鑑

1915

戰術戰術大圖鑑

1915

戰術戰術大圖鑑

1915

戰術戰術大圖鑑

1915

戰術戰術大圖鑑